

高岡市埋蔵文化財調査報告第 13 冊

中曾根西遺跡 調査報告

—— 平成 15 年度 県道姫野能町線改良工事にともなう発掘調査 ——

2005 年 3 月

高岡市教育委員会



調査区全景（北西から）



3区 方形周溝墓 SZ01（北から）



3区 井戸 SE10 遺物出土状況（西から）

序

「中曾根西遺跡」は高岡市の北東部に所在する遺跡です。周辺には、弥生時代後期を中心とする中曾根遺跡をはじめ、多くの遺跡が所在することが周知されておりました。このたび、県道姫野能町線の改良工事が行われることになり、中曾根西遺跡の一部が、道路で恒久的に覆われたり破壊される可能性が生じたため、事前に発掘調査を行い、埋蔵文化財の記録保存を実施することになりました。

調査の結果、中曾根西遺跡は弥生時代から近世までの複合遺跡であることが判明しました。中心となる弥生時代後期では、大規模な溝や井戸、そして方形周溝墓等が確認されたほか、当時の活発な活動を窺わせる多量の土器や石器などといった遺物の出土がみられました。

この報告書が今後の学術研究や郷土の歴史究明の一助となりましたら幸いです。

末尾になりましたが、この発掘調査を実施するにあたり、各関係機関や地元の皆様には、多大なご協力をいただきました。ここに厚く御礼申し上げます。

平成 17 年 3 月

高岡市教育委員会

教育長 村井 和

例　　言

1. 本書は、富山県高岡市中曾根地内に所在する「中曾根西遺跡」の発掘調査報告書である。
2. 当該事業は、県道姫野能町線改良工事に伴い富山県が高岡市に委託したものである。
3. 屋外発掘調査は、高岡市教育委員会（以下「市教委」）が国際航業株式会社に業務を委託し、平成15年度に実施した。
4. 報告書の作成は、平成16年度に市教委が国際航業株式会社へ委託して実施した。
5. 調査関係者は次のとおりである。

高岡市教育委員会

課長： 大石 茂

副主幹： 本林弘吉

主任： 根津明義

国際航業株式会社

調査員： 土 任隆 村尾政人

管理技師： 佐々木亨

6. 今回の調査にかかる全ての資料は一括して市教委が保管している。
7. 本書における造構の種別は下記に示す記号を用いた。
SA - 桁、 SB - 桁立柱建物、 SD - 溝状造構、 SE - 井戸、 SK - 土坑、
SP - ピット、 SZ - 方形周溝墓、 NR - 自然流路
8. 本書における遺物番号は以下のとおりである。
1001～弥生土器・土師器、2001～須恵器、3001～中世陶磁器、4001～土製品・瓦
5001～石器、6001～木製品
9. 引用文献は著者および発行年（西暦）を中心に〔 〕で示し、巻末に一括して掲載した。
10. 木製品の樹種同定は（株）パレオ・ラボに依頼した。
11. 現地調査から整理作業、報告書作成にいたるまで下記の方々から多大な御教示や御協力を賜った。
ここに厚く御礼申し上げる。（敬称略 五十音順）
赤澤徳明 岡田一広 岡本純一郎 金三津英則 久々忠義 倉谷 謙 下條 信行 坪田聰子
樋上 昇 久田正弘 福海貴子 藤田慎一 安 英樹 吉田 広
12. 発掘調査参加者は以下のとおりである。
浅野文雄 荒井美子 石田敏行 小川 勉 角 達也 河原康弘 新山 勇 高岡信一 高島輝雄
高藤善衛 竹内喜三 中澤俊一 中山賢富 形川 武 形川教二 岩山行男 福本 繁 馬道弘一
三井 勇 安井利雄 山城一夫 山崎一男 山崎雅之 山谷貞夫 山本重夫
13. 整理作業参加者は以下のとおりである。
安達重紀子 阿知波千佳 石井里美 伊藤美帆 上田誠人 加藤豊子 黒柳希美代 田中和子
藤井京子 町田義哉 松山智香子 水上奈津子 渡邊直子
14. 本書の執筆は、土 任隆・村尾政人が実施し、編集は根津明義の監督のもと上が実施した。執筆分担は以下のとおりである。
第1・2章 - 土
第3章1・3節 - 村尾
第4章1・3節 - 土
第5章 - 土

目 次

序 例言

第1章 序 説

1 節 遺跡の位置と周辺の自然環境.....	1
2 節 周辺の歴史的環境	1

第2章 調査の概要

3

第3章 遺 構

1 節 1 区の遺構	6
2 節 2 区の遺構	21
3 節 3 区の遺構	25

第4章 出 土 遺 物

1 節 土器・陶器・土製品	41
2 節 石器類・玉類	63
3 節 木製品	66

第5章 結 章

77

挿図目次

第 1 図 遺跡位置図	第 30 図 1 区 SD22 出土弥生土器(後期)
第 2 図 周辺の遺跡	第 31 図 1 区 SD23 出土弥生土器(中期)
第 3 図 グリッド配置及び基本層序	第 32 図 1 区 SD23 出土甕形土器
第 4 図 1 区獨立柱建物群(SB01 ~ 13)	第 33 図 1 K SD23 出土甕形土器
第 5 図 獨立柱建物 SB01 ~ 03・07 平面及び断面図	第 34 図 1 区 SD23 出土甕形土器
第 6 図 獨立柱建物 SB13 平面及び断面図	第 35 図 1 区 SD23 出土甕形土器
第 7 図 獨立柱建物 SB04・06・10・12 平面及び断面図	第 36 図 1 区 SD23 出土甕形土器
第 8 図 獨立柱建物 SB05・08・09・11 平面及び断面図	第 37 図 1 K SD23 出土坏・器台形土器
第 9 図 1 区検出土坑平面及び断面図 1	第 38 図 1 区 SD23 出土甕形土器
第 10 図 1 区検出土坑平面及び断面図 2	第 39 図 1 区包含層出土土器
第 11 図 清 SD01 ~ 04 平面及び断面図	第 40 図 2 区 SD03・04 出土土器
第 12 図 清 SD22・23 平面及び断面図	第 41 図 2 区 SD07・NR03・包含層出土土器
第 13 図 清 SD24・25 平面及び断面図	第 42 図 方形周溝墓 SZ01 出土土器
第 14 図 土坑 SK08・12 平面及び断面図	第 43 図 方形周溝墓 SZ02 出土土器
第 15 図 清 SD03・04・07・12 平面及び断面図	第 44 図 3 K SK06・24・SE07 出土遺物
第 16 図 清 SD19・23・24・自然流路平而及び断面図	第 45 図 SE10 出土甕形土器
第 17 図 方形周溝墓 SZ01 平面図及び断面図	第 46 図 SE10 出土甕形土器
第 18 図 方形周溝墓 SZ02 平面図及び断面図	第 47 図 SE10 出土高坏・器台・鉢形土器
第 19 図 3 区検出土坑平面及び断面図	第 48 図 SE11・SD03・32・146 出土土器
第 20 図 井戸 SE01・07・11・12・13 平面及び断面図	第 49 図 土製品及び古代瓦
第 21 図 井戸 SE10 平面及び断面図	第 50 図 石器
第 22 図 3 区獨立柱建物群(SB01 ~ 10)	第 51 図 石器及び玉類
第 23 図 獨立柱建物 SB03 ~ 06 平面及び断面図	第 52 図 木製品 1
第 24 図 獨立柱建物 SB07 ~ 09 平面及び断面図	第 53 図 木製品 2
第 25 図 獨立柱建物 SB01・02・10 平面及び断面図	第 54 図 木製品 3
第 26 図 「」形周溝状造構 SZ01・12 平面及び断面図	第 55 図 木製品 4
第 27 図 清 SD03・04・146・169・176 平面及び断面図	第 56 図 木製品 5
第 28 図 1 区 SK15・41・60・73・74・78 各出土土器	第 57 図 3 区 SE10 各層位別出土土器
第 29 図 1 区 SD22 出土弥生土器(中期)	第 58 図 複数遺構から出土した土器の接合関係

表 目 次

第1表 土器観察表1	第6表 瓦観察表
第2表 土器観察表2	第7表 石器観察表
第3表 土器観察表3	第8表 木製品観察表
第4表 土器観察表4	第9表 傾斜造構から出土した土器の接合関係
第5表 土製品観察表	

図版目次

図版 1 1区造構平面図 (1:200)	図版 15 3区北 土坑 SK01 挖削状況 (南東から)
図版 2 2区造構平面図 (1:200)	3区北 土坑 SK100 完削状況 (東から)
図版 3 3区造構平面図 (1:200)	3区北 土坑 SK151 完削状況 (西から)
図版 4 1区北 造構完掘状況 (航空写真)	3区北 井戸 SE10 土層断面 (南から)
1区北 溝 SD01 完掘状況 (北西から)	3区北 井戸 SE10 罹物出土状況 (南東から)
図版 5 1区北 溝 SD02 完掘状況 (南から)	3区北 井戸 SE10 抽削状況 (東から)
1区北 溝 SD03 完掘状況 (南から)	3区北 SE10 井戸枠出土状況 (東から)
1区北 溝 SD04 完掘状況 (西から)	3区北 SE10 井戸底遺物出土状況 (東から)
図版 6 1区北 捩立柱建物 SB01 (南から)	3区北 土坑 SK01 捩削状況 (南東から)
1区北 捩立柱建物 SB03 (西から)	3区北 溝 SD03 捩削状況 (南から)
1区北 捩立柱建物 SB04 (南から)	3区北 溝 SD03 捩削状況 (北から)
図版 7 1区北 捩立柱建物 SB06 (東から)	3区北 円形周溝状造構 SD01 (西から)
1区北 捩立柱建物 SB07 (北から)	3区南 造構完掘状況 (航空写真)
1区北 捩立柱建物 SB09 (北から)	3区南 方形周溝壁 SZ02 捩削状況 (南西から)
図版 8 1区北 捩立柱建物 SB11 (西から)	3区南 円形周溝状造構 SD17 (北東から)
1区北 土坑 SK10 土層断面 (南から)	3区南 井戸 SE12 完掘状況 (西から)
1区北 土坑 SK14 遺物出土状況 (西から)	3区南 土坑 SK24 完掘状況 (西から)
図版 9 1区南 造構完掘状況 (航空写真)	図版 21 土器 1
1区南 溝 SD22・23 土層断面 (南東から)	図版 22 土器 2
図版 10 1区南 溝 SD22・23 検出状況 (南から)	図版 23 土器 3
1区南 溝 SD22・23 土層断面 (北東から)	図版 24 土器 4
1区南 土坑群挖削状況 (西から)	図版 25 土器 5
図版 11 2区南 造構完掘状況 (航空写真)	図版 26 土器 6
2区南 溝 SD03・04 完掘状況 (南西から)	図版 27 土器 7
図版 12 2区北 溝 SD12 完削状況 (南西から)	図版 28 土器 8
2区北 調査区東端自然流路 (南から)	図版 29 土器 9
2区南 溝 SD19・24・26 完掘状況 (南から)	図版 30 土器 10
図版 13 3区北 造構完削状況 (航空写真・西から)	図版 31 土器 11
3区北 方形周溝壁 SZ01 (北西から)	図版 32 土製品・瓦・石器・玉類
図版 14 3区北 方形周溝壁 SZ01 検出状況 (北西から)	図版 33 木製品 1
3区北 方形周溝壁 SZ01 主体部 (東から)	図版 34 木製品 2
3区北 土坑 SK06 遺物出土状況 (西から)	図版 35 作業風景

第1章 序 説

第1節 遺跡の位置と周辺の自然環境

中曾根西遺跡の所在する高岡市は、富山県の西部に位置する。市内には庄川と小矢部川の2本の大河川が縱断して日本海に注いでおり、市域の大部分を両河川をはじめとする諸河川が形成した沖積平野が占めている。

今回調査を行った中曾根西遺跡は、高岡市の北東部にあたり、庄川の河口から約2kmほどさかのぼった右岸に位置する。周辺には自然河川により形成された氾濫平野及び三角州が広がり、自然堤防が散在する〔国土地理院 1982〕。中曾根西遺跡もまた、こうした自然堤防上に立地しており、主要地方道新湊庄川線に沿うように南北方向にひろがる形状を呈している。遺跡の範囲は南北700m・東西140m程である。その北西には庄川の旧流にあたる牧野川が流れている。

第2節 周辺の遺跡（第2図）

中曾根西遺跡の周辺は、弥生時代後期を中心とする中曾根遺跡をはじめ、多くの遺跡の所在が周知されている。以下に周辺に所在する遺跡を時代ごとに提示する。

縄文時代

今回発掘調査を実施した北方約1.5kmに所在する三日曾根遺跡では、縄文時代中・後期の遺物の出土が報告されている〔高岡市 1995〕。また、西方へ1.3km程の地点に位置する現在の庄川河川敷内には上牧野新庄川遺跡が所在する。昭和39年に粘土採掘地から石剣が掘り出されたことを契機として、遺物の収集と土層調査が実施された。その結果、縄文後期・縄文晩期終末～弥生中期・中世の計3層の包含層が確認されている〔本江他 1981〕。同遺跡は過去数回それぞれ別個の遺跡として報告されていたが、平成6年度の市教委による文化財分布調査によって一つの埋蔵文化財包蔵地としてまとめられている。〔高岡市 1995〕。

弥生時代

弥生時代の遺跡としては、中曾根西遺跡のほか、その東方に位置する中曾根遺跡と中曾根北遺跡が知られている。中曾根遺跡では、弥生時代後期を中心とする遺物の出土が高岡市史により報告されており〔高岡市 1959〕、平成7年度の市教委により実施された調査でも同時期の造構・遺物が出土している〔高岡市 1996〕。中曾根北遺跡については、現在までのところ、ほとんど発掘調査はされていないが、過去には弥生土器や土師器の採集が報告されている〔高岡市 1995〕。

中曾根遺跡のさらに東方に位置する中曾根船遺跡では、弥生時代後期を中心とした遺物のほか、住居跡と考えられた造構が検出されている。また、中曾根西遺跡の西方0.8kmのところにある上牧野宮袋遺跡では、平成6年度の市教委による遺跡分布調査で、弥生時代後期から古墳時代前期の遺物が珠洲等とともに採集されている〔高岡市 1995〕。同遺跡は中曾根西遺跡と同じ調査原因により、平成13年度から2箇年にわたり発掘調査が実施されている〔高岡市 2005〕。



第1図 遺跡位置図

そのほか、高岡市域となるが、中曾根西遺跡から南東へ2kmほどのある新湊市内に高島A遺跡が所在する。過去2度にわたる同市教育委員会の発掘調査により、弥生時代中期を中心とした遺物の出土や、方形周溝墓をはじめとした遺構の検出が報告されている〔新湊市教育委員会 2000・2003〕。

古墳時代及び古代

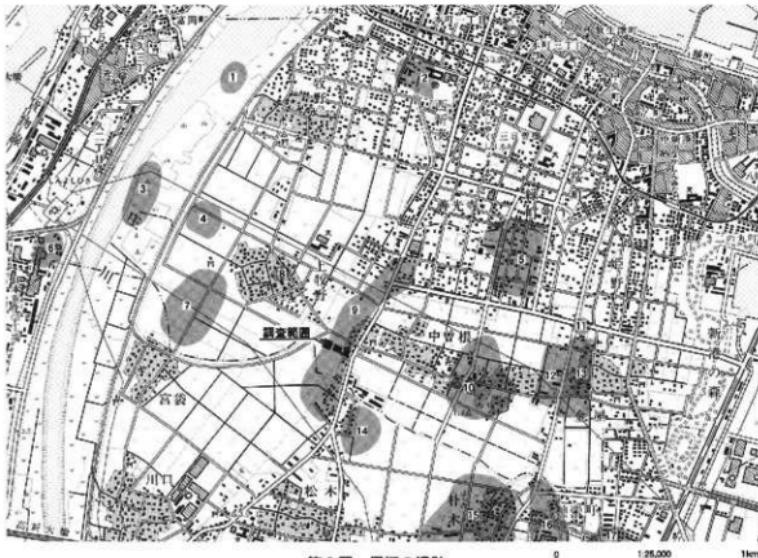
この時代の遺跡は比較的少なく、今のところ数件の報告があるのみである。古墳時代のものとしては下牧野新庄川遺跡での土師器の採集例がある。古代については小宮遺跡をはじめとする諸遺跡が当該期の包蔵地として周知されているが調査歴が十分ではないため実態は不明である。ただし上牧野遺跡では同時期の瓦の出土が報告されており〔西井 1987〕注目される。

中世以降

牧野金谷遺跡では、土師器・須恵器・珠洲・常滑・鉄滓・炉駄・鉄片等が採集されている。当地をめぐっては、放生津を本拠とする神保氏が河内国より鎧物師を招致した可能性が指摘されている〔高岡市 1959〕。

中曾根西遺跡の西方には撰船塚遺跡が所在する。後醍醐天皇第八皇子宗良親王が3年ほど隠れ住んだという伝承があり、現在ではその石碑が建立されている。

その他、詳細は定かではないが、姫野源訪神社遺跡・上牧野田島遺跡・小宮遺跡等が中世の埋蔵文化財包蔵地として指定されている〔高岡市 2000〕。



第2図 周辺の遺跡

- | | | | | |
|-------------|-----------|---------------------------------------|-----------|----------|
| 1 下牧野新庄川遺跡 | 2 三日曾根遺跡 | 3 上牧野新庄川遺跡 | 4 上牧野田島遺跡 | 5 中曾根北遺跡 |
| 6 小宮遺跡 | 7 上牧野宮袋遺跡 | 8 撰船塚遺跡 | 9 中曾根西遺跡 | 10 中曾根遺跡 |
| 11 姫野源訪神社遺跡 | 12 中曾根館遺跡 | 13 牧野金谷遺跡 | 14 松木遺跡 | 15 朴木C遺跡 |
| 16 朴木A遺跡 | 17 高島A遺跡 | (国土地理院 1:25,000 地図及び『高岡市遺跡地区』を改変使用) | | |

第2章 調査の概要

1. 調査にいたる経緯

今回の中曾根西遺跡の発掘調査は、富山県高岡土木センターにより県道架野能町線の改良工事が計画され、平成12年に高岡市教育委員会へ埋蔵文化財にかかる照会が寄せられたことが契機となった。当該地は以前から中曾根西遺跡の包蔵地及びその近隣にあたることが周知されていたことから、平成13年度及び14年度に市教委の試掘調査が行われた。その結果、当該地から埋蔵文化財が検出されたため、その後の協議を経て、本発掘調査を実施する運びとなった次第である。

なお、当初は本発掘調査についても市教委で実施する予定であったが、他の事業との重複等により、市教委による調査指導のもと、国際航業株式会社へ業務を委託して調査を実施することになった。

2. 調査の方法

発掘調査は以下の方法により実施した。まず表土については、遺物の出土に注意をしつつ主として重機を用いて掘削を行った。表土の掘削後、遺物包含層を人力で掘削し遺構の検出を行った。また、これとともにトータルステーションを用いて縮尺1/100の遺構略図を作成し、遺構名や切り合い関係を記録した。遺構検出後、土層断面観察用のトレーナーを人力にて掘削し、縮尺1/20で土層断面図を作成した。遺構覆土の掘削は、土層の変化や出土遺物に気をつけながら人力にて実施した。全ての遺構を完掘した後に航空写真撮影を行い、空中写真測量法により縮尺1/20で遺構平面図を作成した。

遺構検出をはじめ、土層断面や遺構完掘状況といった各調査過程や成果については、上記した各種の図面の他、写真撮影を行い記録に努めた。使用したフィルムは35mmのカラーネガフィルムとモノクロネガフィルムを主体とし、適宜6×7版のカラーリバーサルフィルムとモノクロネガフィルムで撮影した。その他、補助的にデジタルカメラでの撮影を行った。

遺構番号は調査区ごとに通し番号を付し、遺構種別ごとに「SD」「SK」等の記号を冠して遺構名とした。出土遺物の取り上げについては、包含層出土のものはグリッドごと、遺構内出土のものは遺構ごとに取り上げた。また、その際には出土地点や出土日等をラベルや遺物台帳に記載して整理箱に収納した。

なお、この調査における測量作業は既存の基準点測量成果を基に行った。調査成果の平面図についても旧座標の数値を用いているが、世界測地系の新座標についても括弧内に併記している。

3. 調査区及びグリッドの設定

今回の調査対象地は、農道や灌漑施設により東西方向に3分割された状況にあった。また調査中においてもこれらの農道等を存続させる必要があったため、調査区を3分割し、調査にあたることとした。グリッドについては、調査区の方向と概ね近似するよう、調査区中央を横断する線（国土座標系に対して24°40'傾く）を基準として10mピッチにて設定した。

なお、各調査区については西から1区・2区・3区と呼称し、各グリッドについてはアルファベットとアラビア数字を組み合わせ、「1A」、「1B」といった名称を付すこととした。ただし、今回の調査では掘削排土を現地に仮置きしなければならない事情があったため、調査区を3と4に挟まれたラインで南北に分

け、「1区北」・「1区南」といったように小区分して順次調査をすすめることとした（第3図参照）。

4. 基本層序（第3図）

調査区の現況は、1区及び2区が水田で、3区は宅地及び果樹園となっていた。全体的に平坦な地形を呈するものの、往時においては各区でそれぞれ様相が異なっている。比較的起伏が少ない1区に対し、2区は中央を南北に継断する溝（SD 03・04）を境に東に向かって緩やかに下がり低湿地帯を呈しているが、3区では微高地となっている。調査区に堆積している土層についても、東と西、北と南で様相を異にしているため、調査区全体をくくるのは困難な状況にあるが、概して上層から順に表土・旧耕作土・包含層・「地山」の4層に大別することができる。

I層 1区、2区では水田の現耕作土及び水田床土で灰色若しくは黒褐色の粘土である。3区では畑の現耕作土及び宅地の盛り土である。

II層 旧耕作土である。灰色～黒褐色の粘土若しくはシルトで存在しない区域もある。

III層 遺物包含層であり、暗褐色～黒色のシルトである。1区、2区西側では薄く、2区南、3区南西隅等では30cm程に及ぶ。下層で地山ブロックを含む。

IV層 いわゆる「地山」である。暗灰色～オリーブ灰色の粘土（1区北・2区北西）または灰色～黄褐色の細粒砂が堆積する。本層上面が遺構検出面である。

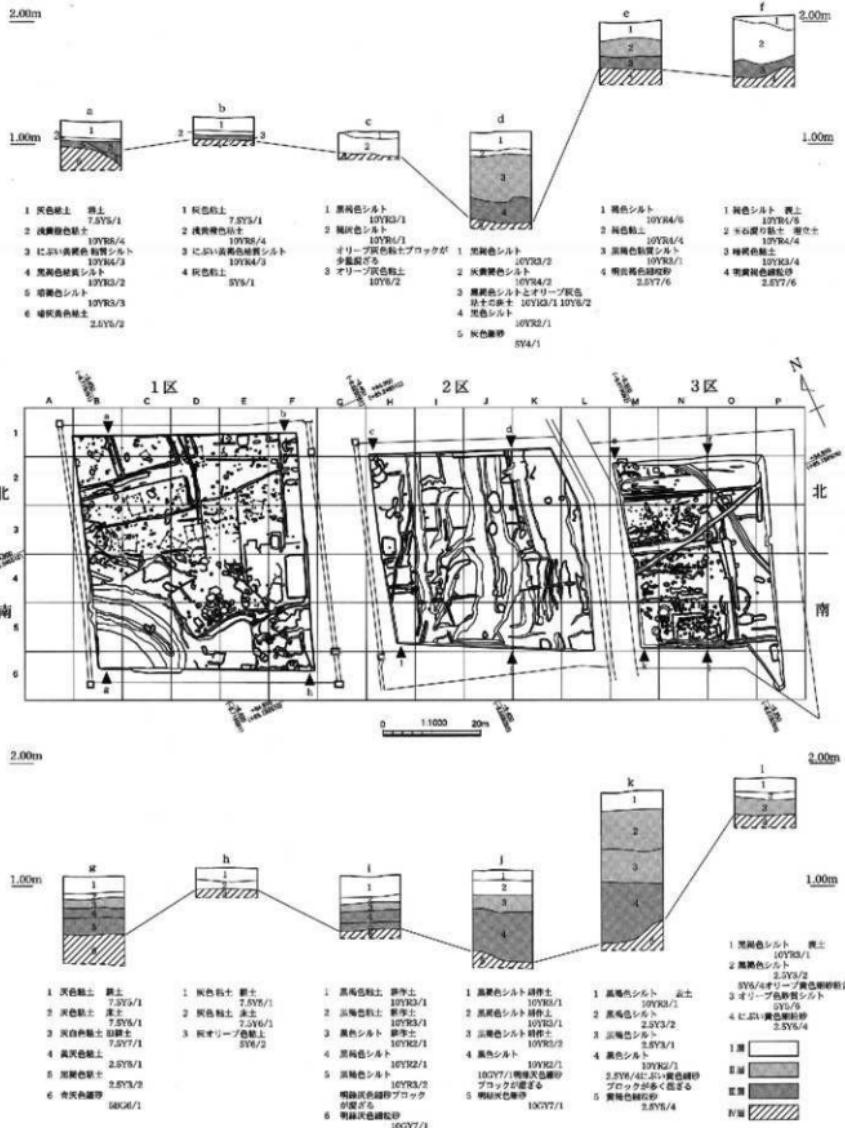
5. 調査の経過

発掘調査は、平成15年9月10日に3区北側において表土の機械掘削から始まった。翌11日から作業員による3区北の包含層の入力掘削が始まり、少し遅れて2区北側の機械掘削を開始した。作業員は当初11人で始めたが、1週間ほどおいて10人追加して2班体制で実施した。作業は3区北と2区北を平行して行い、以後1区北と3区南、1区南と2区南の順で進めた。

3区北はかつて宅地であったためか、近年の盛り土の下にさらに搅乱がみられた。しかし遺構の残りも良く、多数の土坑や井戸状遺構などが検出されたほか、方形周溝墓S Z 01が検出された。3区北の井戸状遺構S E 10からは完形にちかい甕が2点検出され、その直下に井戸枠の存在が確認された。2区北ではSD 03・SD 04など比較的規模の大きな溝が検出された。多数の遺構と深い溝の掘削と湧水の処理に手間取ったものの、9月30日には3区北側の航空写真撮影を、10月11日には2区北側の航空写真撮影をほぼ予定通りに行った。

1区北は表土が比較的薄く、表土を掘削するとすぐに粘土質の地山が現れた。多数の柱穴や中世以降のものと思われる幅広の溝が検出された。一方の3区南では、北側と同様に多数のピットが検出されたほか、七墳墓と思われる遺構や方形周溝墓S Z 02、円形周溝状遺構SD17、井戸状遺構等が確認された。10月25日には1区北の航空写真撮影を実施し、引き続き1区南の調査に移った。11月に入り雨がちになってきたが、幸い作業に支障がでるほどではなく、11月14日に3区南の航空写真撮影を終了し、2区南へとりかかった。

1区南は、平坦な北側と異なり、大規模な溝SD 22・SD 23が検出され、溝内から全出土遺物の半数を占める程の多数の遺物が出土した。2区南においても、中央を貫く大規模な溝SD 03・SD 04の他、いくつもの溝の存在が確認された。日ごとに頻繁になる降雨と湧水に悩まされるようになってきたが、11月20日の1区南に統いて、12月5日に2区南の航空写真を撮影し、補足調査作業を経て、同26日に現場を撤収した。



第3図 グリッド配置及び基本層序

第3章 遺構

第1節 1区の遺構

1区からはピット・土坑・獨立柱建物・柵列・溝等の遺構が確認されている。ピットは径20cm以下の比較的小さなものが主体を占める。土坑は円形及び梢円形のものが22基、方形に近いものが50基ある。概して前者は弥生時代中期に属する可能性が高く、後者のほとんどは近世以降に属する粘土採坑とみられる。獨立柱建物は2間×2間及び3間×2間等といった小型のものを計13棟復元した。溝は円弧を描くものや直線状のもの等がある。円弧溝SD 22・23は弥生時代後期、直線状の溝SD 01～03は近世に属するものと思われる。ただし、同じく直線状を呈するSD 04は弥生時代中期に属するものと思われる。

1. 獨立柱建物 柵列

獨立柱建物の復元にあたっては、平面的にある程度列をなすことや土層観察を重視して検討を重ねた。本調査区においては13棟所在するものと想定した。以下、想定ながらも3間×2間の建物が5棟、2間×2間が4棟、2間×1間が2棟、1間×1間が2棟所在するものとして記述をすすめる。概して1間×1間の建物については、規模が小さい反面、個々の柱穴が大きいことから4本柱の堅穴住居であった可能性もあるかと思われる。当区は遺物包含層自体も残存していないかった状況から、全体に後世の削平が深く及んでいたものと思われるため、堅穴住居についても削平を受け主柱穴のみが確認できた可能性があるかと思われる。

建物は主軸方向により、A群建物（主軸が北から西へ約5°～15°）、B群建物（北から東へ約30°）、C群建物（北から東へ約35°）の計3群に分けることができる。これらは時期による区分としては確認できなかつた。また、堅穴住居にも復元しうるSB 11及びSB 05についてはC群にまとめて掲載した。

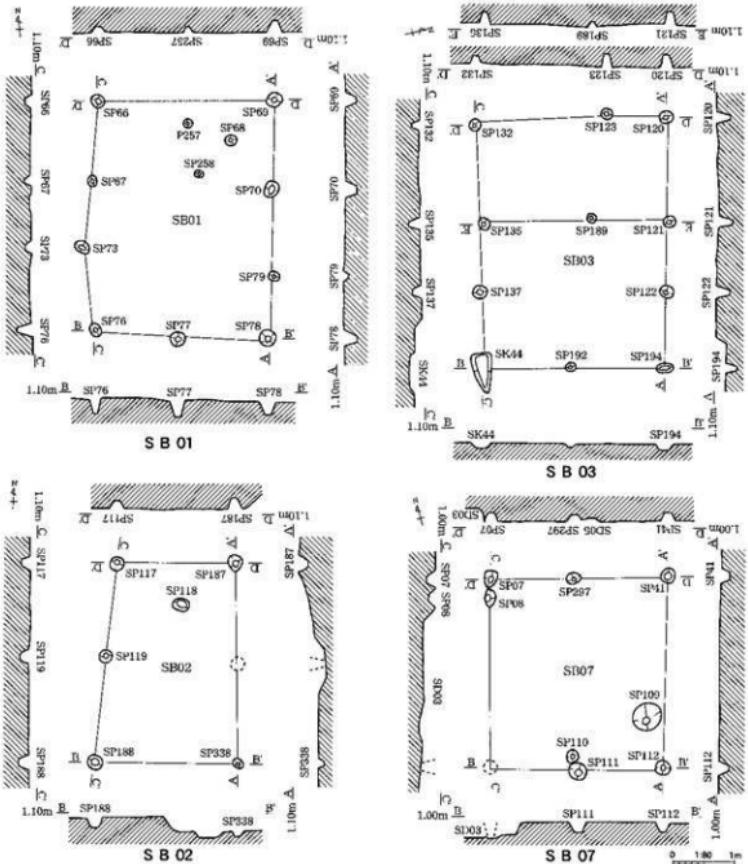


第4図 1区独立柱建物群 (SB 01～13)

A群建物

建物SB 01 (第5図 図版6)

1区北側2・3C区に位置する3間×2間の側柱構造を有すると思われる建物である。桁行3.9m・梁行2.9mを測り、主軸方向は北から約5°西に傾く。北辺中央の柱穴は不明であるが、内側0.35m地点に位置するピットがその候補となる可能性があると思われる。また、西辺の南から1間の柱穴は外側に張り出す位置にある。柱間規模は、桁行が1.1から1.4mで梁行が1.4mを測る。各柱穴の規模は北西角のS P 66が直径0.24m・深さ0.12m、南西角のS P 76が直径0.20m・深さ0.21m、北東角のS P 69が直径0.24m・深さ0.19m、南東角のS P 78が直径0.24m・深さ0.22mを測る。覆土はいずれも黒褐色粘質土を基本とし、地山の黄褐色粘土ブロックが混入する。南側に近接する溝SD 04と平行である。南辺の柱穴S P 76・77・78から弥生土器片が出土していることから、弥生時代以降に築造されたと解釈される。



第5図 振立柱建物SB 01~03・07 平面及び断面図

建物 S B 02 (第 5 図)

1 区北中央 2 D 区に位置する 2 間 × 1 間の側柱構造を有すると思われる建物である。桁行 3.3 m・梁行 2.4 m を測り、主軸方向は北から約 5° 西に傾く。東辺の中央に柱穴を有していたものと考えられるが、近世の溝 S D 03 の築造時に欠損したものと思われる。柱間の規模は、桁行 1.6 m・梁行 2.1 m を測る。柱穴の規模は北西角の S P 117 が直径 0.23 m・深さ 0.11 m、南西角の S P 188 が直径 0.24 m・深さ 0.17 m、南東角の S P 187 が直径 0.25 m・深さ 0.17 m、南東角の S P 338 が直径 0.21 m・深さ 0.10 m を測る。覆土は黒褐色粘質土に地山の黄褐色粘土ブロックが混入する。遺物の出土はなかった。

建物 S B 03 (第 5 図 図版 6)

1 区中央付近 3 D 区に位置する 3 間 × 2 間の側柱構造を有すると思われる建物である。主軸は東から約 15° 北に傾く。桁行 4.1 m、柱間は東側 2 間が 1.3 m、西側 1 間は 1.7 m を測る。梁行は 3.2 m、柱間は東側 2 間が 1.2 m、西側 1 間が 1.7 m を測る。また、北西角から 1 間は狭く 1 m、南側は 2.2 m とやや広い。西辺の 1 間は 1.6 m を測る。各柱穴の規模は、北西角の S P 120 が直径 0.20 m・深さ 0.22 m、南西角の S P 132 が直径 0.20 m・深さ 0.13 m、北東角の S P 194 が直径 0.15 m・深さ 0.22 m を測る。南東角の S K44 は平面形状が三角形を呈し、直径 0.66 m・深さ 0.04 m を測る。覆土は黒色粘質土に地山の黄褐色粘土ブロックが混入する。建物は北側の溝 S D 04 に平行している。

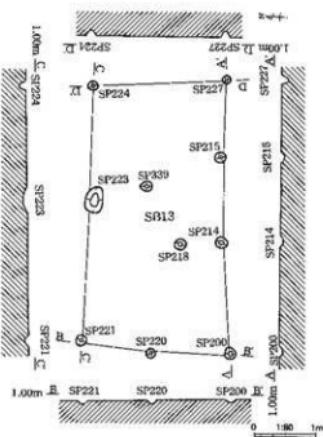
建物 S B 07 (第 5 図 図版 7)

1 区北端 1・2 D 区に位置する 2 間 × 1 間の構造を有すると思われる建物である。本来的には、東及び西辺の中央に柱穴を有する 2 間 × 2 間の建物であったとも考えられるが、西辺中央、南西角の柱穴は溝 S D 03 によって切られて欠損していた。また、東辺中央の柱穴については確認できなかった。桁行 3.3 m・梁行 2.9 m、柱間は 1.5 m を測り、主軸は北から西へ約 15° 傾く。北西角と南辺中央の柱穴は 2 ヶ所の切り合いでみられることから建て替え、或いは添柱と考えたい。各柱穴の規模は北西角の S P 07 が直径 0.20 m・深さ 0.11 m、北東角の S P 41 が直径 0.18 m・深さ 0.20 m、南東角の S P 112 が直径 0.24 m・深さ 0.21 m を測る。覆土は黒色粘質土に地山の明黄褐色粘土ブロックが混入する。

建物 S B 13 (第 6 図)

3 D から 2 E 区にまたがる 3 間 × 2 間の側柱構造を有すると思われる建物である。桁行 4.3 m で柱間 1.3 m・梁行 2.4 m で柱間 1.1 m を測り、主軸は東から北へ約 5° 傾く。北辺の柱列は中央に 1 ヶ所のみである。南辺の 1 間東側から北側と、北辺中央から南の建物内に入ったところに添柱の可能性を持つと思われる S P 218 及び S P 339 がある。東辺中央の柱穴は確認できなかった。

各柱穴の規模は、北東角の S P 224 が直径 0.13 m・深さ 0.08 m、北西角の S P 221 が直径 0.16 m・深さ 0.04 m、南東角の S P 227 が直径 0.12 m・深さ 0.08 m、南西角の S P 200 が直径 0.21 m・深さ 0.04 m を測る。覆土は黒色粘質土に地山の明黄褐色粘質土ブロックが混入する。建物は北側の溝 S D 04 に平行している。また、建物の南側では方位を異にする建物 S B 12 が切り合っている。



第 6 図 掘立柱建物 S B 13 平面及び断面図

B群建物・柵列

建物 S B 04 (第7図 図版6)

1区西側3C区に位置する2間×2間の側柱構造を有すると思われる建物である。桁行3.3mで梁行2.8mを測り、主軸は真北から東へ約32°傾く。北辺中央には2基のピットが所在しており、うち1基については私見ながら添柱と考えたい。東辺中央にはS P 89・90がある。北西角の柱穴は確認できなかった。各柱穴の規模は北西角のS P 87が直径0.67m・深さ0.49m、南西角のS P 261が直径0.41m・深さ0.30m、南東角のS P 99が直径0.51m・深さ0.50mを測る。覆土は黒色粘質土に明黄褐色粘質土ブロックが混入する。S P 89・90より弥生土器片が出土している。

建物 S B 06 (第7図 図版7)

1区東側2・3E区に位置する2間×2間の側柱構造を有すると思われる建物である。桁行2.6mで柱間1.3m・梁行2.1mで柱間1.1mを測り、主軸は真北から東へ約32°傾く。東辺の北側には柱穴S P 150が所在する。東辺では2基の柱穴を検出したが、西辺においては確認できなかった。各柱穴の規模は北西角のS P 343が直径0.21m・深さ0.09m、南西角のS P 153が直径0.20m・深さ0.11m、北東角のS P 190が直径0.26m・深さ0.04m、南東角のS P 223が直径0.26m・深さ0.09mを測る。覆土は黒色細砂粘質土に地山の明黄褐色粘質土ブロックが混入する。

建物 S B 10 (第7図 図版8)

1区東側3B区に位置する2間×2間の側柱構造を有すると思われる建物である。桁行2.7mで柱間1.5m・梁行2.7mで柱間1.3mを測り、主軸は真北から東へ約24°傾く。東辺中央にはS P 256、南東角にはS P 175、南西角にはS P 52がある。西辺中央の柱穴は確認できなかった。各柱穴の規模は北西角のS P 39が直径0.34m・深さ0.34m、南西角のS P 53が直径0.17m・深さ0.09m、北東角のS P 42が直径0.25m・深さ0.15m、南東角のS P 45が直径0.17m・深さ0.14mを測る。覆土は黒色細砂粘質土に地山の明黄褐色粘質土ブロックが混入する。北側には建物に平行する溝S D 04がある。

柵列 S A 14 (第4図)

3C区に位置する3間の柵である。主軸は北から東へ約20°傾く。規模は全長が2.6m、柱間は中央と北側が約0.6m、南側が1.2mを測る。規模的には建物より短いことから、建物間の間仕切りなどに比定したい。また、東側の建物S B 04に近接しているが、方位的には西側の建物S B 10に沿っている。建物S B 10との距離は1.5mを測る。各柱穴の規模は北端の柱穴S P 48が直径0.15m・深さ0.10m、南端の柱穴S P 261が直径0.30m・深さ0.15mを測る。覆土は黒褐色粘質土である。

建物 S B 12 (第7図)

1区北中央3D・E区に位置する2間×2間の側柱構造を有すると思われる建物である。桁行2.1mで柱間1.1m・梁行2.1mで柱間1.1mを測り、軸は西から北へ約22°傾く。南辺中央の柱穴は確認できなかった。私見ながら、建物の南辺と溝の東側には各1ヶ所の柱穴がみられることから、南側に入り口等の施設を有していた可能性を提起したい。各柱穴の規模は北西角のS P 361が直径0.25m・深さ0.05m、南西角のS P 199が直径0.22m・深さ0.06m、北東角のS P 216が直径0.26m・深さ0.05m、南東角のS P 205が直径0.16m・深さ0.09mを測る。覆土は黒色細砂粘質土に地山の明黄褐色粘質土ブロックが混入する。S P 199から陶器が出土している。

柵列 S A 15 (第4図)

3 E 区に位置する 3 間の柵である。主軸は西から北へ約 17° 傾く。規模は全長が 2.9 m、柱間は 0.9 m から 1.1 m を測る。その位置関係から北側の建物 S B 12 に伴う可能性があると思われる。建物との距離は 1.5 m を測る。各柱穴の規模は西端の柱穴 S P 349 が直径 0.15 m・深さ 0.05 m、東端の柱穴 S P 201 が直径 0.16 m・深さ 0.04 m を測る。覆土は黒褐色粘質土である。

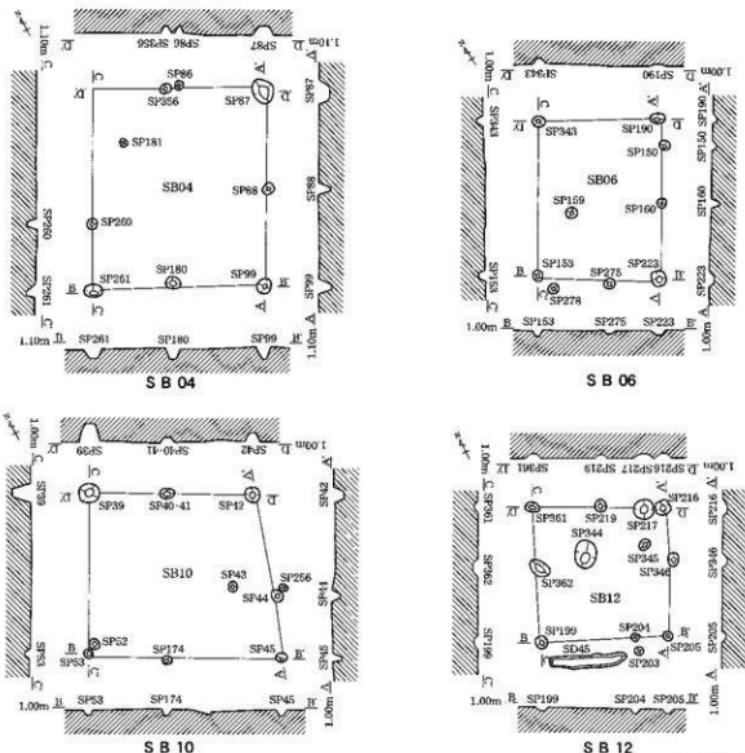
柵列 S A 16 (第4図)

3 E 区に位置する 3 間の柵である。主軸は西から北へ約 19° 傾く。規模は全長が 3.7 m、柱間は中央が約 0.9 m、西と東側が 1.4 m を測る。方位は建物 S B 12 より北へ約 3° 傾く。また、建物との距離は 1.2 m を測る。各柱穴の規模は西端の柱穴 S P 202 が直径 0.19 m・深さ 0.10 m、東端の柱穴 S P 363 が直径 0.16 m・深さ 0.10 m を測る。覆土は黒褐色粘質土である。

C 群建物

建物 S B 05 (第8図)

1 区北西隅 1・2 B 区に位置する 1 間 × 1 間の構造を有すると思われる建物である。桁行 1.5 m・梁行 1.5

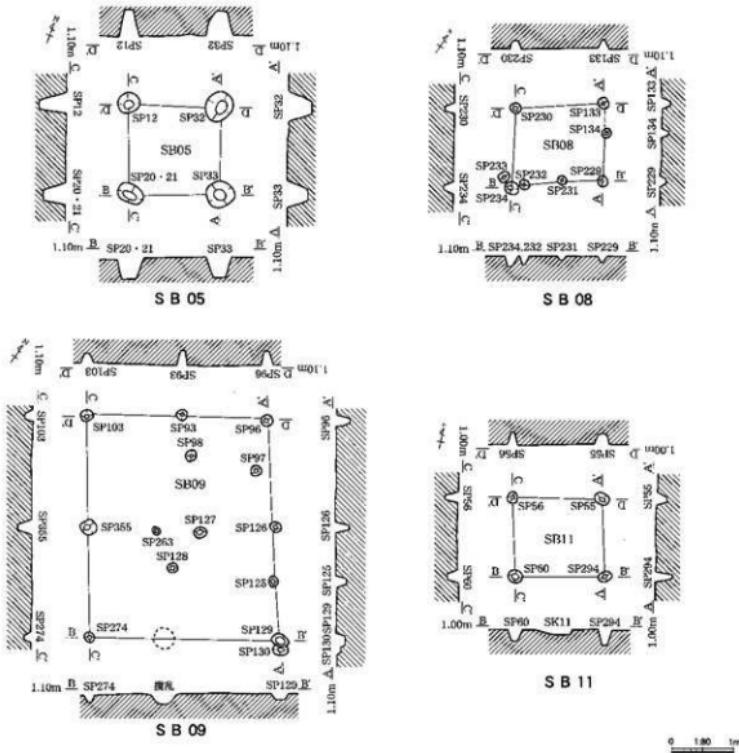


第7図 振立柱建物 S B 04・06・10・12 平面及び断面図

mを測り、主軸は真北から西へ約22°傾く。建物の北側には弥生時代中期のものとみられる土坑SK 04が近接している。各柱穴の規模は北角のS P 32が直径0.49m・深さ0.40m、西角のS P 12が直径0.34m・深さ0.45m、東角のS P 33が直径0.44m・深さ0.34m、南角のS P 20が直径0.43m・深さ0.34mを測る。覆土は黒色細砂粘質土である。その規模や構造あるいは後世の削平が著しいこと等から、本趾については堅穴住居であった可能性もあるかと思われる。

建物SB 08(第8図)

3D区に位置する小型建物である。桁行1.4mで柱間0.7m・梁行1.3mで柱間は北側が0.5m、南側が0.8mを測り、主軸は東から北へ約38°傾く。南角の柱穴S P 234にはS P 232・233の2ヶ所の切り合いがみられる。私見としては添柱の可能性を述べておきたい。北辺、西辺中央の柱穴は確認できなかった。各柱穴の規模は北角のS P 133が直径0.18m・深さ0.13m、西角のS P 230が直径0.18m・深さ0.14m、東角のS P 229が直径0.19m・深さ0.10m、南角のS P 234が直径0.23m・深さ0.12mを測る。覆土は黒色細砂粘質土に地山の明黄褐色粘質土ブロックが混入する。北側には本趾と同方位で柱筋が同様となるSB 09が所在する。



第8図 捶立柱建物SB 05・08・09・11平面及び断面図

建物 S B 09 (第8図 図版7)

3 C・D区に位置する4間×2間の側柱構造を有すると思われる建物である。桁行3.5mで柱間1.1m・梁行3.1mで柱間1.4mを測り、主軸は真北から西へ約36°傾く。東角の柱穴には切り合がみられることから柱の抜き取り穴、或いは添柱の可能性がある。建物内にS P 98・127・128・263が所在する。南辺中央の柱穴は確認できなかった。各柱穴の規模は北角のS P 96が直径0.20m・深さ0.24m、西角のS P 103が直径0.20m・深さ0.15m、東角のS P 129が直径0.28m・深さ0.10m、南角のS P 274が直径0.15m・深さ0.12mを測る。覆土は黒色細砂粘質土に地山の明黄褐色粘質土ブロックが混入する。建物の方位からS B 08と同様の時期に属するものと思われる。

建物 S B 11 (第8図 図版8)

1区北側1・2C区に位置する1間×1間の構造を有すると思われる建物である。桁行1.5m・梁行1.4mを測り、主軸は真北から西へ約15°傾く。南側に土坑SK 11が近接している。各柱穴の規模は北東角のS P 55が直径0.23m・深さ0.17m、北西角のS P 56が直径0.18m・深さ0.21m、南西角のS P 60が直径0.19m・深さ0.18m、南東角のS P 294が直径0.20m・深さ0.26mを測る。覆土は黒色細砂粘質土である。規模や構造等から堅穴住居の可能性もあるかと思われる。

2. 土坑

土坑 SK 04 (第9図)

1区北側1B区に位置する。南側には建物S B 05が近接しており、南端の突出部分はS P 12と接する。長軸は北西から南東方向である。平面形状は不定形を呈し、規模は長辺1.1m・深さ0.14mを測る。覆土は黒褐色粘質土に地山の黄褐色粘土ブロックが混入する。出土遺物は確認できなかった。遺構の性格や用途については不明である。

土坑 SK 05 (第9図)

1区北側2B区に位置する。長軸は南北方向で、平面形状は梢円形を呈する。規模は長辺1.4m・深さ0.4mを測る。覆土は黒褐色粘質土で出土遺物は確認できなかった。遺構の性格は不明である。

土坑 SK 08 (第9図)

1区北側2B区に位置する。長軸は北東から南西方向である。平面形状は南東に張り出した梢円形を呈し、長辺1.26m・深さ0.05mを測る。覆土は暗褐色粘質土で弥生土器片が出土した。遺構の性格は不明である。

土坑 SK 10 (第9図 図版8)

1区北側3B区に位置する。長軸は北東から南西方向である。平面形状は不整形形を呈し、規模は長辺0.88m・深さ0.75mを測る。覆土は黒褐色粘質土で出土遺物は確認することができなかった。遺構の性格は不明である。

土坑 SK 11 (第9図)

1区北側2C区に位置する。北側に建物S B 11が近接しており、南辺は土坑SK 12によって切られている。長軸は南東から北西方向である。平面形状は長方形、断面形状は平坦な床面を有する逆台形状を呈している。規模は長辺1.3m・深さ0.09mを測る。覆土は黒褐色粘質土で弥生土器片が7点出土した。遺構の性格は不明である。

土坑 SK 14 (第9図 図版8)

1区北側2C区に位置する。北東側には土坑SK 13が近接しており、長軸は北西から南東方向である。平面形状は南東部に外湾或いはやや不整の梢円形を呈し、規模は長辺1.84m・深さ0.07mを測る大型の上坑で

ある。覆土は黒褐色粘質土で弥生時代中期の甕の小片が約40点出土した。遺構の性格は不明である。出土遺物から弥生時代中期に属するものと思われる。

土坑SK 15（第9図）

1区北側3C区に位置する。北辺は東西にはしる溝SD 04によって切られている。長軸は北東から南西方向で、平面形状は北側に外溝或いはやや不整の楕円形を呈する。規模は長辺2.97m・深さ0.23mを測る大型の土坑である。土坑SK 14と形状・規模共に類似する。覆土は黒褐色粘質土で弥生時代中期の上器の破片が50点ほど出土した。遺構の性格は不明である。出土遺物から弥生時代中期に属するものと思われる。

土坑SK 22（第9図）

1区北側1E区に位置する。南側を東西にはしる溝SD 11と接する。長軸は南北方向で、平面形状は不整形を呈する。規模は長辺1.82m・深さ0.04mを測る。覆土は黒褐色粘質土で弥生土器片が10点ほど出土した。遺構の性格は不明である。出土遺物から弥生時代に属するものと思われる。

土坑SK 23（第9図）

1区北側1E区に位置する。平面形状は方形を呈し、規模は長辺2.4m・短辺2.3m・深さ0.04mを測り、平坦な底面を有する。覆土は黒褐色粘質土と小さなブロックの黄橙色土を多く混入する。出土遺物は確認できなかった。

土坑SK 41（第9図）

1区北側1B区に位置する。東辺は南北にはしる溝SD 02によって切られている。長軸は北東から南西方向で、平面形状は楕円形、断面形状は椀状を呈する。規模は長辺1.45m・深さ0.17mを測る。覆土は黒褐色粘質土で弥生土器片が数点出土した。遺構の性格は不明である。出土遺物から弥生時代に属するものと考えたい。

土坑SK 52（第10図 図版10）

1区南側5D区に位置する。南側の溝SD 24と西側の大溝SD 23に規制された状況で同一の方向を呈している。長軸は北西から南東方向で、平面形状は長方形を呈する。規模は長辺2.06m・深さ0.18mを測る。覆土は褐灰色粘質土で出土遺物は確認できなかった。遺構の性格としては、東側に数多くみられる土坑群と同様の土採りの土坑であろう。東側の土坑群において形状が整然とした方形のものについては、他の土坑を切り込む等の新出の傾向がみられる点から、本趾も比較的新しい時期のものと考えられる。同様の土坑が1区南側と2区西側に多くみられるが、これらは近世以降の時期に属するものと思われる。

土坑SK 57（第10図）

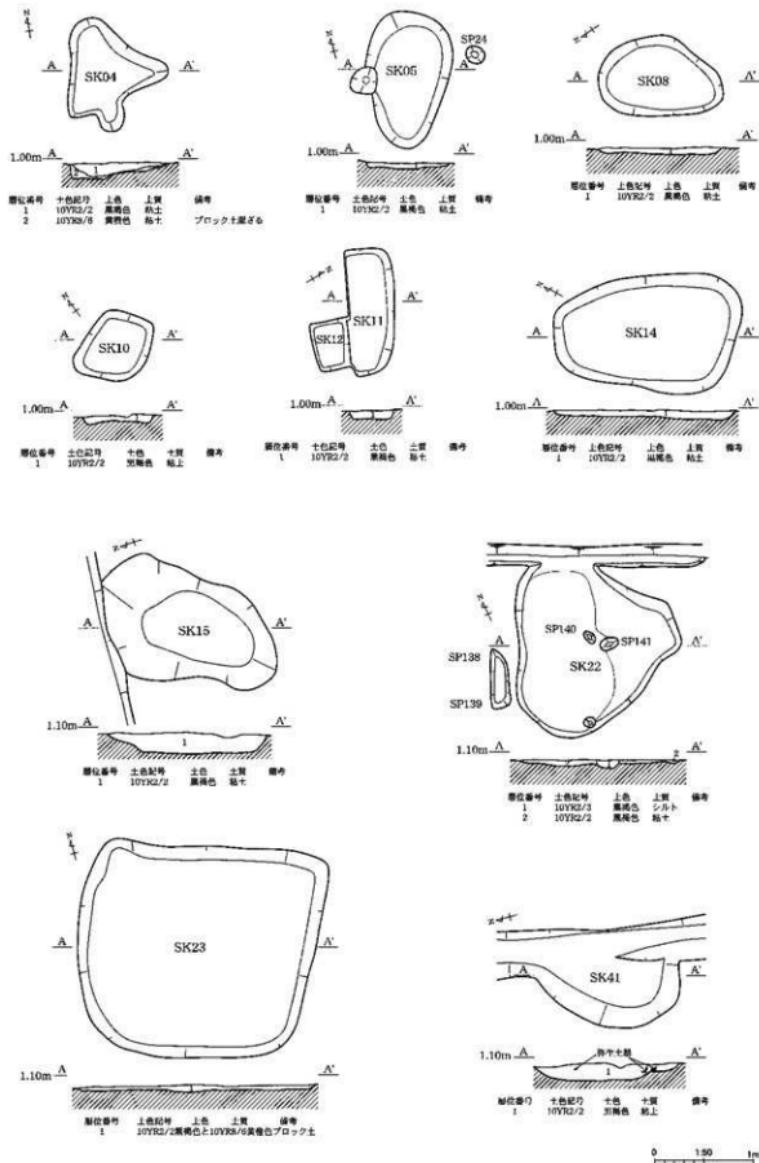
1区南側4D区に位置する。長軸は北西から南東方向で、平面形状は楕円形を呈する。規模は長辺1.10m・深さ0.11mを測る。覆土は暗赤灰色粘質土で弥生土器片が少量出土した。遺構の性格は不明である。

土坑SK 58（第10図 図版10）

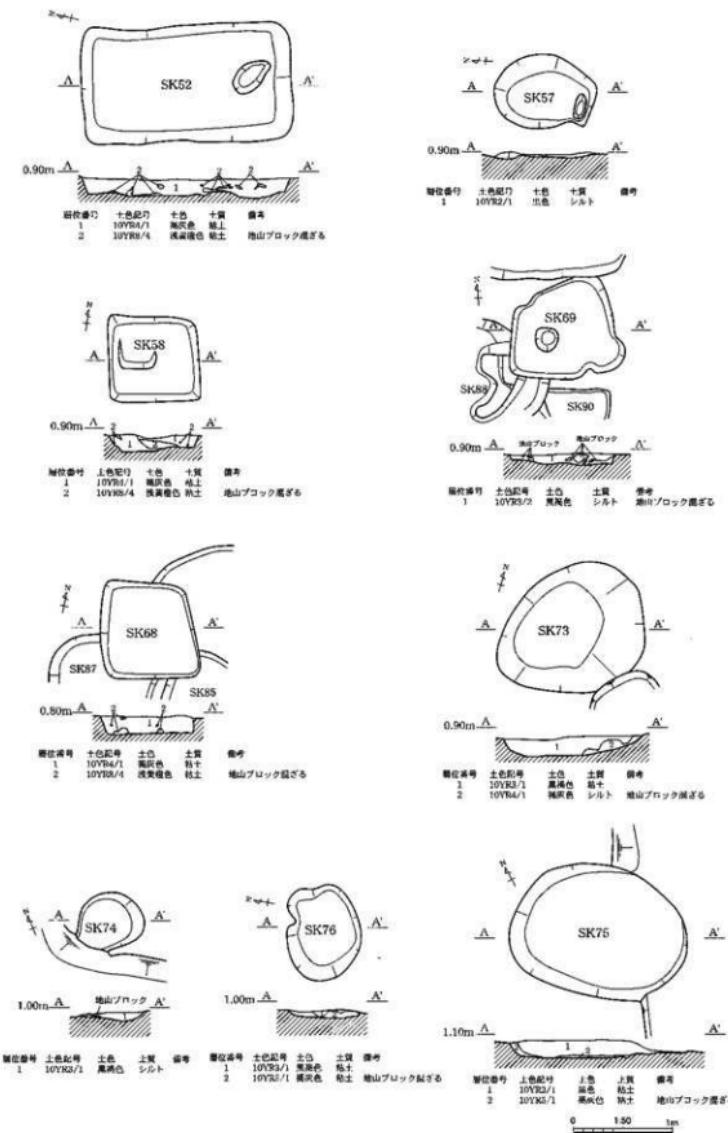
1区南側5D区に位置する。長軸は北西から南東方向で、北側の溝SD 26、南側の土坑SK 67・68、南西の土坑SK 52とはほぼ同方位となる。平面形状は正方形を呈し、規模は長辺0.89m・深さ0.18mを測る。覆土は褐灰色粘質土である。出土遺物は確認することができなかった。試論としては、東側の土坑群と同様の土採りの土坑と思われる。周辺の類例から近世以降の時期に属するものと考えたい。

土坑SK 68（第10図 図版10）

1区南側5D区に位置する。本趾はSK 58と同規模であり、各辺も同一方向の北西から南東方向である。平面形状は正方形を呈し、規模は一辺約0.96m・深さ0.14mを測る。覆土は褐灰色粘質土で出土遺物は確認



第9図 土坑SK04・05・08・10・11・14・15・22・23・41平面及び断面図



第10図 土坑 SK 52・57・58・68・69・73・74・75・76 平面及び断面図

できなかった。本趾も周辺の土坑と同じく土採り土坑と思われる。SK 58 と形状・規模共に類似していることから、探査量を規定したものであろうと考えられる。近世以降の時期に属するものと思われる。

土坑 SK 69 (第10図 図版10)

1区南側4D・E区に位置する。西辺は土坑SK 88 を切っている。突出した北・東辺は、擾乱を受けていることから現状を留めていない。本来の平面形状は正方形を呈していたものと思われる。規模は長辺1.15m・深さ0.10mを測る。覆土は褐色粘質土で出土遺物は確認することができなかった。本趾も周辺の土坑と同じく土採り土坑と思われる。SK 58・68 と形状・規模共に類似している。近世以降の時期に属するものと考えられる。

土坑 SK 73 (第10図)

1区南側4B区に位置する。東辺の一部は擾乱によって欠損している。平面形状は梢円形を呈し、長軸は北北東から南南西方向である。規模は長辺1.65m・深さ0.31mを測る。覆土は暗赤灰色粘質土で弥生時代中期後半の遺物が約10点ほど出土した。遺構の性格は不明である。出土遺物から弥生時代中期後半に属するものと思われる。

土坑 SK 74 (第10図)

1区南側4D区に位置する。平面形状は円形を呈し、規模は長辺0.58m・深さ0.07mを測る小型土坑である。覆土は暗赤灰色粘質土で弥生時代中期後半の遺物が少量出土した。遺構の性格は不明である。出土遺物から弥生時代中期後半に属するものと思われる。

土坑 SK 75 (第10図)

1区南側4D区に位置する。東辺は擾乱を受けて浅くなる。平面形状は梢円形を呈し、長軸は北西から南東に向いている。規模は長辺1.79m・深さ0.17mを測る。覆土は暗赤灰色粘質土で弥生時代中期前半の遺物が少量出土した。遺構の性格は不明である。

土坑 SK 76 (第10図)

1区南側4D・E区に位置する。平面形状は梢円形を呈し、長軸は北東から南西に向いている。規模は長辺0.58m・深さ0.08mを測る。覆土は暗赤灰色粘質土で弥生土器が出土した。遺構の性格は不明である。

3. 溝

溝 SD 01 (第11図 図版4)

1区北側2Bから2D区に位置する。本趾中央で北側へ直角に伸びるSD 02と、東端にて直角にはしめる溝SD 03とつながっている。溝は3条共に切り合い関係を確認できなかったことから、同時期に機能していたものと思われる。主軸方向は西から10°北に傾く東西方向にはしむ。平面形状は直線的であり、断面形状は皿状を呈する。検出長21.1m、検出面からの深さ0.14mを測る。溝の床面には周溝SD 06から08・10・12・14・19が両肩近くにめぐる。覆土は上層がにぶい黄橙色シルトで、下層は黒褐色シルトである。床面の周溝の覆土には暗褐色シルト・褐灰色シルトがみられる。溝の上層と周溝を含む下層については堆積状況に大きな違いを見出せる。上層は溝が機能を停止し廃棄された後の堆積であるのにに対し、下層は溝が機能していた際に周溝を掘り返した時の堆積とみられる。これらの堆積状況は、溝の機能的な性格を表しているものと解釈できるが、精細な用途については不明である。株洲の甕片が出土しており、遺構の埋没した時期は中世以降と考えられる。

溝SD 02 (第11図 図版5)

1区北側1・2B区に位置する。本趾はSD 01中央と接して北側へ直角に伸びる。SD 01との切り合い関係が確認できなかったことから、同時期に機能していたものと思われる。方向の主軸は北から6°東に傾く。平面形状は直線的であり、断面形状は皿状を呈する。検出長8.85m・検出面からの深さ0.12mを測る。溝の床面の両肩に沿って周溝がめぐる。覆土は上層ににぶい黄橙色シルトで下層は黒褐色粘質シルトである。また、下層には地山の黄橙色粘土がブロック状に混入する。周溝の覆土には暗褐色シルト・褐灰色シルト等が数層みられる。出土遺物は確認できなかった。造構の性格は不明である。時期はSD 01と同様に中世以降と考えられる。

溝SD 03 (第11図 図版5)

1区北側1・2D区に位置する。溝SD 01とはほぼ直角に接する。SD 01との切り合い関係が確認できなかったことから、同時期に機能していたものと思われる。方向の主軸は北から5°東に傾く。中央より北側は直線状に伸びるが、南側は西へ僅かに湾曲し、南端は床面の周溝と共に円弧を描きながら巡る。断面形状は皿状を呈する。検出長15.1m・検出面からの深さ0.18mを測る。溝の床面の両肩に沿って周溝が巡る。覆土は上層ににぶい黄橙色シルトで下層は黒褐色粘土が主体となる。また、下層には地山の黄橙色粘土がブロック状に混入する暗褐色粘土がみられた。覆土より弥生土器が数点出土した。造構の性格は不明である。時期はSD 01と同様に中世以降と考えられる。

溝SD 04 (第11図 図版5)

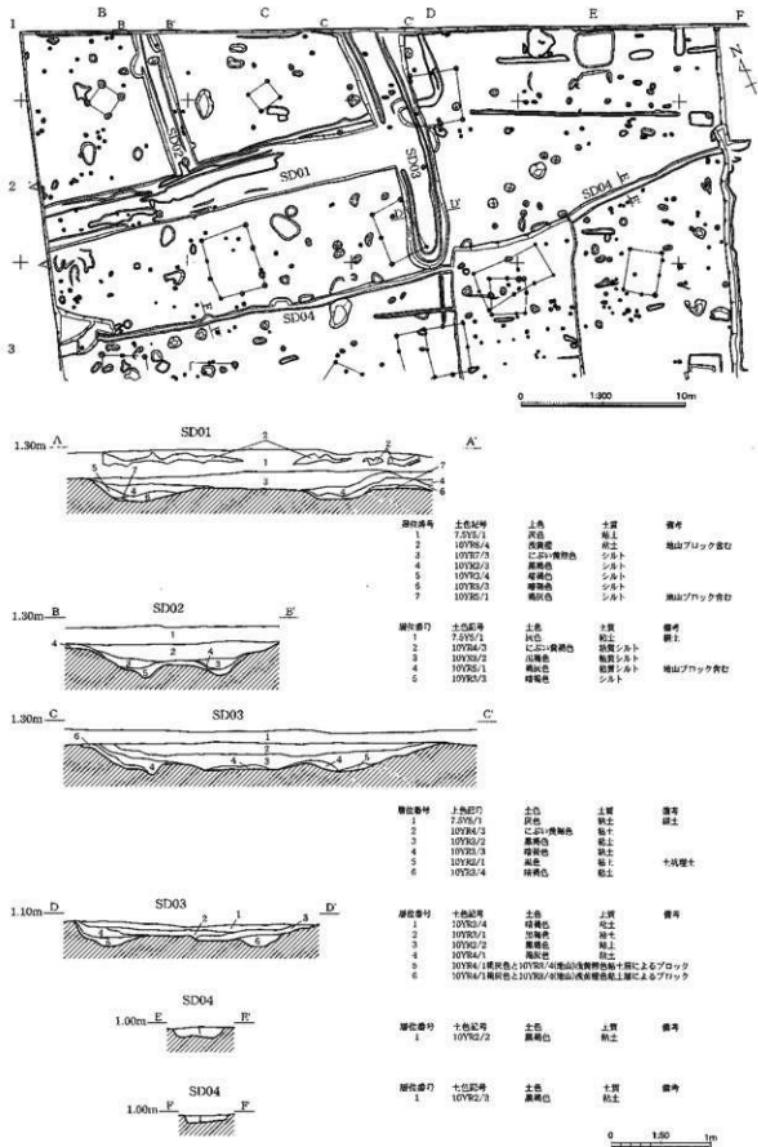
1区中央2・3BからF区に位置する。1区の調査地西端から東端までほぼ直線状にはしる細長い溝である。中央のD・E区において搅乱に切られる。土坑SK 15等弥生時代中期に属すると思われる造構を切っている。方向の主軸は西から10°北に傾く。中央より東側は直線状に伸びるが、西側は僅かに北へ湾曲する。断面形状は皿状を呈する。検出長43.7m・検出面からの深さ0.07mを測る。覆土は黒褐色粘質土の単一層である。弥生上器の壺や甕の破片が出土した。規模は小さいが、東西方向に長く連続していることから、排水等の流路の性格を有するものと考えられる。出土遺物や切り合い関係を勘案するに、弥生時代中期から後期に属するものと思われる。

溝SD 22 (第12図 図版9・10)

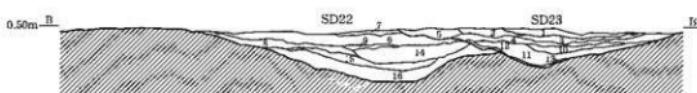
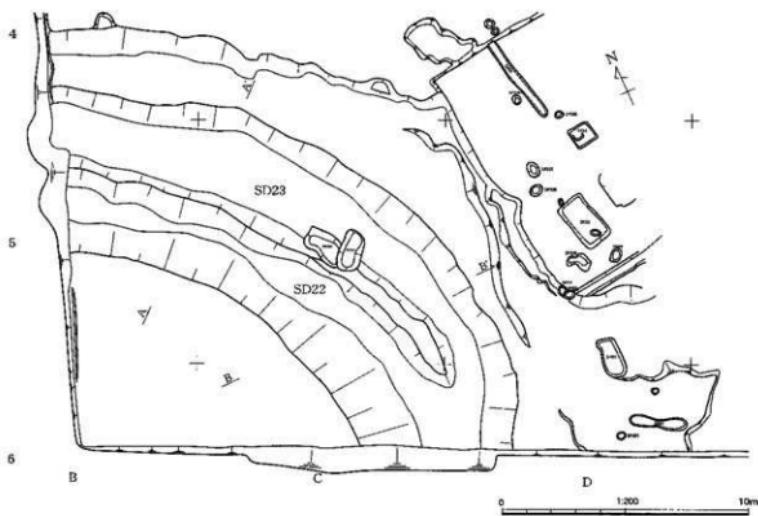
1区南西側5Bから6D区に位置する。平面形状は北西から南東に大きく弧を描き、東側には溝SD 23が並行してはしり本趾の西側を切っている。断面形状は椀状を呈する。検出長約17.5m・幅約3.5m・検出面からの深さ約0.80mを測る。覆土は大別して5層からなり、上位3層は灰色系の砂質層であった。下位の2層は黒褐色系の粘質シルトで、基盤層は砂質系堆積層であった。黒褐色系の粘質シルト層に数多くの弥生時代の遺物が出土する。本趾については自然流路を思わせる小規模な谷地形の中に位置していることから、既存の自然流路を利用して、新たに排水等の溝を掘削したものと考えられる。弥生時代中期の遺物も多く検出されたが、溝の時期としては弥生時代後期に属するものと考えられる。

溝SD 23 (第12図 図版9・10)

1区南西側5Bから6D区に位置する。平面形状は溝SD 22と同様に北西から南東に大きく弧を描いてはいる。断面形状は椀状を呈し、検出長約23m・幅約3.0m・検出面からの深さ約0.63mを測る。覆土は8層に分けられ、上位5層は灰色系の砂質層が主体をなす。それより下層は黒褐色粘質シルト層となり、弥生時代の遺物が多數出土している。本趾は自然流路と思われる谷地形の落ち込みを削り込んで掘削され、SD 22の東側を切っていることから、溝SD 22が埋没した後、東側へ排水等を目的とした溝を掘削しなおしたもの



第11図 溝SD 01から04平面及び断面図



第12図 溝S D 22・23 平面及び断面図

0 1.00 m

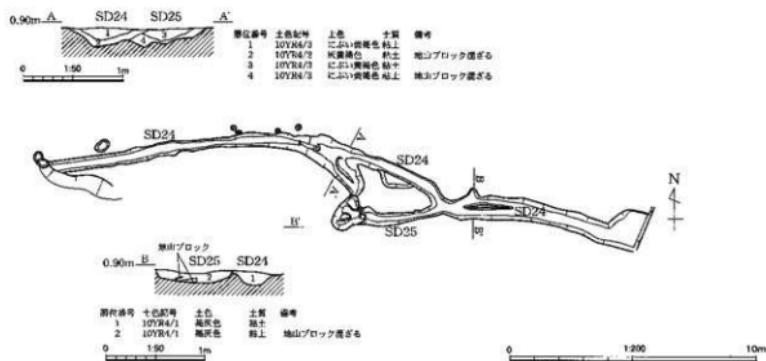
と考えられる。弥生時代中期の遺物も多く検出されたが、溝の時期としては弥生時代後期に属するものと考えられる。

溝 S D 24 (第 13 図)

1 区南側 5 D から F 区に位置する。方向は東側から西方向へ僅かに蛇行し、西端にて自然流路につながっている。断面形状は皿状を呈する。検出長約 24.1 m・幅約 1.1 m・検出面からの深さ約 0.12 m を測る。覆土は上層がにぶい黄褐色粘土で、下層は灰黄褐色粘土である。弥生土器のほか、各時代のものが出土した。溝の中央にて溝 S D 25 が南西方向に分離する。分離点より東側には、SD 24 に切られた SD 25 の中州状隆起や 2 条の溝底痕跡がみられた。本趾は、北側に近接する SK 52 や SK 67 などの土坑群や南東側に位置する土採り用機械の間を縫うように伸びており切り合いも認められないことから、ともに同時期に存在していたことが窺われる。遺構の性格は、東側から西側の自然流路に排水を行うための溝と考えられる。時期は出土遺物から近世末以降と考えられる。

溝 S D 25 (第 13 図)

1 区南側 5 E・F 区に位置する。本趾は東側から西方向へ緩やかに湾曲し、西端にて土坑 SK 72 につながっている。土坑 SK 72 については当溝の浄化槽的性格を有する可能性があるかと思われる。断面形状は皿状を呈する。検出長約 11.5 m・幅約 0.7 m・検出面からの深さ約 0.10 m を測る。覆土は上層ににぶい黄褐色粘土、下層は上層覆土に地山の黄褐色粘土のブロックが混入する。出土遺物は確認することができなかった。遺構の性格は、東側から西側の自然流路に排水を行うための溝と考えられる。SD 24 に切られており、これよりも古いと思われる。



第 13 図 溝 S D 24・25 平面及び断面図

第2節 2区の遺構

2区で確認された遺構は土坑・溝・自然流路の3類である。土坑は14基確認されており、そのうち1基からは弥生時代の土器片が出土しているが、ほとんどが近世以降のものと考えられる。1区でも検出された粘土探柵坑とおぼしき土坑が当調査区西端においても集中して検出されている。溝は当初SD 01からSD 26まで計26条の遺構を検出したが、調査の過程で東側端のSD 01・SD 05が自然流路の一部と判断されたほか、SD 17・SD 18・SD 21が同一のものとされたことから最終的に21条の確認となった。これらはその規模により、幅50cm以下のもの・1mから2mほどのもの・3m以上のもの3類に分類できる。最も古いものがSD 03・SD 04・SD 07といった比較的大規模な溝である。幅0.5m以下を有するSD 06・SD 10・SD 11・SD 15は近現代の水田耕作あるいは圃場整備に伴う水路であろうと思われる。幅1mから2mの溝は平面形状がクランク状を呈するものがある。その覆土中から弥生時代中期や後期の土器片が出土しているものもあるが、土層観察のうえから、これらは後世の流れ込みである可能性が高いと思われる。2区東側は低地状を呈しており、近世以降幾条もの溝が掘削されていたものと思われる。

1. 土坑

土坑SK 01からSK 05

2区北西端2H区に位置する。平面形状は円形もしくは梢円形を呈し、いずれも深さは概ね0.13mである。覆土は黒褐色砂質シルトを主体とし緑灰色砂質シルトの地山ブロックが混入する。遺物の出土はなかった。1区南側5D区で確認されている土坑群と同様、粘土採取の土坑であろうと考えられる。

土坑SK 07

2区西側3H区に位置する。平面形状は長方形を呈し、長軸は北東から南西を向く。長さ約3.8m・幅約2.7m・深さ0.4mを測り、断面形状は長方形である。覆土はSK 01からSK 05と同様であり、上記と同様に粘土採取の土坑であろうと考えられる。

土坑SK 08(第14図)

3J区北東隅に位置する。平面形状は梢円形を呈し、長軸1m・短軸0.8m・深さ0.38mを測る。覆土は黒褐色砂質シルトとオリーブ黑色細粒砂の2層に分けられ、下層から弥生時代後期のものと思われる土器片が2点出土している。詳細な性格は不明である。

土坑SK 12(第14図)

4K区に位置する。平面形状は不整形を呈し、最大長2m・最大幅1.2m・深さ0.17mを測る。覆土は黒



第14図 土坑SK 08・12 平面及び断面図

褐色砂質シルトで、SK 11にわずかに切られる。覆土中から弥生時代後期の上器小片が出土しているほか、漆塗りの木製碗の破片が出土している。時期は近世以降と思われる。

2. 溝

溝 SD 03・SD 04 (第15図 図版11)

1Jから5J区に位置し、2区中央を南北にはしる。SD 03とSD 04は、土層断面の観察より、併存していたものと考えられる。SD 03とSD 04の間には堤状を呈する地山が確認され、両溝を分けている。この堤状の地山は、南側へ向かうにしたがい次第に低くなり確認できなくなる。主軸は北から17°東に傾く。南側4Jから5J区では、緩やかに西方向へ弧を描きながら調査区外へと達する。規模についてはSD 03が幅3.5m・深さ0.8mを測り、SD 04の方がやや規模が大きく幅4.2m・深さ1mを測る。溝底の標高もSD 04では海拔-0.54mまで達する。断面形状は両者とも逆台形を呈する。土層断面を観察すると、両造構とも数回にわたり掘り返しが行われた跡が窺われる。出土遺物については、溝底より弥生土器・土師器・珠洲の破片等が混在して多量に出土している。また、SD 03溝底には平面形状が楕円形を呈する深さ0.3mほどの落ち込みが2箇所見られる。これら二つの落ち込みの底から遺物が多く出土している。SD 03・SD 04は、その他の造構との切り合い関係から、本区では最も古い造構と思われるが、珠洲等の出上から中世より遡ることはないものと考えられる。

溝 SD 07 (第15図 図版11)

2区中央部3Iから4I区に位置する。全長さ6mを測り、東端はSD 04につながり、西端は急激に立ち上がる。最大幅2.3mを測る。覆土及び確認面からの深さがSD 03・SD 04と酷似する。平面形状からも上記の造構と同様であることから、往時においてこれらは一体をなしていたものと推測される。出上遺物は弥生土器の破片が数点出土している。

溝 SD 12 (第15図 図版12)

2区の2Iから3I区に位置する。平面形状は緩やかなS字状を呈する。北端でSD 08と重複し、さらにSD 03・04の東方へ伸びると思われる。覆土は黒褐色シルトで緑灰色の粘土ブロックが混入する。弥生時代後期のものと思われる土器片が数点出土している。底面は更に一段溝状に掘り込まれた痕が確認されている。1区SD 01から03にみられる掘り込みにも類似しているが、性格は不明である。掘り込みの覆土は青灰色の細粒砂である。SD 03・SD 04が埋没した後に掘削されているため、概して近世以降の築造と思われる。

溝 SD 19 (第16図)

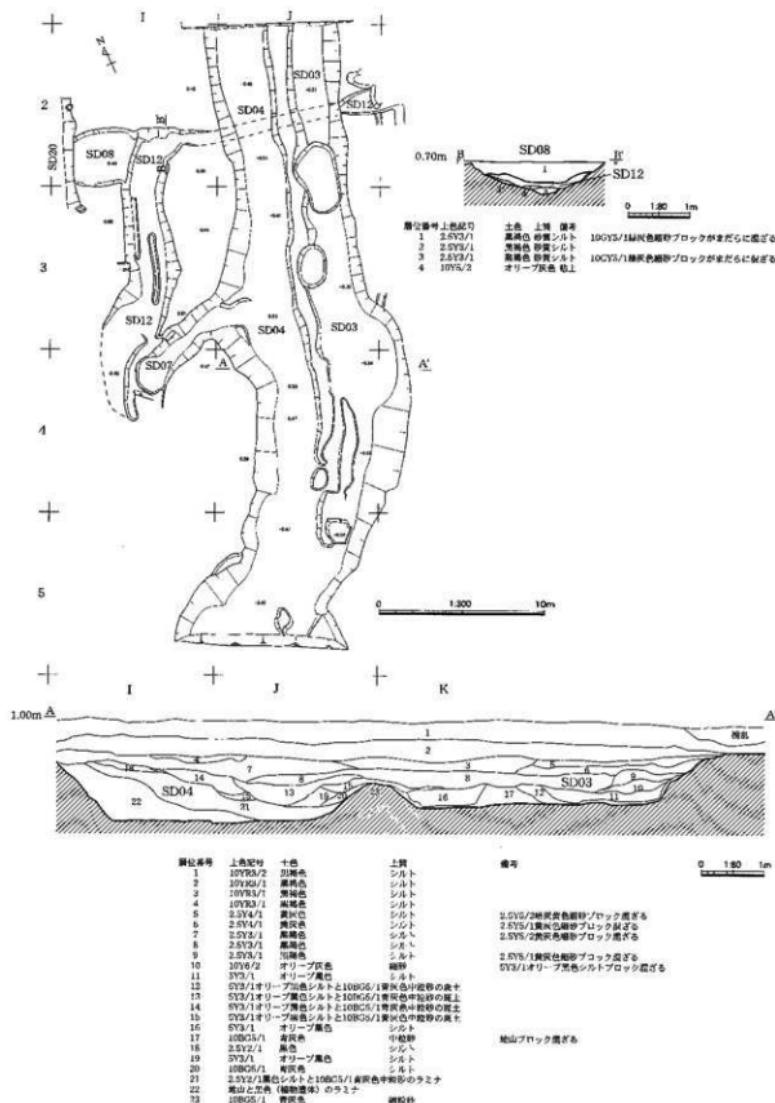
2区南端5Iから5K区及び4K区に位置する。5I区及び5K区においてほぼ直角に屈曲し、クランク状の平面形状を呈する。断面形状はU形を呈し、覆土は灰オリーブ色中粒砂・黒褐色シルト・黒褐色粘土の3層に分かれる。弥生土器片が出土している他、珠洲が5点ほど出土している。SD 17・SD 18・SD 20・SK 13より古くSD 24より新しい。

溝 SD 23 (第16図)

2区南西4Hから4I区に位置する。1区SD 24の延長とも考えられる。SD 20によって切られ、その先は確認できなかった。

溝 SD 24 (第16図)

2区南端5Iから5K区に位置する。調査区境に沿って東西に伸び、一部SD 19と重なっている。SD 03・SD 04より新しく、SD 02・SD 19・SD 26よりも古い。検出長41m・幅約3m・深さ0.25mを測り、

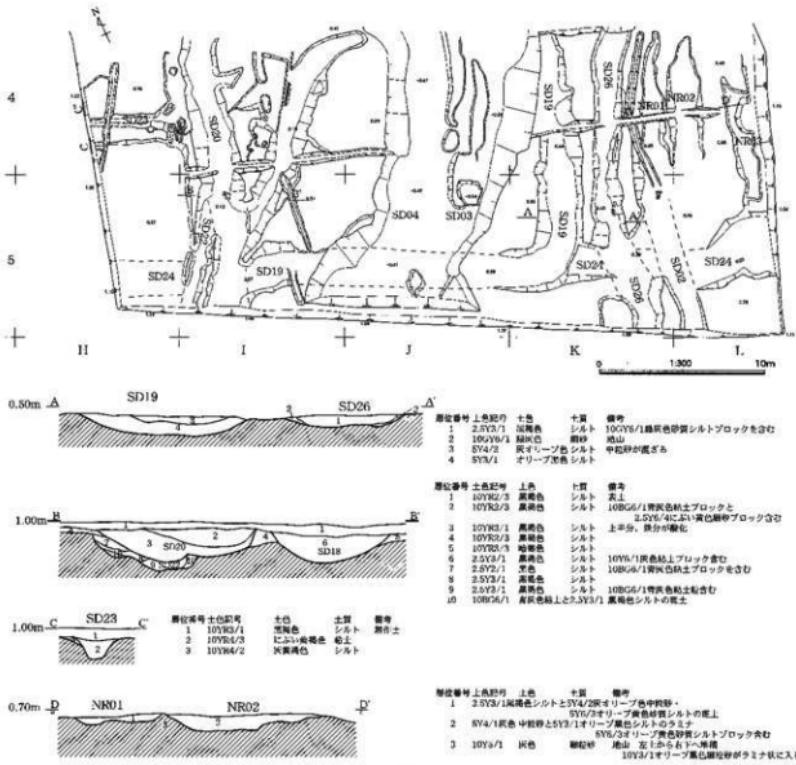


第 15 図 溝 S D 03・04・07・12 平面及び断面図

断面形状はU字形を呈する。覆土は黒褐色シルトで覆土中から近世陶磁器が出土しており、掘削時期は近世以降と考えられる。

3. 自然流路 (第16図)

2区東側では、SD 03・SD 04を境に東側で地山が落ち込み、さらに3区に到って再び微高地状になる谷地形を検出している。特にSD 02以東は灰色の砂層の上にオリーブ色の中粒砂層が南北方向へ筋状に堆積して自然流路の様相を呈している。2区北側の調査時は、湧水が激しく流路の状況がつかみきれなかったため、南側の調査に入る前に湧水処理を行い水位を下げて調査へとのぞんだ。その結果、東西方向に伸びる砂層をN R 01から03としてとらえることが出来た。N R 01・02・03とともに覆土は黒褐色シルトと灰オリーブ色の中粒砂である。この砂層中からは弥生時代後期のものと思われる土器片が多く出土している。また、珠洲や土師皿等の中世の遺物も出土している。この谷地形の東肩は3区南西隅において確認されており、2区と3区の間を区切る農道の直下へと伸びている。



第16図 溝SD 19・23・24・自然流路 平面及び断面図

第3節 3区の遺構

3区では、方形周溝墓をはじめ、土坑・井戸・掘立柱建物跡・櫓列と思われるピット・円形周溝状遺構・溝といつた遺構が検出されている。方形周溝墓は2基確認され、ともに弥生時代後期に属するものと思われる。周辺には土塹墓の可能性をもつかと思われる同時期の土坑が所在しており、墓域を形成していた可能性も考えられる。

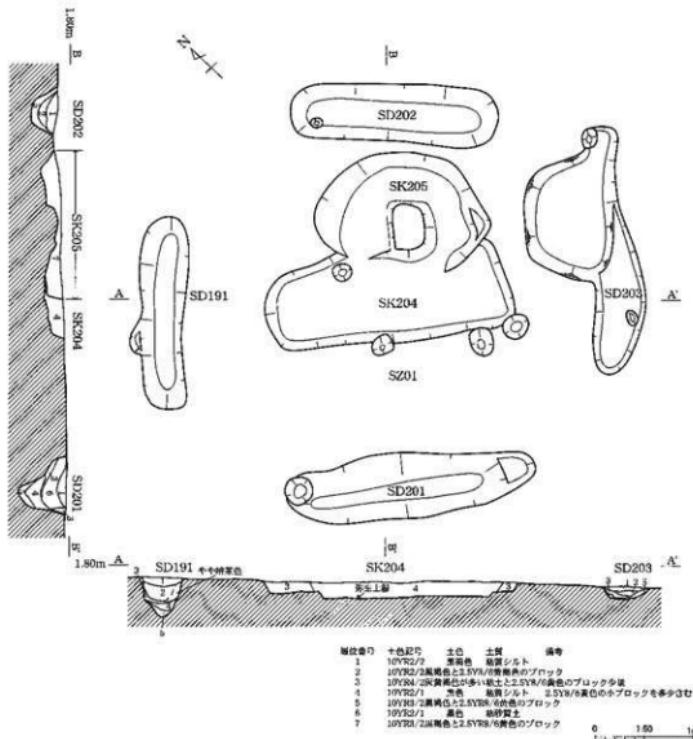
井戸は本調査区において6基検出されている。弥生時代後期に属するものが1基、その他は中世以降に属するものと思われる。

掘立柱建物跡及び櫓列跡については、平面的にある程度列をなすことや、土層観察のうえから柱穴と考えられるものを選定し、これらを総合的に考察したうえで提起するものである。溝は弥生時代後期に属するもののほか古代や中世以降のものが混在しているものと思われる。

1. 方形周溝墓

方形周溝墓 S Z 01 (第17図 図版13・14)

3区中央北寄り3N区に位置する。四方の周溝と主体部が確認された。長辺約5.2m・短辺約4.2mを測り、



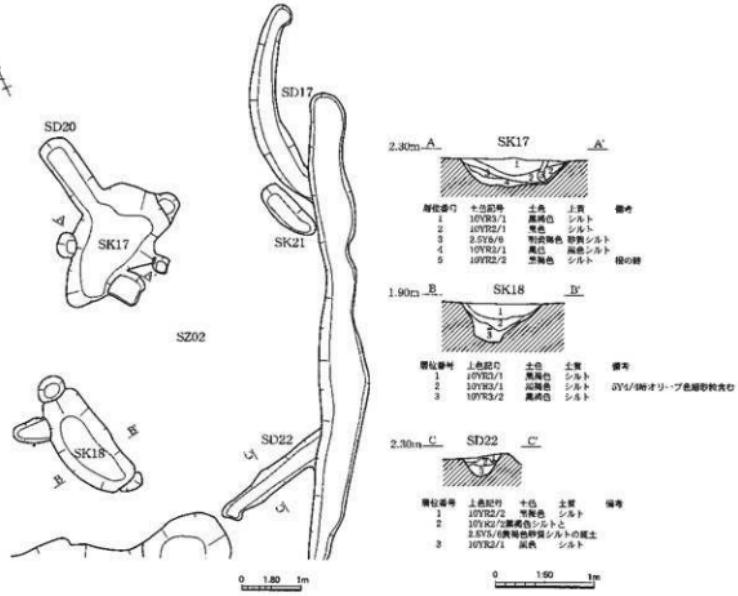
第17図 方形周溝墓 S Z 01 平面及び断面図

主軸方向は北から 41° 西に傾く。直線状を呈する周溝が四方を囲み、四隅に約 1.2 m の陸橋部を有する。断面の形状は深い椀状を主体とするが、皿状の浅い S D 203 もある。個々の周溝の規模は S D 191 が全長約 1.95 m・幅約 0.5 m・深さ約 0.35 m、S D 202 が全長約 2.1 m・幅約 0.63 m・深さ約 0.3 m、S D 201 が全長約 2.55 m・幅約 0.68 m・深さ約 0.4 m を測る。S D 203 は北東側を擾乱によって欠損しているが、検出長は約 2.25 m・幅約 0.5 m・深さ約 0.15 m を測る。覆土はいずれも黒褐色粘土が主体を占め、他に黄褐色土、灰黄褐色粘質シルト、下層においては地山の黄色粘土ブロックがみられた。各周溝から弥生土器の小片が出土している。

主体部 S K 204 は長方形の平面形状を呈するが、後世の土坑 S K 205 によって切られて北側を欠損している。主軸方向は北から 38° 西へ傾く。規模は検出長約 2.5 m・幅約 0.95 m・深さ約 0.23 m を測り、断面形状は皿状を呈する。覆土は中心部が黒色粘質シルト、掘方にある周辺部分は灰黄褐色粘土である。遺物は弥生土器の小片が出土した。規模的には比較的小型の部類に属するが、主体部が残存している希少な例といえる。築造時期は出土遺物から弥生時代後期に属するものと思われる。

方形周溝墓 S Z 02 (第 18 図 図版 19)

3 区南側の 5〇区に位置する。周溝と思われる溝状構造が 4 基検出されたが、S Z 01 でみられたような主体部は本跡では確認されなかった。長辺約 5.7 m・短辺約 5.2 m を測り、主軸は北から約 10° 西に傾く。周溝は四方を囲み、周溝と周溝の間には 1.3 m 程度の陸橋が存在する。周溝は北側から時計回りに S K 17・S K 21・S D 22・S K 18 となり、S D 22 直線状を呈するが、他は梢円形に近い形状を呈している。S K 17 は全長約 2.23 m・幅約 1.10 m・深さ約 0.3 m を測る。S K 17 は S D 20 を切り、SP243、SP253 に切られた



第 18 図 方形周溝墓 S Z 02 平面及び断面図

いる。覆土中から弥生土器の小破片が100点以上出土している。SK 21は全長約1.90m・幅0.91m・深さ0.2mを測る。SD 22は検出長約2.2m・幅約0.4m・深さ約0.2mを測る。東端を近代以降のものと思われる溝SD 23により切られている。SK 18は検出長約2.16m・幅0.92m・深さ0.41mを測り、SP 263・264に切られ、SP 283を切る。弥生時代後期の土器片が多数出土している。いずれの周溝も断面形状はやや浅めの楕円形を呈する。覆土は黒褐色の粘質シルトが主体を占め、下層に明黄褐色の砂質シルトと黒褐色のシルトが互層をなしている。東側のSK 21とSD 22は削平を受けて上層が消滅していた。SZ 01と同様に、四隅に陸橋を有する方形周溝墓であると考えたい。規模も同様に小型に類似し、時期も弥生時代後期に属するものと思われる。

2. 土坑

土坑SK 01 (第19図 図版15)

3区北端2M区に位置する。北側角をP T 02に切られ、西側に土坑SK 06、南側に溝SD 01が近接している。平面形状は長方形を呈し、長辺1.16m・短辺0.65m・深さ0.16mを測る。覆土は黒褐色粘質土を呈し、弥生土器の小片が出土した。遺構の性格としては、形状及び規模から土壙墓の可能性が考えられる。出土遺物から弥生時代後期に属するものと考えられる。

土坑SK 02 (第19図)

3区北側2M区に位置する。溝SD 01を切っている。長軸は北東から南西方向で、東から20°北に傾く。平面形状は隅丸長方形を呈し、長辺0.96m・短辺0.72m・深さ0.14mを測る。覆土は黒褐色砂質シルトでSK 01に類似する。出土遺物は確認できなかった。形状及び規模から土坑SK 01と同様に七坑墓の可能性を考えたい。

土坑SK 05 (第19図)

3区北側2N区に位置する。北側に溝SD 03が近接している。平面形状は南北方向に長軸を有する梢円形を呈し、長辺0.71m・短辺0.70m・深さ0.33mを測る。覆土は2層に分層され、上層が黒褐色粘土層で下層は褐灰色シルトである。覆土から弥生土器が数点出土した。遺構の性格は不明である。出土遺物から弥生時代後期に属するものと考えられる。

土坑SK 06 (第19図 図版14)

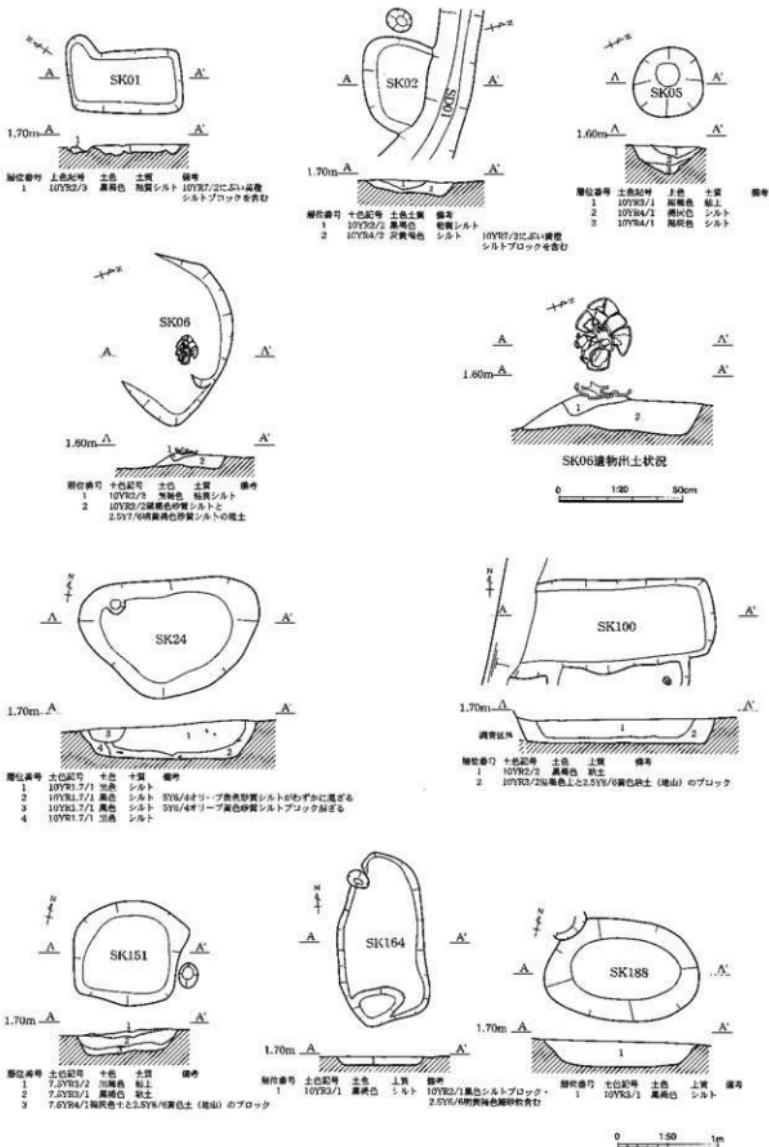
3区北側2M区に位置する。南辺は搅乱によって欠損している。長軸は東西方向で、東から30°北側に傾く。平面形状は梢円形を呈し、長軸1.65m・短軸1.27m・深さ0.18mを測る。覆土は黒褐色砂質シルトであり、土坑の中心から赤色された台付装飾壺1129が供獻されたかのような状態で出土している。遺構の性格としては、土壙墓の可能性が考えられる。出土遺物から弥生時代後期に属するものと思われる。

土坑SK 24 (第19図 図版20)

3区西側4M区に位置する。長軸は東から約14°北へ傾く。平面形状は東西方向を長軸とした梢円形を呈し、長軸1.88m・短軸1.22m・深さ0.38mを測る。断面形状は逆台形を呈する。覆土は黒色シルトを主体とし、下層には地山と同様のオリーブ黄色砂質シルトのブロックが少量混入する。覆土中から弥生時代後期のものと思われる土器片が多数出土したほか、ソーダガラス製の玉が出土している。遺構の形状やガラス玉等の出土遺物からSK 06と同様に土壙墓であろうと考えられる。時期も弥生時代後期に属するものと思われる。

土坑SK 28 (第19図)

3区南側4N区に位置する。北辺は土坑SK 29を切る。長軸は西から21°北に傾く。平面形状は梢円形を



第19図 3区検出土坑 平面及び断面図

呈し、長辺 1.2 m・短辺 1.0 m・深さ 0.72 m を測る。覆土は黒褐色粘土で、弥生土器をはじめ土師器や須恵器の小破片が出土している。遺構の性格は不明である。出土遺物から古代前半に属する可能性も考えられる。

土坑 SK 100 (第 19 図)

3 区北側 3 M 区に位置する。西側は調査区外へと達し、南側は土坑 SK 101 を切る。長軸は東西方向を呈するが、厳密には東から 4°ほど北に傾く。平面形状は長方形を呈し、長辺 1.90 m・短辺 0.90 m・深さ 0.25 m を測る。断面形状は逆台形を呈する。覆土は黒褐色粘土を呈する。弥生土器の壺や甕の小片が約 50 点出土した。遺構の性格としては、その形状や規模等から土壤墓と考えたい。時期は出土遺物から弥生時代後期に属するものと思われる。

土坑 SK 151 (第 19 図)

3 区北側 3 M 区に位置する。主軸は北から 20° 西に傾く。平面形状は概ね方形を呈するが、北辺角が隅丸状となる。長辺 1.1 m・短辺 1.05 m・深さ 0.16 m を測る。覆土は黒褐色粘土で弥生土器の壺や甕の破片が約 30 点出土している。遺構の性格については不明である。出土遺物から弥生時代後期に属するものと考えられる。

土坑 SK 164 (第 19 図)

3 区北側 3 N 区に位置する。西辺は後世のピット群に切られている。主軸は北から 2° 西に傾く。平面形状は長方形を呈するが、北西角は削平を受けているため細長くなっている。長辺 1.7 m・短辺 0.80 m・深さ 0.7 m を測る。覆土は黒褐色粘土で弥生土器の壺や甕の破片が少量出土している。遺構の性格については、形状や規模等から土壤墓の可能性がある。出土遺物から弥生時代後期に属するものと思われる。

土坑 SK 188 (第 19 図)

3 区北側 3 N 区に位置する。北西辺はピット SP 186・187 に切られている。主軸は東から 20° 北に傾く。平面形状は楕円形を呈し、長辺 1.6 m・短辺 1.5 m・深さ 0.24 m を測る。覆土は黒褐色シルトで出土遺物は確認できなかった。遺構の性格は不明である。覆土や形状が周囲にある弥生時代後期に属すると考えられる遺構と類似することから、これらと同時期に属するものと思われる。

3. 井戸

井戸 SE 01 (第 20 図)

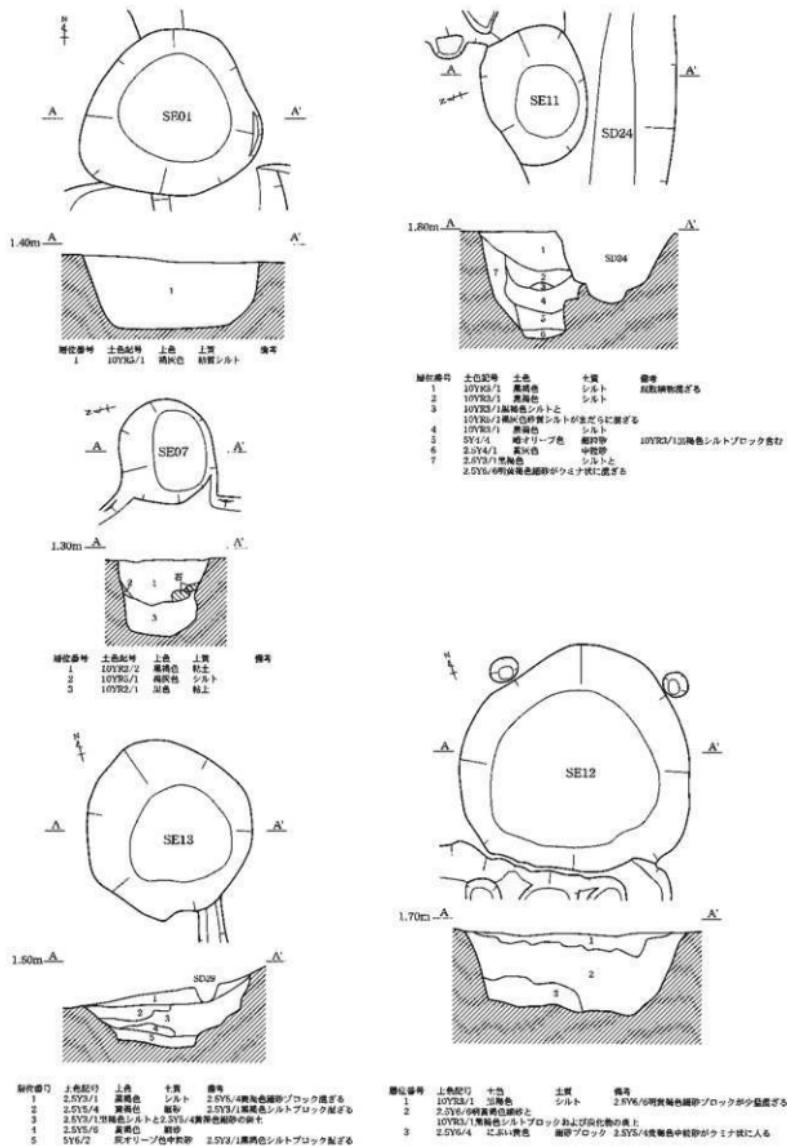
3 区北側 2 O 区に位置し、北西から南東方向にはしる溝 SD 03 の中央を切る。平面形状は楕円形を、断面形状は逆台形をそれぞれ呈しており、長径 1.85 m・短径 1.65 m・深さ 0.82 m を測る。覆土は褐灰色粘質シルトである。覆土より木製の結構側板と底板材が出土した。遺構の時期は中世以降に属するものと考えられる。

井戸 SE 07 (第 20 図)

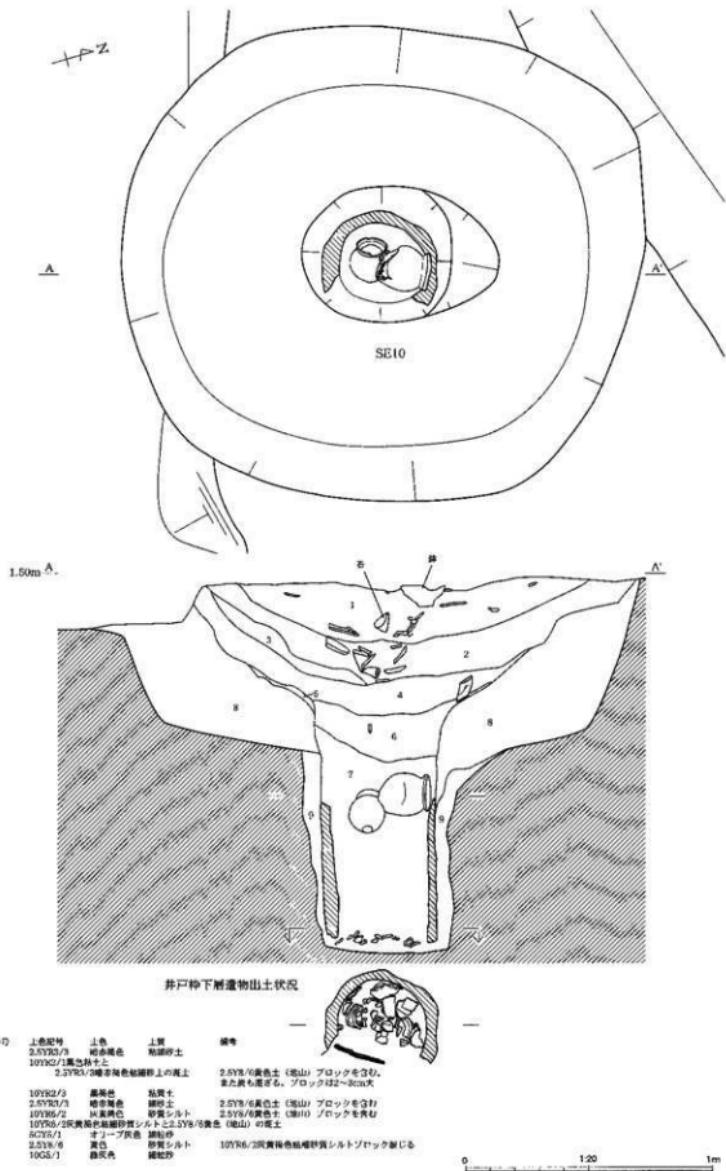
3 区北側の 3 O 区に位置する小型で浅い井戸である。西側は擾乱によって上部が欠損していた。平面形状は東西方向に長い楕円形、断面形状は逆台形を呈し、長径 1.22 m・短径 1.1 m・深さ 0.82 m を測る。現状では素掘りと考えられるが、覆土は上下 2 層に分層でき、かつ土層の境に円礫が多くみられたことから、下層に井戸枠等の構造物が存在した可能性も考えられる。覆土は上層が黒褐色粘土、下層は褐灰色シルトである。弥生土器をはじめ、陶磁器や円礫等が出土した。出土遺物から中世以降に属するものと考えられる。

井戸 SE 10 (第 21 図 図版 15・16)

3 区中央 2 N 区から 2 O 区に位置する。遺構の南北は擾乱と SD 04 によって切られている。平面形状は楕円形を呈し、断面形状は逆台形を呈する。上部で直径 2.2 m・深さ 0.65 m を測る。構造については上部に大きな逆台形の掘方を有し、下部は筒状に掘削して一木割り貫きの井戸枠が設置されていた。井戸枠内部の覆土



第20図 井戸 S E 01・07・11・12・13 平面及び断面図



第 21 図 井戸 S E 10 平面及び断面図

の堆積は、本趾の中層まで垂直に続いていることから、井戸枠の本来の高さは現状よりおよそ 0.4m 高い 1.0 程度であった可能性が考えられる。その上部には楕円形の堆積がみられる。下部の掘方は深さ 1.05m・直径 0.65m、井戸枠は全長 0.6m・直径 0.45m・厚さ 0.1m を測る。覆土は上部掘方内の上層が暗赤褐色粘細粒砂と黒色粘土、中層が黒褐色粘砂質土、下層が黄色砂質シルトである。井戸枠内の覆土は上層が灰黄褐色粘細粒砂質シルト、下層がオリーブ色粘細粒砂を呈する。

出土遺物は井戸枠内の覆土よりほぼ完形の甕が 2 個体 (1133・1134) 出土したのをはじめ、井戸上層の橈状に堆積した埴土より、井戸を埋める際に投棄されたと思われる壺や甕の破片が多数出土した。また、最上層には完形の鉢が 1 点 (1146)、最下層の井戸枠内底部からは細かく砕かれた破片が多数出土した。最上層において検出した鉢 1146 は、井戸の中央にて正位置で備え付けられた状態であったことから、井戸を埋める際の祭祀に使われたことが考えられる。底から出土した碎片は井戸枠の下端に潜り込んでいたことから、枠を設置する以前に投入されていたと推測される。細かく砕かれていることから、井戸水を浄化・濾過することを目的に数かれていた可能性が考えられる。概して小規模でありながらも丁寧な造りをした井戸といえる。出土遺物から弥生時代後期に築造され、比較的短期間のうちに廃棄されたものと考えられる。

井戸 S E 11 (第 20 図)

3 区南側 5 〇区に位置する小型の井戸である。近世以降の溝と思われる S D 21・24 に切られ、上部南側半分が欠損している。平面形状は楕円形で断面形状は逆台形を呈する。構造は素掘りと考えられる。長径約 1.4 m・短径約 1.1 m を測る。覆土の上層は黒褐色のシルトである。下層は暗オリーブ色粘細粒砂を呈し、上端から 1.0 m 程度地山の黄灰色中流砂となる。弥生土器をはじめ、土師器や須恵器が出土している。

井戸 S E 12 (第 20 図 図版 20)

3 区南側 5 N 区に位置する素堀りの井戸である。平面形状は直徑約 2.3 m の円形を呈する。断面形状は逆台形を呈し深さ約 0.8 m を測る。覆土は明黄褐色の細粒砂と黒褐色シルトが斑状に混ざりあっており炭化物が含まれるが、底部付近は暗灰黄色の中流砂となる。出土遺物としては弥生時代のものと思われる土器片が少量出土している。上端北側にピットが 2 基 (S P 280・281) 隣接して所在しており、井戸の上層の存在した可能性があるかと思われるが、後世に掘削された溝 S D 28 の存在により対応するピットは確認できなかった。

井戸 S E 13 (第 20 図)

3 区南側 5 N 区で、上記 S E 12 から 2 m 程度南に位置する。3 区南西端には東から西に向かって急な落ち込みがみられるが、本趾はその落ち込み直下で検出された。平面形状は円形を呈し、直徑約 1.8 m・深さ 0.6 m を測る。断面形状は逆台形を呈し、覆土は黒褐色シルトと明黄褐色細粒砂の斑土である。覆土からは弥生時代の土器片が少量出土している。上面には近代の溝 S D 29 が検出されている。S E 12 の覆土と近似していることから、同時期の可能性をもつと思われる。また、同様の覆土が 3 区南西端の落込み面に堆積していた。

4. 建物

当区において想定した建物の総計は 10 棟を数える。これらの建物は主軸の方向から 3 グループに分類できる。最も多いものは北を主軸とし西側へ $0^\circ \sim 10^\circ$ 傾く 7 棟の建物である。そして東へ約 20° 傾く 2 棟がこれに続き、最も少ないのが東へ 15° 傾く 1 棟が所在する。以下、便宜的に数の多い建物から A 群 (北から西側へ $0^\circ \sim 10^\circ$)・B 群 (北から東側へ 20°)・C 群 (北から東へ 15°) に分類して記述をすすめることとする。

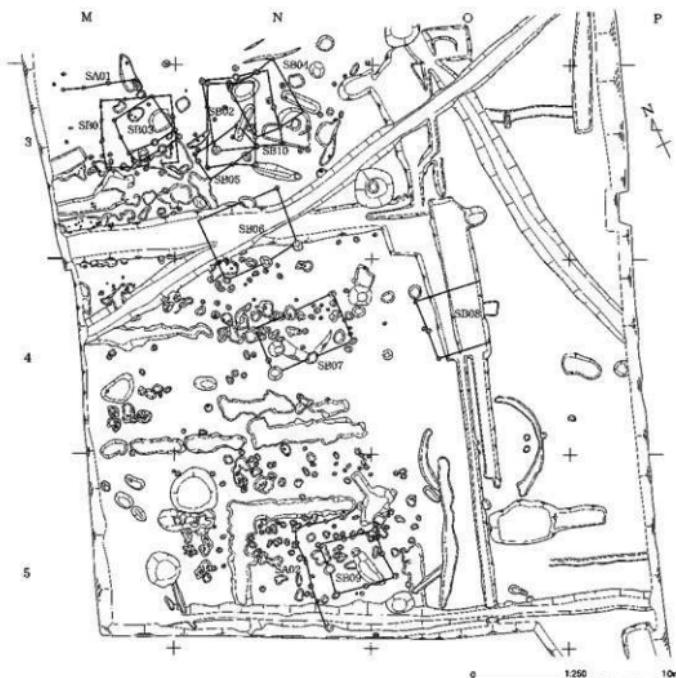
A群建物

建物SB 03 (第23図)

3M区に位置し、3間×2間の構造を有すると思われる建物である。桁行2.5m・梁行2.3mを測り、主軸は北から西へ約10°傾く。北辺中央の柱穴はSP 127の内側へ入り込んでいるものと考えられる。南辺より北へ1間は柱間が狭いことから、底状の構造が想定される。柱間は桁行が約0.9m・梁行が約1.2m・底と考えた部分は約0.4mを測る。各柱穴の規模については、北西角のSP 122が直径0.17m・深さ0.8m、南西角のSP 136が直径0.33m・深さ0.8m、北東角のSP 148が直径0.18m・深さ0.20m、南東角のSP 162が直径0.26m・深さ0.12mを測る。覆土はいずれも黒褐色粘質土である。本趾は南東側に接するSB 05と同様の方位である。北辺中央の柱穴SP 127から弥生土器片30点が少量の炭片とともに出土した。

建物SB 04 (第23図)

3N区に位置し、2間×2間の構造を有すると思われる建物である。桁行2.9m・梁行2.7mを測り、主軸は北から約5°西へ傾く。東辺中央の柱穴は建物の内側へ0.25m入り込んでいた。北西角の柱穴SP 187は北側のSB 02に伴う柱穴SP 184を切ることから、本趾はSB 03より新しいことが窺われる。また、南側の土坑SK 188を切っている。西辺中央と南東角の柱穴は、方形周溝型SZ 01の周溝に切られており確認はできなかった。柱間は桁行1.4m・梁行1.2から1.4mを測る。各柱穴の規模は、北西角のSP 187が直径0.40

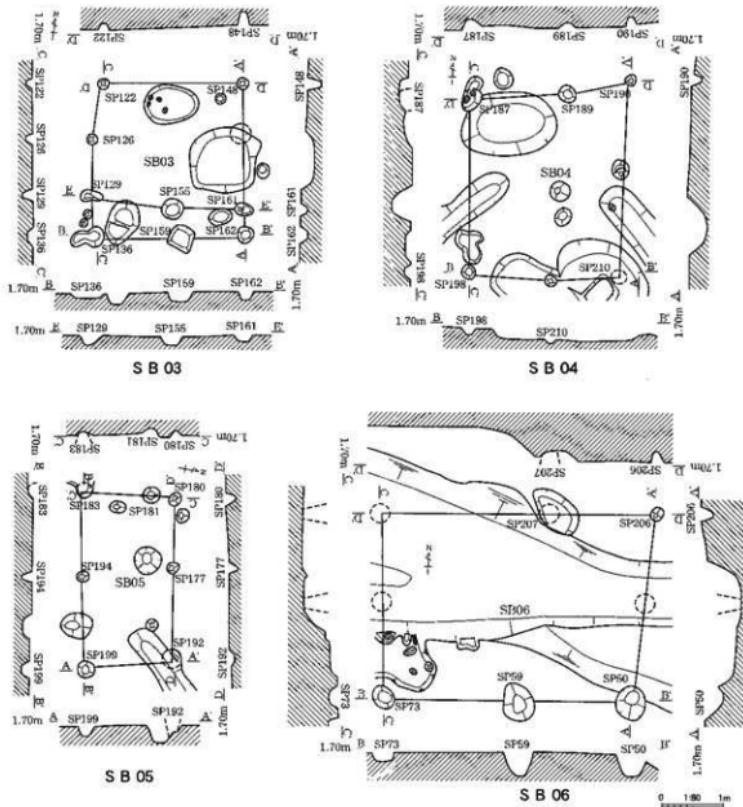


第22図 3区掘立柱建物群 (SB 01~10)

m・深さ 0.16 m、南西角の S P 198 が直径 0.21 m・深さ 0.08 m、北東角の S P 190 が直径 0.20 m・深さ 0.13 m を測る。覆土はいずれも黒褐色粘質土である。建物は西側に近接する建物 S B 03 や S B 05 と同様の方位である。南辺の柱穴 S P 210 より弥生土器片が 2 点出土した。

建物 S B 05 (第 23 図)

3 N 区に位置し、2 間 × 1 間の構造を有するとと思われる建物である。桁行 2.7 m・梁行 1.4 m を測り、主軸は東から約 10° 北へ傾く。北東角の柱穴 S P 192 は方形周溝墓 S Z 01 の周溝 S D 191 を切っている。また南東角の柱穴 S P 183 は溝 S D 169 に切られている。西側に土坑 S K 151・164、溝 S D 146・169 が本趾と同一方向に並ぶ。また、北辺に近接する溝 S D 176 は建物に対し平行しており、その規模も本趾の柱間の間隔と同一であることから、何らかの付属施設と考えたい。柱間規模は桁行 1.4 m・梁行 1.4 m を測る。各柱穴の規模は、北西角の S P 180 が直径 0.24 m・深さ 0.21 m、南西角の S P 183 が直径 0.30 m・深さ 0.11 m、北東角の S P 192 が直径 0.26 m・深さ 0.11 m、南東角の S P 199 が直径 0.26 m・深さ 0.13 m を測る。覆



第 23 図 振立柱建物 S B 03~06 平面及び断面図

土はいずれも黒褐色粘質土である。付近に所在するSB 03・04・06と同様の方位を呈する。南西角の柱穴SP 183から弥生土器の裏片2点が出土した。

建物SB 06(第23図)

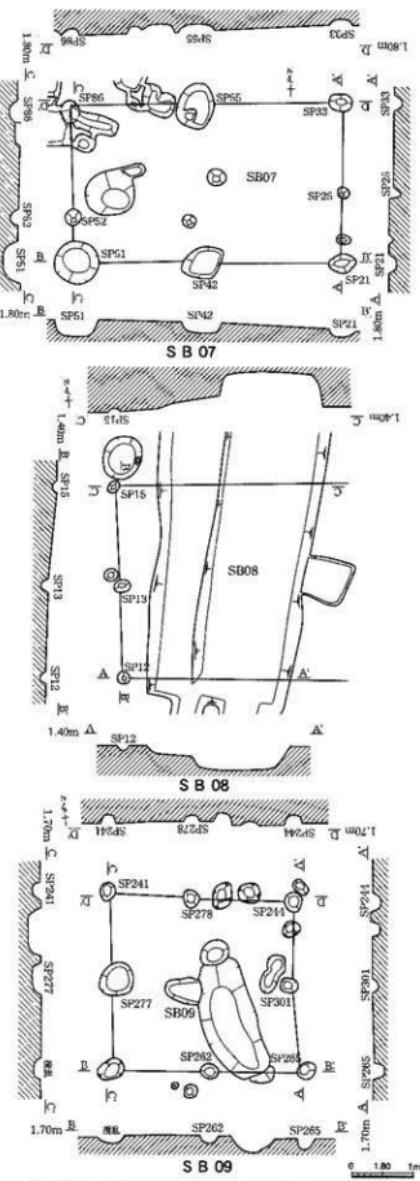
3N区に位置し、2間×2間の規模を有するとと思われる建物である。規模は桁行4.2m・梁行3.1mを測り、主軸は東から約1°北へ傾く。北西角及び西・東辺中央の柱穴は、溝SD 04と擾乱に切られ欠損している。西及び東辺の中央柱穴は確認できなかった。南側に本趾と同規模で同方位を呈するSB 07がある。柱間規模は桁行2.1mを測る。梁行は一辺の中央に想定すると1.5mを測る。各柱穴の規模は、南西角のSP 73が直径0.44m・深さ0.15m、北東角のSP 206が直径0.20m・深さ0.21m、南東角のSP 50が直径0.57m・深さ0.16mを測る。覆土はいずれも黒褐色粘質土で南辺中央の柱穴SP 59から弥生土器片2点が出土した。

建物SB 07(第24図)

4N区に位置し、2間×2間の規模を有するとと思われる建物である。規模は桁行4.4m・梁行2.6mを測り、主軸は東から約1°北へ傾く。北東角の柱穴はSP 86・87に切られている。柱間規模は桁行2.2m・梁行1.5から1.7mを測る。各柱穴の規模は北西角のSP 86が直径0.38m・深さ0.21m、南西角のSP 51が直径0.70m・深さ0.27m、北東角のSP 33が直径0.42m・深さ0.14m、南東角のSP 21が直径0.43m・深さ0.11mを測る。覆土はいずれも黒褐色粘質土である。本趾の北側に位置するSB 06や東側に位置するSB 08がほぼ同様な規模で同様の方位を呈しており、同時期のものである可能性が考えられる。

建物SB 08(第24図)

4O区に位置する。東側半分以上は、後世の溝SB 08と擾乱によって大きく削平を受けている。梁行3.1mを測り、主軸は東から約2°北へ傾く。西辺中央の柱穴には、添柱の可能性をもつ柱



第24図 挖立柱建物SB 07~09 平面及び断面図

穴 SP 14 がみられる。桁行の柱間規模は 1.8 m を測る。各柱穴の規模は、北西角の SP 15 が直径 0.23 m・深さ 0.07 m、西辺中央の SP 13 が直径 0.27 m・深さ 0.09 m、南西角の SP 12 が直径 0.20 m・深さ 0.08 m を測る。覆土はいずれも黒褐色粘質土である。近接する建物 S B 06・08 と同様の方位を呈することから同時期のものと考えたい。

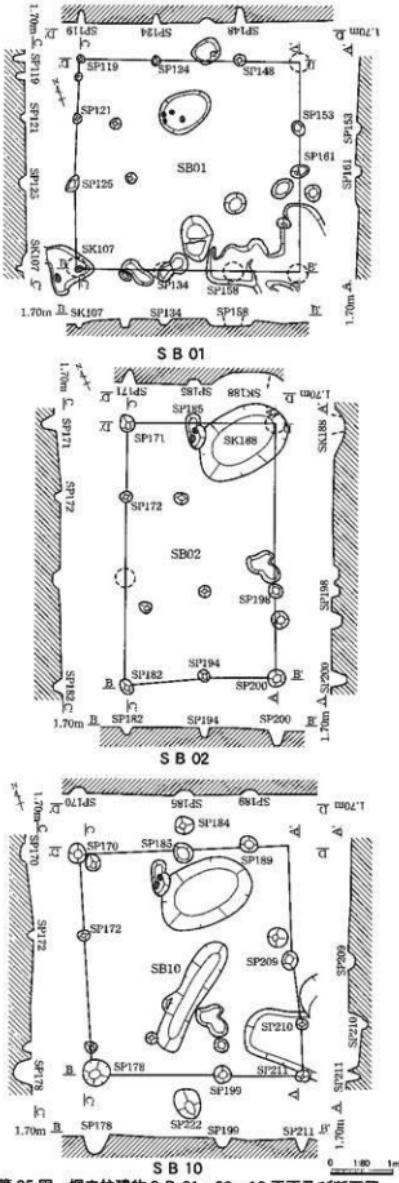
建物 S B 09 (第 24 図)

5 N から 5 O 区に位置し、2 間 × 2 間の規模を有するとと思われる建物である。桁行 3.2 m・梁行 2.7 m を測り、主軸は東から約 5° 北へ傾く。東辺中央の柱穴は内側へ 0.20 m 入り込む地点に位置する。北辺と西辺には権列 S A 02 が所在する。北辺の中央から東側には添柱と考えられる柱穴 SP 283 がある。1 間の柱間規模は、桁行約 1.7 m・梁行 1.5 から 1.7 m を測る。各柱穴の規模は北西角の SP 86 が直径 0.38 m・深さ 0.21 m、南西角の SP 51 が直径 0.70 m・深さ 0.27 m、北東角の SP 33 が直径 0.42 m・深さ 0.14 m、南東角の SP 21 が直径 0.43 m・深さ 0.11 m を測る。覆土はいずれも黒褐色粘質土である。建物は北側及び東側に位置する建物 S B 06・S B 07・S B 08 と同様の方位を呈する。

B 群建物

建物 S B 01 (第 25 図)

3 M 区に位置し、3 間 × 3 間の側柱構造を有するとと思われる建物である。桁行 3.8 m・梁行 3.2 m を測り、主軸は西から約 20° 北へ傾く。北東角の柱穴は確認できなかった。また南東角及び南西角の柱穴は、土坑 SK 164 と SK 107 の築造時に欠損したものと思われる。東辺の北から 1 間目の柱穴 SP 153 は内側へ 0.25 m 程の地点に位置する。柱間規模は桁行 1.3 m・梁行 1.0 から 1.2 m を測る。各柱穴の規模は、北西角の SP 119 が直径 0.14 m・深さ 0.26 m を測る。覆土はいずれも黒褐色粘質土である。本跡の東隣に S B 02 が位置し、北側には権列と想定された柱穴列 S A 01 が存在する。北西角の SP 119 から弥生土器片が出土した。



第 25 図 挖立柱建物 S B 01・02・10 平面及び断面図

建物SB 02 (第25図)

3Nに位置し、3間×2間の側柱構造を有すると思われる建物である。桁行4.3m・梁行が2.4mを測り、主軸は北から約20°西へ傾く。北東角の柱穴は土坑SK 188に、東辺の北から1間目の柱穴は周溝SD 191、西辺の北から2つ目の柱穴は溝SD 176によってそれぞれ擾乱されおり確認できなかった。柱間の規模は桁行1.4m・梁行1.2mを測る。各柱穴の規模は北西角のSP 171が直径0.27m・深さ0.17m、南西角のSP 182が直径0.27m・深さ0.13m、南東角のSP 200が直径0.45m・深さ0.33mを測る。覆土はいずれも黒褐色粘質土である。木趾は西側に位置するSB 01と同様の方位を呈し、方形周溝墓SZ 01の周溝SD 201を切っている。北西角の柱穴SP 171から弥生時代後期の土器片4点出土している。SD 176より弥生時代後期の土器片5点が出土している。

C群建物

建物SB 10 (第25図)

3Nに位置し、2間×2間の構造を有すると思われる建物である。南北両辺の中央外側にそれぞれピットが1基ずつ所在し、棟持柱を有する建物である可能性を推測させる。桁行3.8m・梁行3.4mを測り、主軸は北から約15°東へ傾く。北東角の柱穴は確認できなかった。方形周溝墓SZ 01の主体部SK 204を切っている。柱間規模は桁行1.9m・梁行1.7m、棟持柱間4.6mを測る。各柱穴の規模は、北側棟持柱SP 184が直径0.18m・深さ0.20m、南側棟持柱SP 222が直径0.50m・深さ0.61m、北西角のSP 170が直径0.30m・深さ0.13m、南西角のSP 178が直径0.46m・深さ0.38m、南東角のSP 211が直径0.20m・深さ0.31mを測る。覆土はいずれも黒褐色粘質土である。柱穴SP 119から弥生土器片が出土した。

5. 円形周溝状遺構

円形周溝状遺構SD 01 (第26図 図版18)

3区北側の2M区に位置する。周溝の中央南側において土坑SK 02に切られる。南側を東西にはじめる擾乱によって欠損しており、確認できた遺構は北側1/4程であった。周溝は大きな円弧を描いており、検出長4.3m・幅約0.7m・深さ0.40mを測る。推定される遺構の直径は約6mである。断面の形状は深い楕状を主体とする。覆土は黒褐色粘質シルトで、弥生時代後期のものと思われる土器の破片が7点程出土した。遺構の性格としては、円形周溝墓もしくは円形の平地式住居等が考えられる。時期は異なるが、類似した遺構は新潟市の中島A遺跡(弥生時代中期)においても検出されている〔新潟市2000〕。

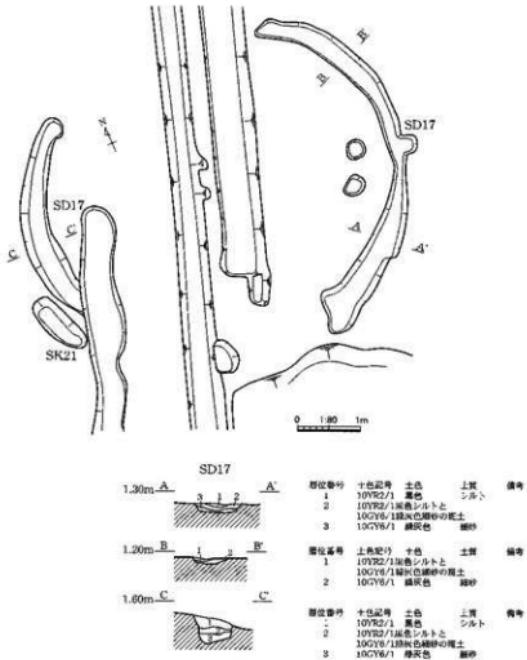
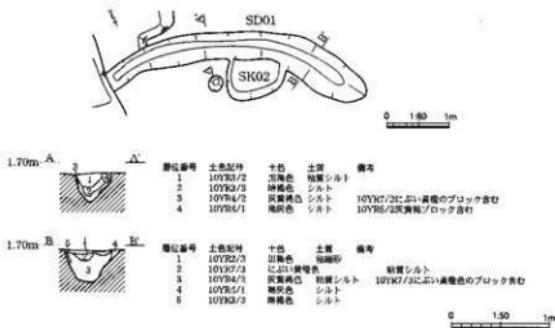
円形周溝状遺構SD 17 (第26図面 図版20)

3区南側4O区から5O区に位置する。中央を南北にはじめる擾乱等によって削平をうけ、東側と西側に二分される。南西側を近世以降のものと思われる溝SD 23に切られて欠損しているが、ほぼ円形のプランが確認された。直径6.32m・溝幅0.43m・深さ0.24mを測り、周溝の断面形状は逆台形を呈する。覆土は3層に分類でき、上層は黒褐色シルトを主体とし、中層は黒褐色シルトと緑灰色細粒砂の斑土、下層は緑灰色細粒砂である。覆土から弥生時代後期のものと思われる壺・甕の破片が出土している。遺構の性格はSD 01と同様に円形周溝墓もしくは円形の平地式住居等が考えられよう。

6. 溝

溝SD 03 (第27図 図版18)

3区北東側の2Nから4P区に位置する。北西から南東方向へ緩やかな逆S字状を描いて調査地外へと通し、



第26図 円形周溝状遺構 S D 01・17 平面及び断面図

検出長 28.97 m・幅 1.50 m・深さ 0.32 m を測る。遺構のほぼ中央付近においては溝 SD 04 に、その北側では井戸 S E 01 に切られる。断面形状は J 字形を呈する。覆土は 3 層からなり、上層は黒色粘土で、中層は黒褐色粘土、下層は灰黄褐色シルトである。遺物は下層から弥生土器の壺・甕・高环等が出土した。形状や規模等を勘案するならば、南東から北西方向に向けて設置された排水路の可能性が考えられる。また、北東側の遺構が少ない地区と南西側の遺構密度が高い地区とに区分されることから、区画の溝とも考えられる。出土遺物から弥生時代後期に属するものと考えたい。

溝 SD 04 (第 27 図)

3 区北側 2 P から 4 M 区に位置する。北東から南西方向へ直線状に調査地外へ達する。遺構の中央付近において井戸 S E 10 を、その北東にて南北方向にはしる溝 SD 04 を切る。断面形状は逆台形状を呈し、検出長 29.7 m・幅 1.12 m・深さ 0.61 m を測る。覆土は単層で黒褐色粘土に浅黄橙色シルトのブロックを多く混入する。遺物は多数の弥生土器と近世の陶器等が混在して出土した。形状や規模等から北東から南西方向に排水を目的とした水路の可能性がある。出土遺物から近世以降に属するものと思われる。

溝 SD 20 (図面 18)

3 区南側 5 N 区に位置する。直線状の溝状遺構で、南側半分を S Z 02 の北側の周溝である SK 17 に切られる。全長約 2.5 m・幅 0.48 m・深さ 0.36 m を測り、長軸は南北方向で北から 11° 西に傾く。断面形状は逆台形を呈し、覆土は単層で黒褐色シルトを主体としている。覆土中から弥生時代後期の土器片を多く出土している。形状や規模等から方形周溝墓の周溝の可能性を考えたいが、周辺には該当する遺構は確認できなかつた。出土遺物から弥生時代後期と考えたい。SK 17 が本趾を切っていることから、S Z 01 より古く、かつ S Z 01 が発造される前に埋没したものと考えられる。

溝 SD 146 (第 27 図)

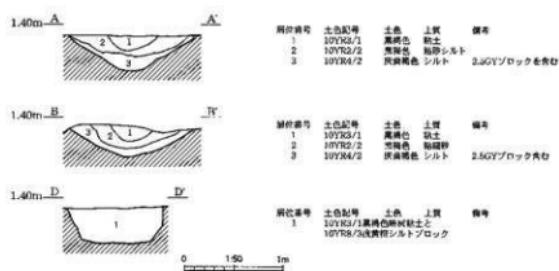
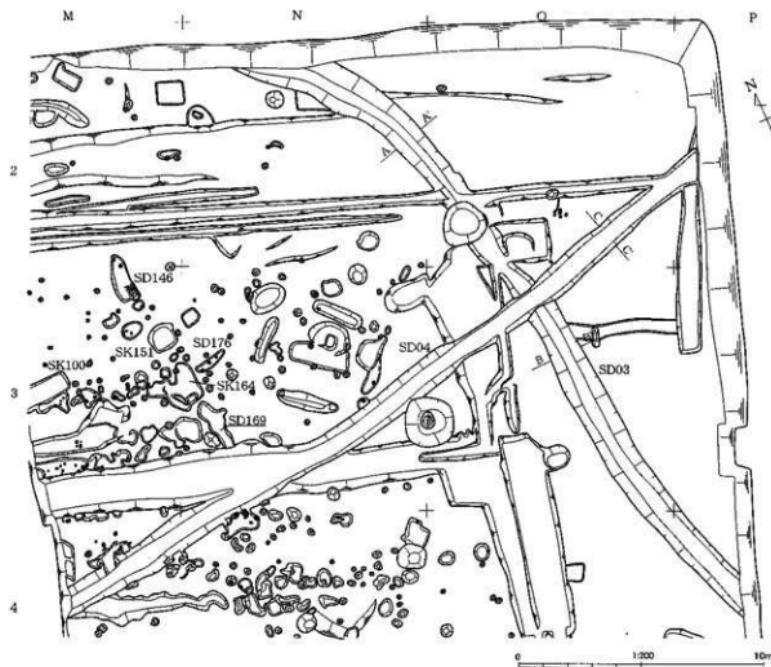
3 区北側 3 M 区に位置する。南北方向へ一列に並ぶ土坑群 SK 151・164 や溝 SD 146・169 の北端に位置する。長軸は土坑 SK 100 に対し直角を呈し、北から 2° 西に傾く。平面形状は長方形を呈するが、北辺は後世の削平を受けて細くなっている。全長 1.90 m・幅 0.80 m・深さ 0.23 m を測る。覆土は黒褐色粘土で弥生土器の甕の破片が出土した。遺構の性格としては、形状や規模等から土塙墓の可能性が考えられる。概して当調査区西端で検出された土坑 SK 100 に類似する。出土遺物から弥生時代後期に属するものと考えたい。

溝 SD 169 (第 27 図)

3 区北側 3 N 区に位置する。南北方向へ一列に並ぶ土坑や溝群の南端に位置する。本趾の南端は搅乱によつて欠損している。主軸は北で 10° 西に傾く。平面形状はやや歪んだ長方形を呈し、全長 2.2 m・幅 0.9 m・深さ 0.14 m を測る。断面形状は逆台形を呈し、覆土は黒褐色粘土で弥生土器の甕・甕片が 26 点出土した。遺構の性格は不明である。出土遺物から弥生時代後期に属するものと考えたい。

溝 SD 176 (第 27 図)

3 区北側 3 N 区に位置する。南北方向へ一列に並ぶ土坑及び溝群に対し東側へ直角の方位を呈する。主軸は東から 10° 北に傾く。平面形状は長楕円形を呈し両端が細くなる。全長 1.45 m・幅 0.35 m・深さ 0.10 m を測る。断面形状は楕形を呈し、覆土は黒褐色粘土で弥生土器の甕・甕片が 26 点出土した。出土遺物から弥生時代後期に属するものと考えたい。



第27図 溝SD 03・04・146・169・176 平面及び断面図

第4章 出土遺物

第1節 土器・土製品

本調査において出土した土器及び土製品は、寸法 54cm × 34cm × 9cm のコンテナにしておよそ 60 箱に及ぶ。本書ではそのうちから接合ができ、且つ器形が判別できるもの等を約 160 点選びだし、各区遺構ごとに掲載した。

1. 1 区出土土器

S K 15 (第 28 図 圖版 21)

1001 は弥生時代中期後半の壺胴部の破片である。外面には斜め方向のハケメ調整の後、6 本歯櫛による直線文と波状文が交互に巡り、下段に扇形文が施されている。

S K 41 (第 28 図 圖版 21)

1002 は弥生時代中期後半の壺である。口縁は大きく外反し、端部内側にヘラ状工具によるキザミが施される。口縁内面には 4 本歯櫛による斜行短線文が 2 重にめぐる。頸部外面に同じ原体によるとみられる直線文が施される。調整は外面口唇部がナデ、頸部は斜め方向のハケメ、内面はヨコ方向のナデである。

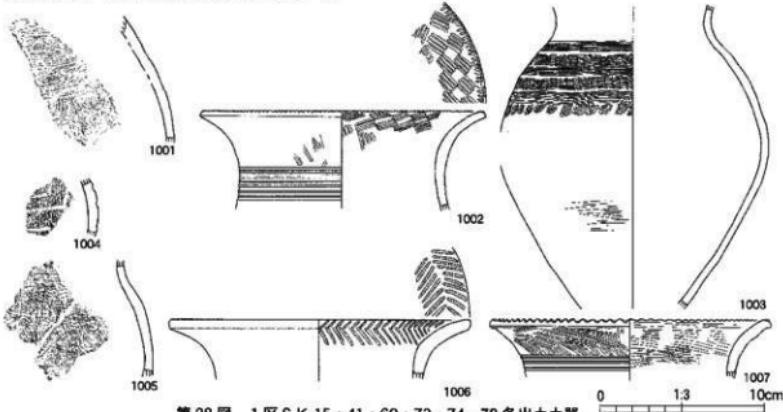
1003 も同時期のやや小型の壺であるが、口縁及び底部を欠損している。頸部に 6 本歯櫛による直線文と簾状文が交互に巡り、その下位には扇形文が施される。

S K 73 (第 28 図 圖版 21)

1004 は弥生時代中期の栗林式に比定される壺の胴部と思われる。外面には RL の縄文が施された後、棒状工具による直線文が施される。この型式は信濃地方に分布の中心をおく傾向にあるが、富山県内においても数例が報告されている。

S K 74 (第 28 図 圖版 21)

1005 は弥生時代中期後半の壺である。頸部から胴部にかけて 4 本歯櫛による直線文のほか、波状文や簾状文がめぐり、その下位に扇形文が施されている。



第 28 図 1 区 SK 15・41・60・73・74・78 各出土土器

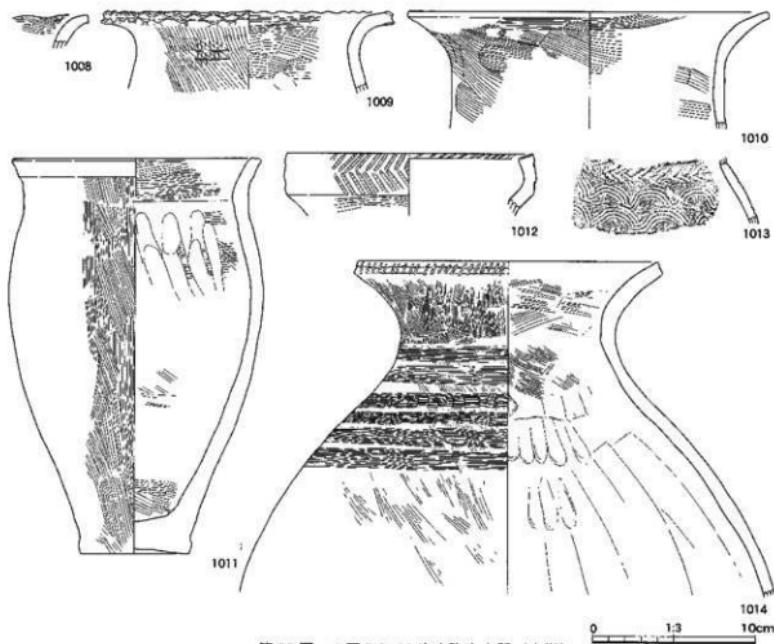
S P 78 (第28図 図版21)

1006 及び 1007 は弥生時代中期後半の壺の口縁である。前者は外反する口縁内面にヘラ状工具によるとみられる綾杉文をめぐらせる。後者は外反する口縁端部の内面側にキザミをめぐらせ、頸部には5条の沈線がめぐる。内外面ともハケメ調整である。

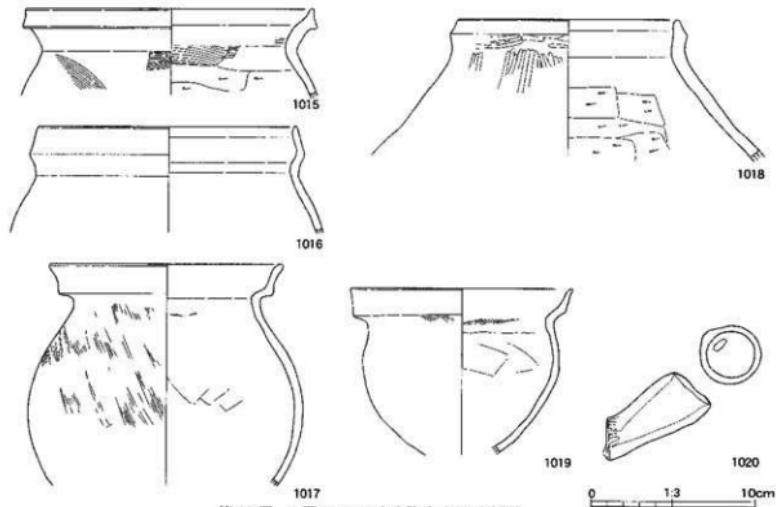
S D 22 (第29・30図 図版21)

1008 から 1011 は弥生時代中期後半の壺である。1008 及び 1009 は外反する壺の口縁が指で押圧され波状をなす。調整は口縁部内面が横方向、外面は縦方向のハケメである。1010 は外面に斜め方向のハケメ調整、内面にはヨコナデ及びハケメ調整が施されている。1011 は緩く外反する口縁部を有するやや長胴の壺である。胴部外面は縦方向のハケメ調整で、内面は横方向のハケメ調整の後、指ナデがなされている。SD 23 からもこの破片が出土している。

1012 から 1014 は弥生時代中期後半の壺である。1012 については、口縁外面にハケメ原体を押圧して施した綾杉文が施され、口縁端部にも同じ原体によるとみられる刺突文が施される。口縁部の内面はヨコナデ、頸部外面は残存する部位においてハケメ調整がみられる。1013 は壺の胴上半部と推測される。頸部直下に5本齒櫛による羽状の連続刺突文をめぐらせ、その下位に4本齒櫛による連弧文が2重に施される。1014 はやや大型の壺で、口縁端部にヘラ状工具によるとみられる連続刺突文と、胴部に横方向の櫛描文と簾状文が2条1単位で計6条めぐる。調整は頸部外面が縦方向、内面には横方向のハケメ調整がなされている。胴部においては外面に斜め方向のハケメ調整が、内面では縦方向にナデ調整がなされている。



第29図 1区SD 22 出土弥生土器（中期）



第30図 1区SD 22出土弥生土器（後期）

1015は弥生時代後期前業の甕である。口縁部が短く断面形状は三角形を呈する。胴部外面に斜め方向のハケメが施され、内面では横方向のハケメとヘラケズリがなされている。表面全体にススが付着している。1016及び1017は弥生後期中業の有段口縁の甕である。前者は無文で内傾する口縁部を有する。器面が摩耗しており調整は不明である。後者はやや外傾する無文の口縁を有し、胴部外面が斜め方向のハケメ調整で表面に炭化物が付着する。内面はナデ調整である。1018は台付き壺の胴上半部と思われる。口縁に向かってすばり、頸部で僅かに外反してから内傾する。外面はヘラミガキ、内面はヨコナデ及びヘラケズリ調整である。1019は有段口縁の鉢である。胸部外面はヘラミガキ調整である。1020は注口と思われる。他の部位がすべて欠損しており器形は不明である。表面はヘラミガキ調整で付根部分の内側に絞り痕が見られる。

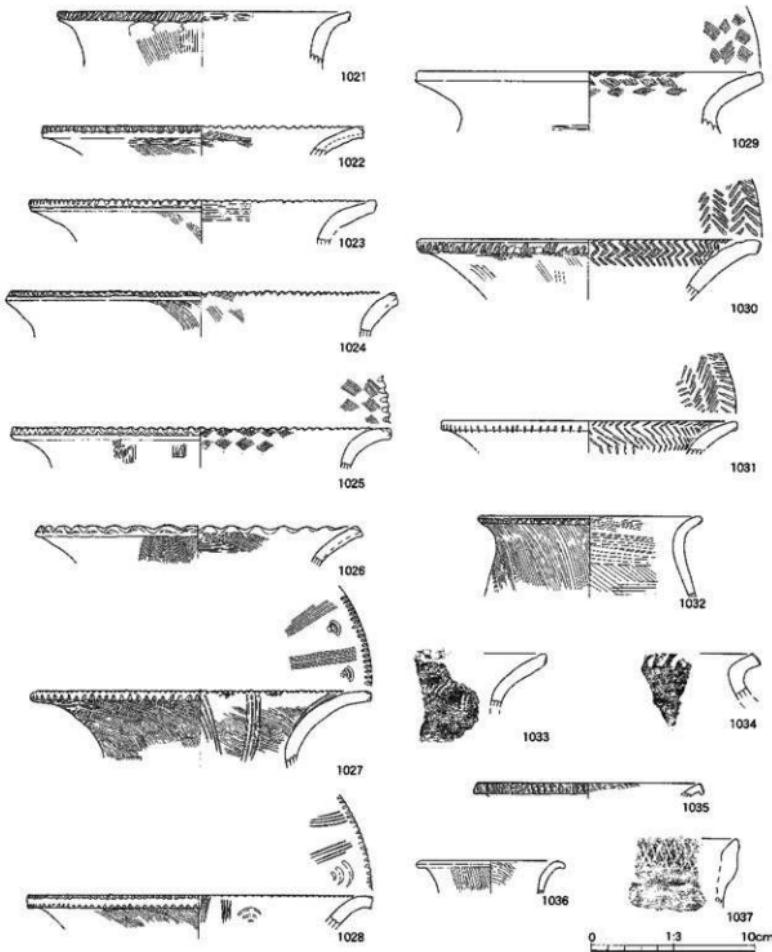
S D 23

本趾から出土した上器はコンテナにしておよそ30箱を数え、今回調査で出土した遺物全体量の半分近くに及ぶ。そのほとんどは弥生土器である。そのうちの80%以上が同後期に属するもので、有段口縁を有する甕や壺をはじめ、鉢・高杯・器台といった多様な器種が出土している。残りの約20%は弥生時代中期の土器群であるが、破片が多く復元できるものは多くない。以下、本趾においては弥生時代中期と後期の2時期に分けてそれぞれ器種ごとに解説をしていくこととする。

A. 弥生時代中期の土器（第31図 図版22）

1021から1037は弥生時代中期に属する甕及び壺の口縁である。1021は外反する口縁端部にキザミをめぐらせる。1022から1025は口唇部に刻みを施し小波状を呈する。1022は外面に4条の並行沈線が施される。1025は口縁部内面に8本歯櫛による斜行短線文が2重にめぐる。1026は口唇部内側を指で押圧して波状を呈する。外面が縦方向に、内面は横方向のハケメ調整がなされている。1027及び1028は外反する口縁の口唇部両面にヘラ状工具によると思われる刻目をめぐらせ、口縁部の内面には4本歯櫛による直線文と扇状文が交互に施される。調整については内面が横方向、外面には斜め方向のハケメ調整がなされている。1029は外

反する口縁端部に面取りがされ、内面には6本歯櫛による斜行短線文が方向を進めて3重にめぐる。調整は横方向のハケメである。1030は外反する口縁部の内面にハケメ原体を押圧した綾杉文を2重にめぐらせ、口縁端部には刻みが施される。1031も口縁端部に刻みをめぐらせ、口縁部の内面には方向を進めた2重の綾杉文が施される。1032は外傾する口縁の端部外側にハケメ原体を押圧した刻みをめぐらせる。調整は内外面とも横方向のハケメ調整である。1033は口縁内面に4本歯櫛による斜行短線文が施され、口縁端部の外側には刻みがめぐる。調整法については内面ではヨコナデが、外面には継方向のハケメ調整が施されている。1034は「く」の字状に外反する口縁の端部に面取りされ、そこにヘラ状工具によるとみられる刻みがめぐらされて



第31図 1区SD 23出土苏生土器(中期)

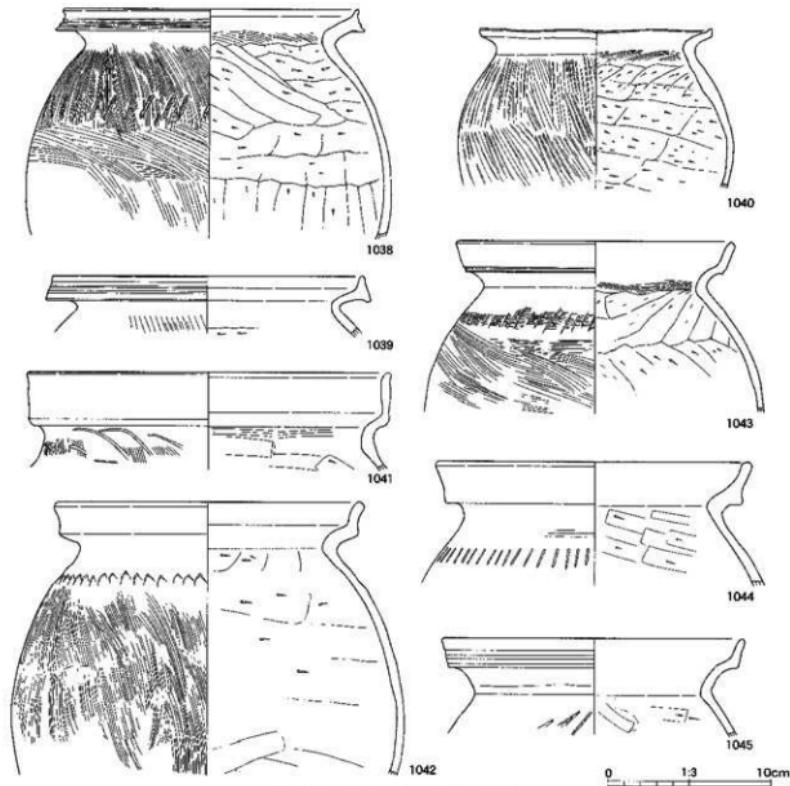
いる。1035は口縁端部が垂下し刻みをめぐらせる。1036は壺の口縁である。外反する口縁端部が外側へと垂下する。外面に縦方向のハケメが、内面には横方向のハケメ調整がなされている。1037は壺の口縁の一郎と思われる。口唇部外面にヘラ状工具によるとみられる斜格子文が施されている。

B. 弥生時代後期の土器

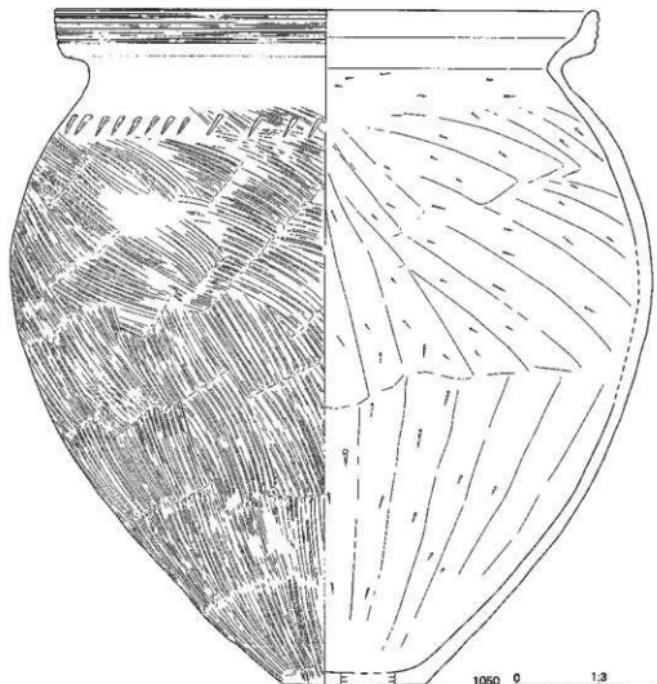
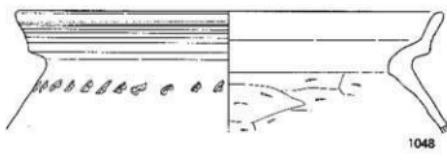
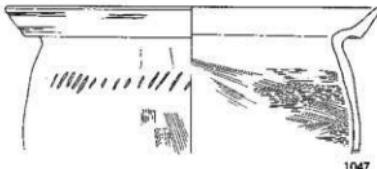
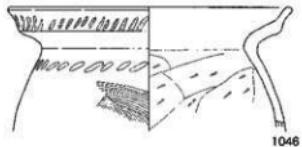
変形土器（第32～34図 図版22～24）

1038及び1039は口縁の断面形状が三角形を呈する甕である。前者は口縁端部に3条の擬凹線を有する。胴上半部の外面には縦方向のハケメが施され、胴下半部では横方向のハケメ調整がなされている。胴上半部の外面にはハケメ原体によるとみられる斜行短線文がめぐる。胴部内面ではヘラケズリ調整がなされる。1039も口縁に3条の擬凹線が施され、口縁下部の縫が僅かに垂下する。外面にハケメが、内面にはヘラケズリが認められる。

1040は受け口状口縁の甕である。胴部内面はくびれ部の付近にハケメを施しながらも、その他は全面にヘラケズリがなされている。外面は縦方向のハケメ調整がなされ、表面にはススが付着している。

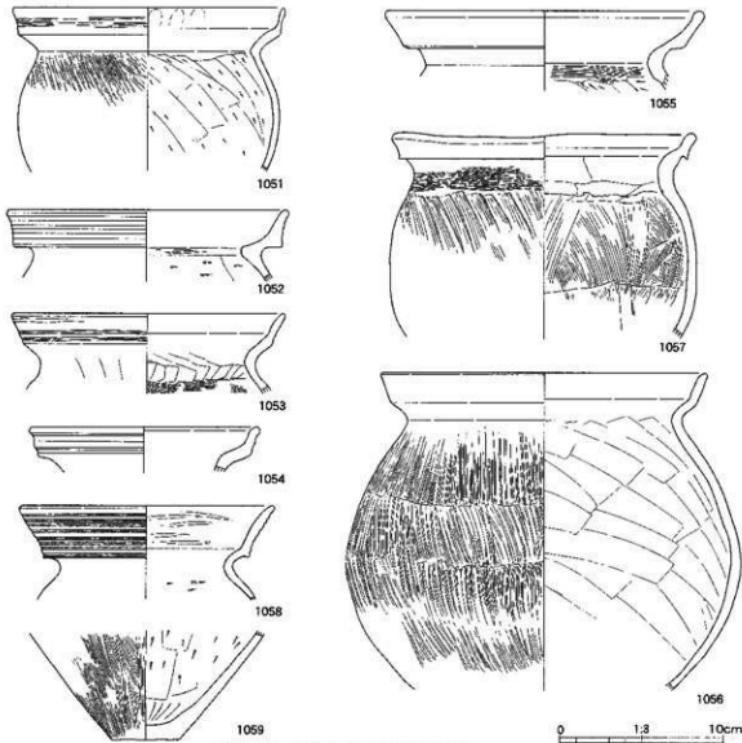


第32図 1区SD 23出土変形土器



第33図 1区 SD 23出土瘦形土器

1041から1050は有段口縁を有し且つ胴上半部に刺突文が施される甕である。1041は口縁がほぼ垂直に立ち、胴上半部にヘラ状工具によるとみられる連弧文が施される。胴部外面には綫方向のハケメが、内面ではヘラケズリがなされている。1042は胴上半部にヘラ状工具を押したとみられる連続刺突文をめぐらせる。胴部外面には綫方向のハケメ調整が、内面ではヘラケズリがなされている。外面全体にススが付着する。1043は口縁に1条の擬凹線を有する。胴上半部にハケメ原体の刺突によるとみられる斜行短線文が確認できる。外面全体にススが付着している。外面には横方向のハケメ調整がなされている。一方内面ではくびれ部にハケメ調整が残るもの、胴部全体にはヘラケズリ調整が施される。接合した破片の一部は3区SE10より出土したものである(図58・表9参照)。1045は口縁部に4条の擬凹線が施される。1046は胴上半部とともに口縁部にも斜行短線文が施される。胴部外面には横方向のハケメ調整がなされ、内面にはヘラケズリ調整が施される。外面全体にススが付着する。1047は外方向へ開く口縁に2条の擬凹線が施され、胴上半部に斜行短線文がめぐる。胴部外面には綫方向のハケメ調整が、内面では横方向のそれがなされる。1048は口縁部に6条の擬凹線がめぐり、胴上半部に半裁竹管状工具による連続刺突文が施される。1049は胴上半部に斜行短線文がめぐる。胴部外面に斜め方向のハケメが施される。一方内面では、頸部に斜め方向のハケメが残り胴部では斜め方向のヘラケズリが施される。1050は大型の有段口縁甕である。口縁には6条の擬凹線が施され、胴上半部



第34図 1区SD 23出土變形土器

部には斜行刺突文をめぐらせる。胸部外面には斜め方向のハケメ調整が、内面ではヘラケズリ調整が施されている。

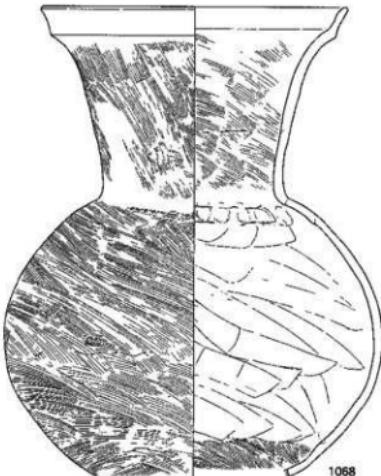
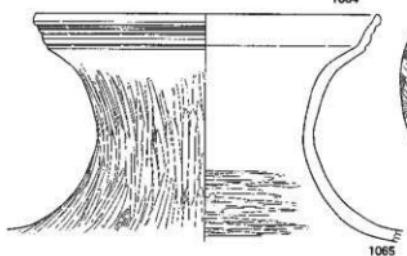
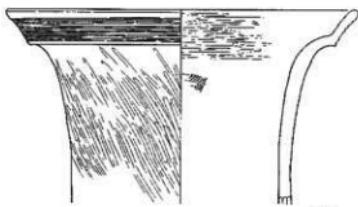
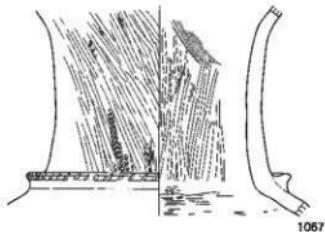
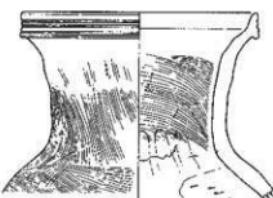
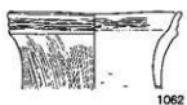
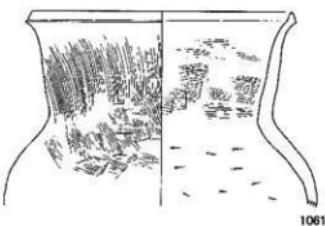
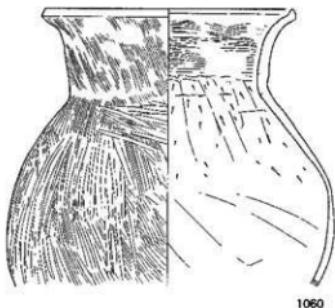
1051から1056は有段口縁を有する壺であるが、前述のものとは異なり胸上半部に刺突文がみられないものである。1051は口縁部に炭化物の付着などにより判然とはしないが微かに擬凹線が認められる。口縁内側に指頭圧痕がみられる。胸部外面にはハケメ調整が、内側ではヘラケズリ調整が施される。1052は口縁が僅かに外傾し6条の擬凹線が施される。調整は胸部外面にヨコナデが、内面ではヘラケズリ調整がなされる。1053は口縁部に擬凹線が施される。調整は外面は横方向のナデ、くびれ部内側にはヘラケズリの後横方向のハケメ調整がなされている。1054は口縁部に2条の凹線が施される。1055は頸部内面に横方向のハケメ調整がなされ、わずかに残存する胸部の内面にはヘラケズリが認められる。1056も無文の有段口縁を有する。胸部外面は縦方向のハケメ調整が、内面は右下から左上方向への板ナデ調整が施される。外面全体にススが付着する。1057は無文の口縁下端が垂下する。頸部には横方向のハケメ調整がなされ、胸部外面には斜め方向のそれがなされる。また、私見ながら肩部に原体の角があたったかのような痕がみられる。内面には縦方向のハケメ調整及びヘラケズリが施される。1058は発達した口縁帯に8条の擬凹線が施され、内外面とも赤彩がなされている。1059は平底の壺の底部である。外面には縦方向のハケメ調整がなされ、内面には縦方向のケズリが施される。外面にはススが付着している。

壺形土器（第35・36図 図版24～26）

1060及び1061は広口の長頸壺である。両者とも口唇部をつまみ上げ、受け口状の口縁を呈する。1060は胸部外面にハケメ調整の後にミガキが施され、内面はハケメ及びナデ調整がなされている。1061は外面縦方向のハケメ調整がなされ、内面は頸部に横方向のハケメが、胸部には横方向のケズリが施される。

1062から1068は有段口縁を有する長頸壺である。1062はII縁部に2条の擬凹線が施される。外面にはヘラミガキが見受けられるが、内面は磨耗が著しく調査痕は判然としない。1063は口縁に3条の擬凹線が施される。頸部外面には縦方向のハケメ調整が、僅かに残る胸部には横方向のハケメ調整が認められる。内面は頸部に斜め方向のハケメ調整が、胸部にはヘラケズリが施される。1064は外傾する口縁に6条の擬凹線が施される。外面はハケメの後にミガキ調整がなされる。1065は口縁部に擬凹線が3条確認される。幅広の頸部は外面が縦方向に、内面に横方向にはヘラミガキが施される。1066は口縁に1条の擬凹線が確認できる。頸部外面には縦方向のハケメ調整が施され、内面は口縁から頸部にかけて横ナデが、胸上半部はヘラケズリがなされている。1067は胸部と頸部との屈曲点付近に、斜め方向の刻をみ施した突帶をめぐらせる。内外面ともハケメ調整の後にミガキが施されている。1068は球形の胸部に緩く外反して段をなす無文の口縁を有する。頸部外面及び内面に斜め方向のハケメ調整が、胸部外面は横方向のハケメ調整がなされる。また胸部内面には横方向のケズリが施される。3区SK24・3区SK18(SZ02)からもこの破片が出土している(図58・表9)。

1069は長頸壺の口縁部で、僅かに外傾するもののほぼ直線状を呈する。外面にヘラ状工具によるとみられる2条の線刻が施される。内外面とも斜め方向のハケメ調整である。1070は壺胴部で口縁部が欠損している。大きく外側へ張り出す胸部はやや扁平である。外面にはヘラミガキ調整が、内面ではヘラケズリ及びハケメ調整がみられる。1071は把手を有する壺の胴部である。外面は斜め方向の、内面は横方向のヘラミガキ調整が施される。1072は壺の底部である。内外面ともミガキ調整である。頸部より上位は欠損している。1073は口縁が直行する長頸壺である。内外面ともハケメが明瞭で胸部外面にはススが付着する。一部が1区SD23と3区SD146から出土している(図58・表9)。1074は台付壺である。胸部下半に稜をめぐらし脚部は欠損している。外面に縦方向のヘラミガキが、胸部の下位にあたる稜付近で横方向のそれが施される。内面は横方



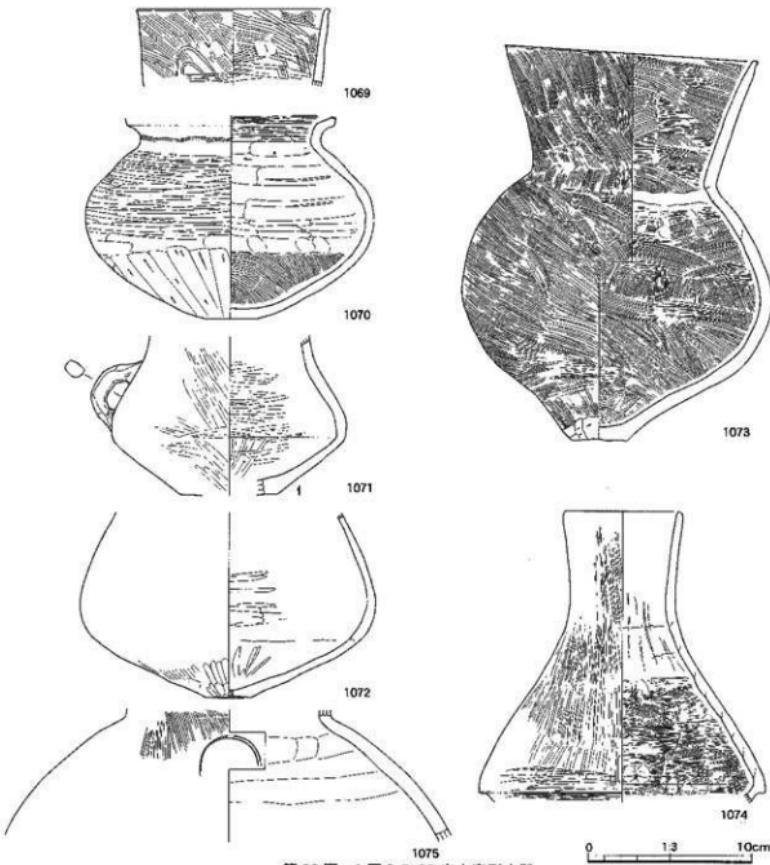
0 1.3 10cm

第35図 1区SD23出土壺形土器

向のハケメ調整で内部に輪積み痕と絞り痕が認められる。1075は壺の肩上半部である。外面に逆U字形の線刻が認められる。調整法については外面が縱方向のハケメ調整で、内面は横方向のナデ調整である。1区SD 23の他、3KSD 22やSE 10から破片が出土している(図58・表9)。

高杯及び器台形土器(第37図 図版26)

1076から1079は杯部の底部付近で屈曲し口縁が大きく外反する高杯である。1076と1077については接合しないものの同一個体の可能性があると思われる。口唇部には面取りがされ、内外面ともミガキ調整がなされ赤彩されている。1078は杯部の肩部に刻みが施される。内面及び外面にミガキ調整と赤彩がなされている。1079は杯部の屈曲部外側に明瞭な稜を有する。内外面とも丹念に磨かれている。1080は椀状の杯部に外反する口縁を有する高杯である。杯部の下位は他の部位に比して薄く仕上げられている。外面にはヘラミガキ調整が、内面は磨耗が著しく判然としないもののわずかにヨコナデが確認される。1081は杯部の径が比較的小さく、

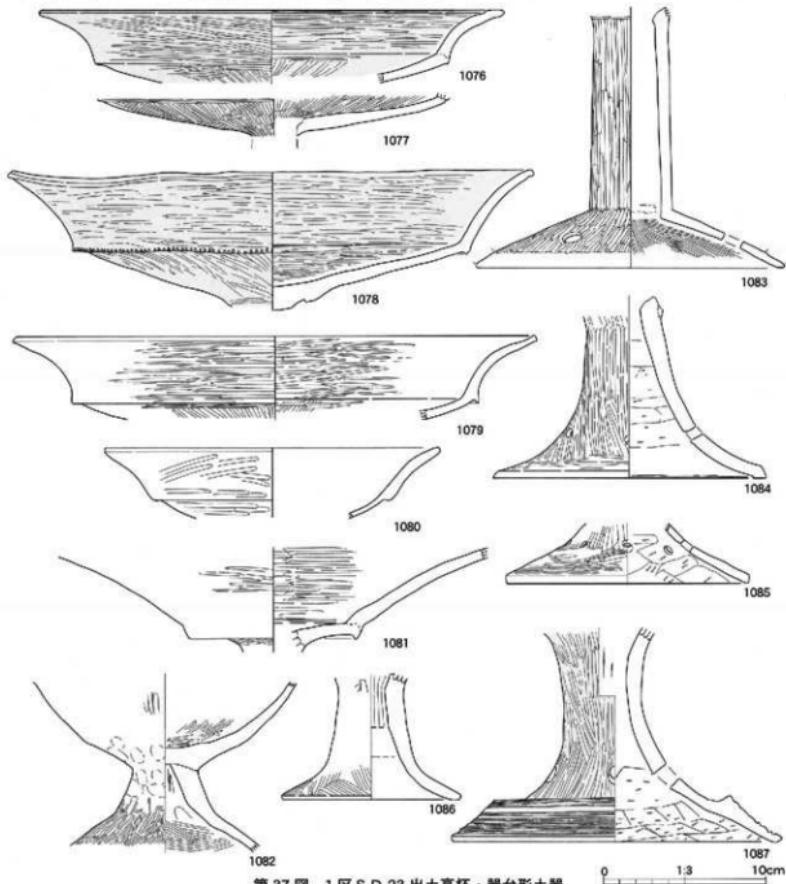


第36図 1区SD 23出土壺形土器

屈曲部から大きく外反する形状を呈する。内外面とも横方向にヘラミガキ調整がなされている。

1082は杯部が椀状を呈する高杯であり、脚台部が比較的小さい。杯部の内外面ともヘラミガキ調整が認められ、外面に指頭圧痕が残る。脚台部は外面にヘラミガキが、内面ではハケメ調整がなされている。口縁部及び脚台部の裾を欠損している。

1083から1086は高杯の脚部である。1083は筒状の柱状部に外開きする裾部が付く。外面は全体的に丹念なヘラミガキが施され、内面はハケメ調整である。裾部においては穿孔が1箇所だけ確認されているが、欠損のため总数は不明である。裾端部に突起の剥離痕が確認される。1084は裾部に4方向(4つ)の穿孔を有する。外面は縦方向にミガキが施され、内面は横方向にヘラケツリ調整がなされる。1085は裾部に5箇所の穿孔が確認されており、4方向に2つずつ計8つの穿孔を有すると思われる。調整は外面がヘラミガキで、内面はナデ調整である。1086は内外面ともハケメの後にナデ調整がなされている。



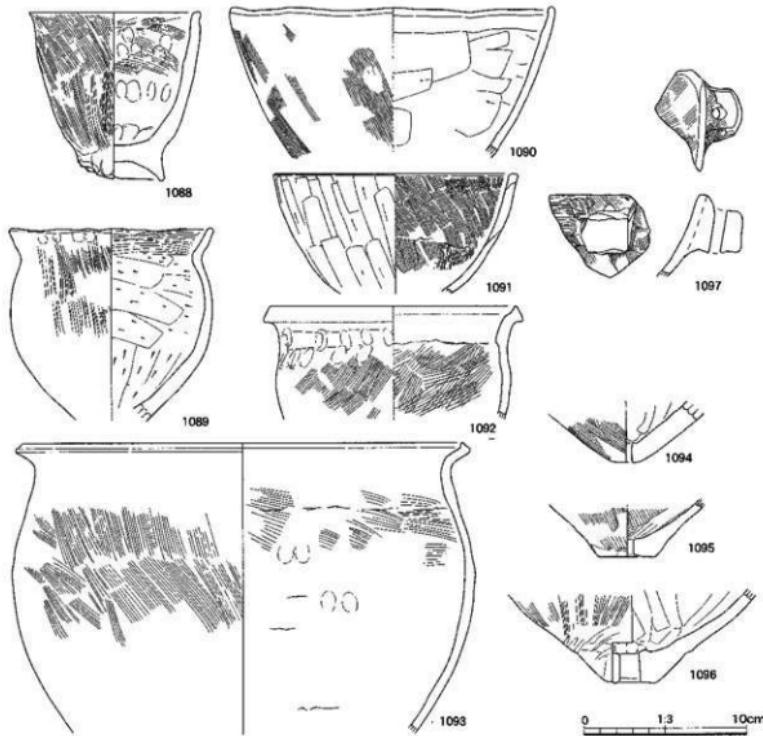
第37図 1区SD23出土高杯・器台形土器

1087は器台の脚部と思われる。裾部に段を有し7条の擬線が施される。柱状部は4方向に穿孔を有し、外側が磨かれ全体に赤彩が施される。内面にはヘラケズリ調整がなされている。

鉢形土器 (第38図 図版26・27)

1088から1093は鉢形を呈する土器である。1088は底部に高台状の脚台を有する。胴部外側及び内面はハケメ調整で内面に指頭圧痕が残る。1089は頸部がくの字状を呈する。外側は縦方向のハケメ調整で、口縁部に指頭圧痕が残る。内面は口縁部に横方向のハケメ調整がみられ、その胴上半部には横方向に、下半部では縦方向のヘラケズリが施される。1090では外側に斜め方向のハケメ調整が、一方の内面には横方向にヘラケズリ調整がなされている。2区SD04出土の破片と接合する(図58・表9)。1091は外側に下から上へのヘラケズリ調整が、内面にはナナメ方向のハケメ調整がなされている。1092は外反する口縁端部が肥厚し面取りされている。口縁部及び頸部はヨコナデ調整で、後者の外側には指頭圧痕が残る。胴部は内外面ともハケメ調整である。1093は頸部がくの字状を呈し、口縁端部を摘み上げられている。胴部は球状を呈し、外側には斜め方向のハケメが、内面にも斜め方向のハケメとナデ調整が施される。

1094から1096は有孔鉢である。1094は外側がハケメ調整で、内面は放射状にヘラケズリ調整がなされている。1095は内外面ともハケメ調整である。1096については外側へのハケメのほか一部ナデの痕が見られる。



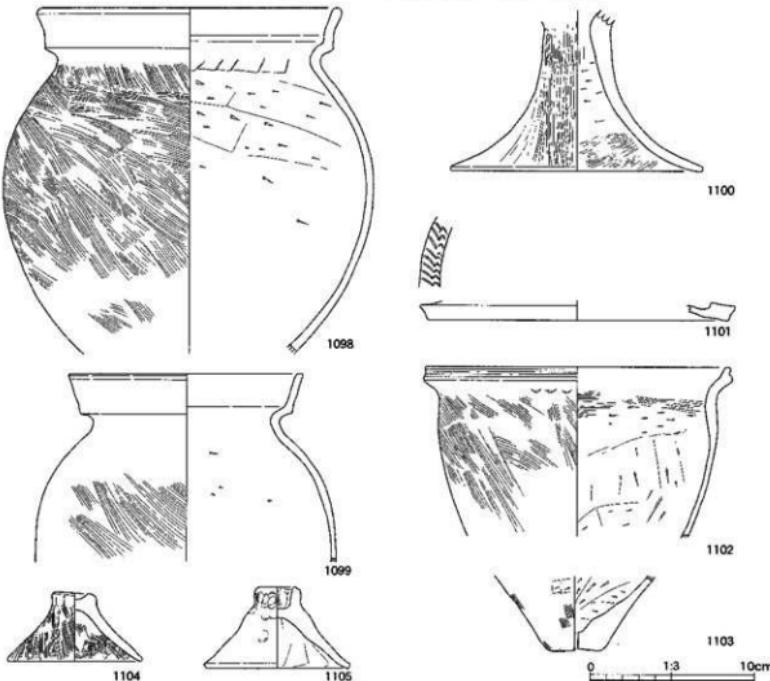
第38図 1区SD 23出土鉢形土器

底部付近にタタキ痕が數所のこる。内面は板ナデ調整である。

1097は鉢の把手と思われる。口縁直下に粘土塊を貼りつけ、上下方向に穿孔されている。胸部は内外面ともハケメ調整である。

1区包含層（第39図 図版27）

1区包含層からは弥生時代後期中葉の土器が出土している。1098及び1099は有段口縁の甕である。1098外面上には頸部から肩部にかけて縦方向のハケメが、胸部には斜め方向のハケメが施されている。外面には全面的にススが付着する。内面には斜め方向のヘラケズリが施される。1099は胸部外面にハケメ調整が、内面ではナデ調整がなされる。全体的に被熱している。6D区より出土した。1100は高杯の脚部である。外面は縦方向のミガキ調整が、内面は横方向のヘラケズリ及び斜め方向のハケメ調整が施される。6D区より出土。1101は器台の脚台裾部と思われる。先端部を肥厚させて段を形成し、その上に綾杉文をめぐらせる。外面は磨かれ赤彩される。6E区より出土した。1102は鉢である。外反する口縁の端部に圓線を1条めぐらせる。外面には斜め方向のハケメ調整がなされ、頸部に爪痕状の痕が残る。内面はくびれ部付近に横方向のハケメが、胸部にはヘラケズリが施される。1103は有孔鉢の底部である。6E区より出土した。1104と1105は1区6D区（SD 23の上層にある）より出土した蓋形土器である。1104は外面上端が指ナデ調整で体部には放射状のハケメが、内面では斜め方向のハケメと天井部にユビナデ痕が見られる。1105は外面にユビナデ及びヘラケズリ調整が、内面もヘラケズリ調整がなされる。両者とも縁の中央がくぼむ。



第39図 1区包含層出土土器

2. 2区出土遺物

2区では、コンテナ数にして10箱の遺物が出土している。弥生時代後期の土器が主体であるが、中期の土器片や、珠洲等が2区中央を南北にはしるSD03やSD04、それに2区東端の包含層や自然流路内より混在して出土している。

SD03(第40図 図版26)

1106は甕の底部である。内外面ともハケメ調整である。1107は有段口縁の短頭甕である。口縁部には擬凹線が2条確認できる。調整は胴部外面にハケメ調整の後にヘラミガキが施され、内面にはヘラケズリ調整がなされる。

SD04(第40図 図版28)

1108から1110は弥生時代中期の甕で、口縁端部内面にキザミをめぐらせ小波状を呈する。1108は口縁端部が水平近くまで外反する。外面は斜め方向のハケメ調整が、内面はヨコナデ調整がなされる。1109は口唇部がやや肥厚し、前記の1108より細かいキザミが施されている。内外面ともヨコナデ調整である。1110は口唇部にハケメ原体によるキザミをめぐらせる。口縁外面はヨコナデの後に縦方向のハケメが、内面はヨコナデ調整がなされる。胴部外面は横方向のハケメ調整が、内面は斜め方向のハケメ調整がなされる。1111は頭部がくの字状を呈する甕である。口縁端部外面に面取りがなされる。胴部外面には斜め方向のハケメが、内面には粗い横方向のハケメ調整がなされる。

1112及び1113は有段口縁の甕である。1112前者は摩耗が著しく調整は不明であるが、1113は内外面とも口縁部にナデ調整が、胴部外面には縦方向のハケメ調整が施され、一部横方向にハケメが認められる。外面全体にススが付着する。1114は装飾甕の口縁で10条の擬凹線が施される。内外面ともにヘラミガキ調整がなされ、外面は赤彩されている。1115は有段口縁の広口短頭甕で胴下半部が最大径となる形状を呈する。外面は丁寧に磨かれ、一方の内面は斜め方向のハケメの後、横方向のハケメが施されている。1116は甕の底部である。外面は磨かれ、内面はハケメ調整である。1117是有段の器台脚部である。段部下位に3条の擬凹線が巡り、穿孔が施される。外面はヘラミガキ調整が施されている。内面はハケメ調整がなされているが、段部には指頭圧痕が残る。1118は高杯もしくは器台の脚部である。外面はミガキ調整で脚の有段部に赤彩が見られる。内面はハケメ調整である。1119は土師器の皿で14世紀代のものと思われる。

SD07(第41図 図版28)

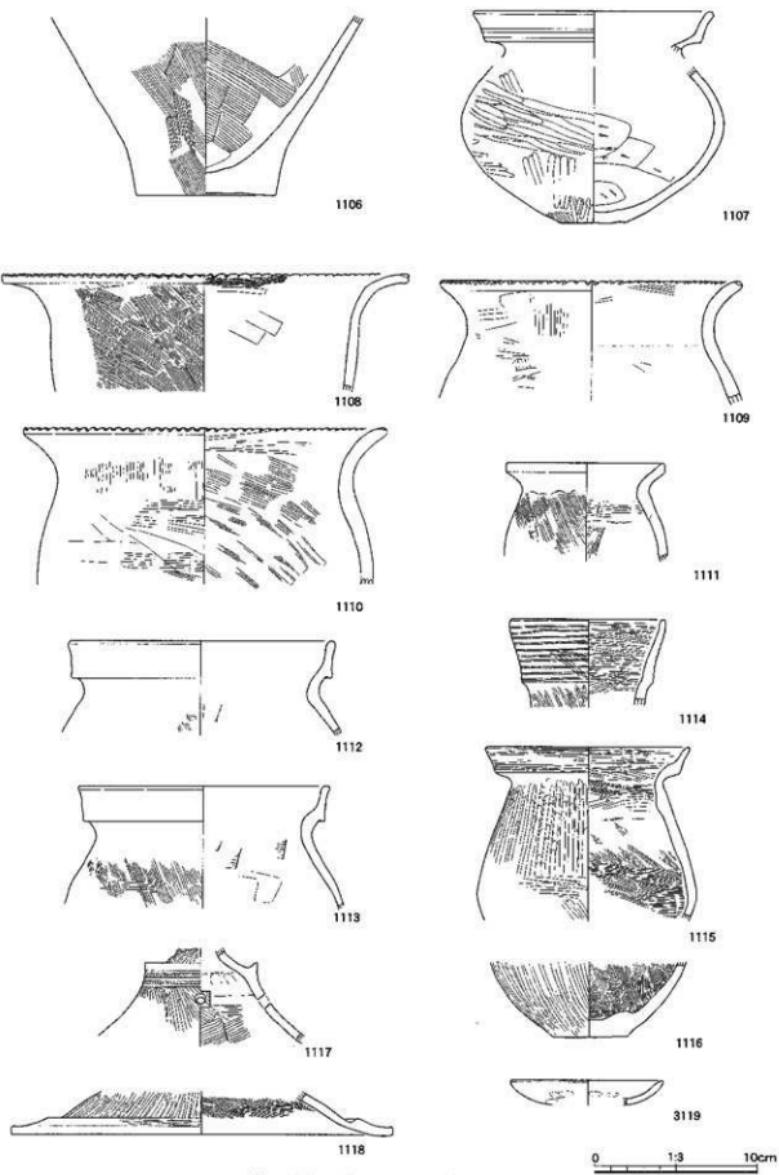
1120は台付甕と思われる。全体的に磨耗して判然としないが外面はヘラミガキわずかに認められ、内面ではハケメ調整がなされる。SD07の上層から出土した。

NR03(第41図 図版29)

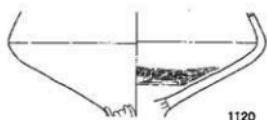
1121は有段口縁の鉢である。口縁は外反し端部に面取りがなされる。胴部外面にはススが付着するが、斜め方向のハケメが確認される。

包含層(第41図 図版29)

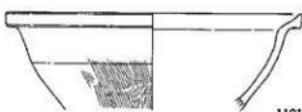
1122は4L区より出土した土師器の杯である。調整は内外面ともロクロナデであるが、全面的にススが付着している。また底部には回転糸切り痕が見られる。3123は2区西端2L区の砂層より出土した珠洲の大甕である。胴部外面全体に綾杉状のタタキ目が残り、内面にはナデ調整の痕がみられる。古岡編年のⅡ間に相当するものと考えられる。



第40図 2区SD 03・04出土土器



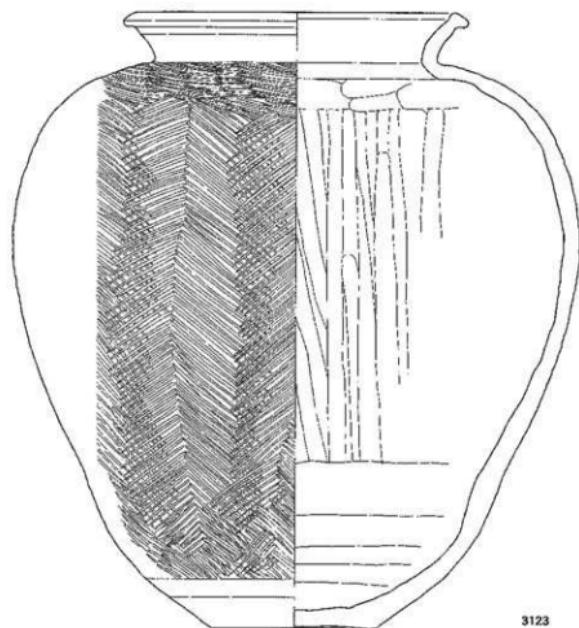
1120



1121



3122



3123

0 1:3 10cm

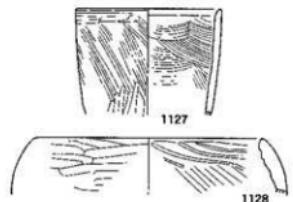
第41図 2区SD07・NR03・包含層出土遺物

3.3区出土遺物

3区出土の遺物はコンテナにして15箱を数える。1区では弥生時代中期の遺物が多く出土しているが、3区では中期の遺物はわずかで、後期の遺物が大半をなす。その他に縄文土器1点と須恵器及び珠洲が出土している。

S Z 01 (第42図 図版29)

1124は縄文土器である。表面が磨耗して判然としないが全面に縄文が施される。1125は弥生時代後期の有段口縁の壺である。頸部に僅かにハケメが残る。1126は同時期の鉢の口縁と思われる。3点ともS Z 01の主体部であるSK 204より出土した。



第42図 方形周溝墓S Z 01出土土器

S Z 02 (第43図 図版29)

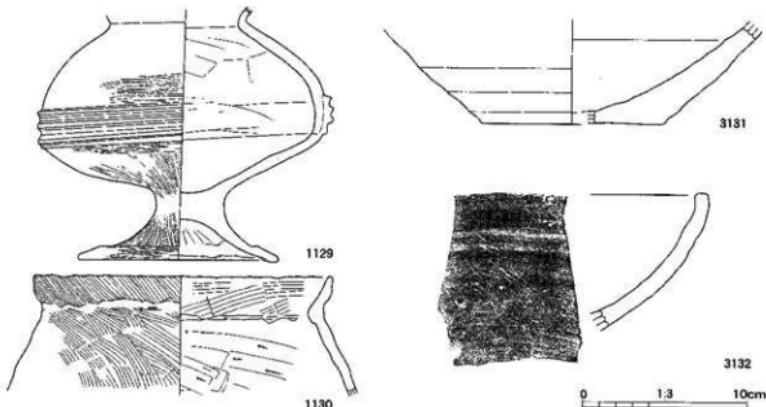
1127は長頸壺の口縁部である。ほぼ直立した口縁の外側はハケメ調整がなされ、口唇部は横方向に、頸部は縦方向のミガキ調整がなされている。内面はハケメ調整である。S Z 02の周溝にあたるSK 18より出土した。1128は無頸壺である。内傾する口縁の内側には斜めにヘラ描きの沈線が巡る。外側はヨコナデ調整で、内面はハケメ調整である。S Z 02の周溝SD 22より出土した。

SK 06 (第44図 図版29)

1129は台付装飾壺である。胸部に3条の凹線が施された突帯を有する。外側表面は磨かれ、赤彩されている。また、口縁の残存部内側にも赤彩されていた痕跡が認められる。

SK 24 (第44図 図版29)

1130はくの字状の頸部を有する壺の口縁である。調整は荒く、外側は斜め方向のハケメ調整が、内面は横



第44図 SK 06・24・SE 07 出土遺物

方向のイタナデが施される。外面にススが付着する。

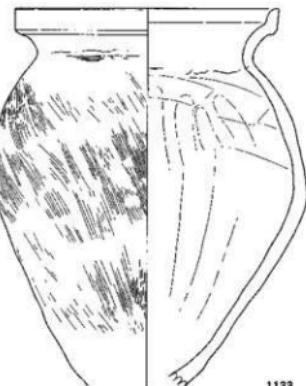
S E 07 (第44図 図版29)

3131及び3132は珠洲の鉢である。ともに現状では鉢し目は確認できなかった。3132は注ぎ口がみられる。器形がII縁まで内湾気味に立ち上がるるもので、吉岡編年のⅡ期に相当するものと思われる。

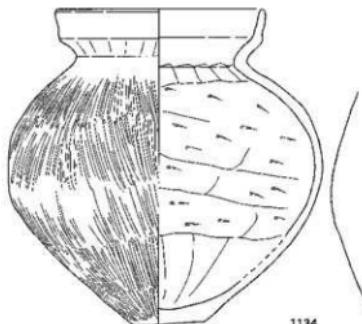
S E 10

變形土器 (第45図 図版29・30)

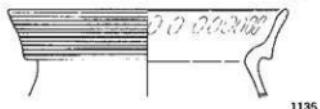
1133及び1134は有段口縁の甕である。井戸S E 10より埋設されたような状態で出土した。ともに口縁は無文でほぼ直立する。1133は胸部外面に斜め方向のハケメ調整が、



1133



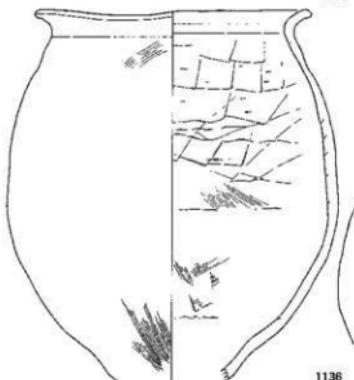
1134



1135



1137



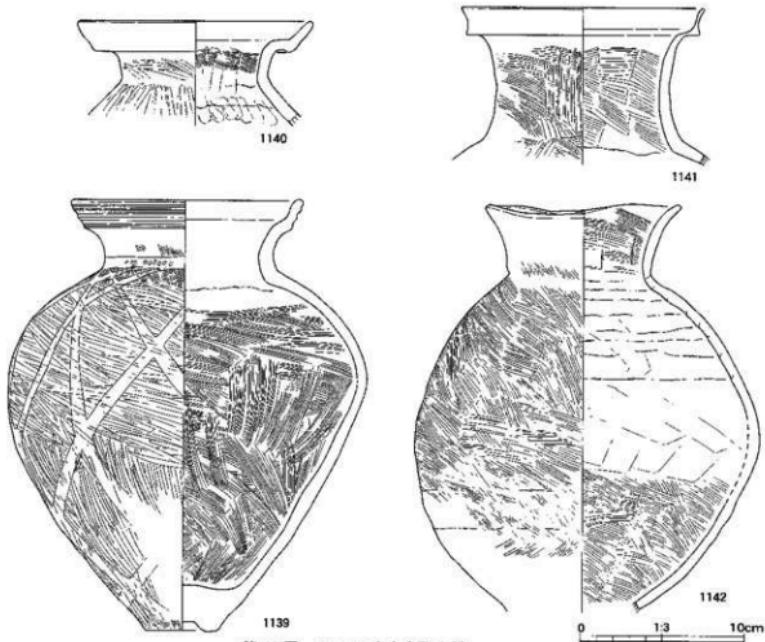
第45図 S E 10 出土變形土器

内面には指及び板状工具によるナデ調整がなされる。底部を欠損している。1134は外面にナデの後、ヘラミガキが施され、内面はヘラケズリ調整がなされている。胴下部の表面にススが付着している。1135是有段口縁の壺である。発達した口縁帯に10条の擬凹線が施される。内外面ともヨコナデ調整がなされ、口縁内側に指頭圧痕が見られる。SE 10上層より出土した。1136は頸部がくの字状を呈する壺である。外面は全体的に摩耗している。内面は上半部はヘラケズリ調整が、下半部はハケメ調整がなされる。1137は肩部よりヒ位が欠損しているが壺の胴部と思われる。胴部中央が大きく張り出し小さな底部が付く。胴上半部外面に横方向の、下半部には縦方向のハケメ調整がなされ、内面は横方向のヘラケズリが施される。3区SE 10中層とSD 146より破片が出土している。1138は頸部がくの字状を呈する壺である。外面は横方向にハケメ調整がなされ、内面はヘラケズリ調整がなされる。

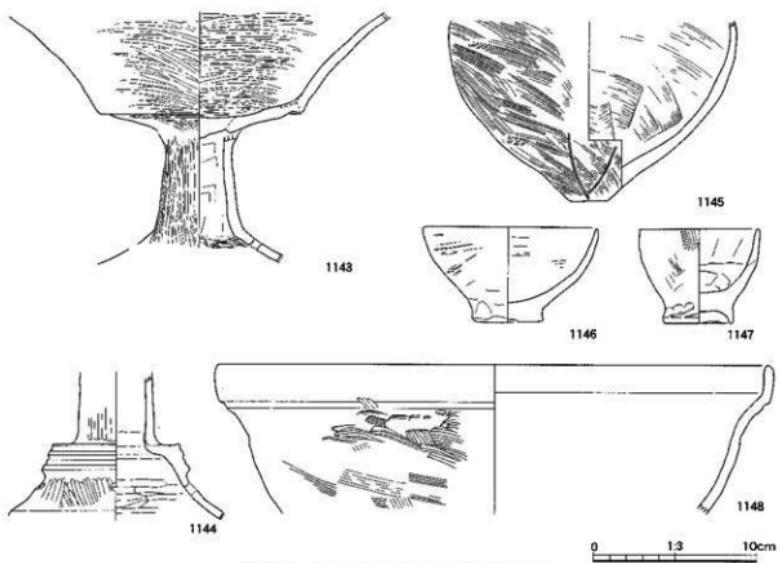
壺形土器（第46図 図版30）

1139及び1140是有段口縁の壺でSE 10の最下層から出土している。1139は胴上半部が張り、高台状をなす底部を有する。また口縁部に2条の擬凹線が施される。外面はハケメ調整の後にヘラミガキがなされ、内面はハケメ調整が施されている。胴部外面に龍目痕が認められる。1140も胴部外面はヘラミガキ調整で、内面はヘラケズリで、くびれ部にはハケメがみられる。胎土が緻密で焼成は良好である。胴部以下が欠損している。破片が3区のSD 146からも出土している（図58・表9）。

1141は有段口縁を有する広口壺である。外面はハケメ調整の後にヘラミガキが施され、内面はハケメ調整が施されている。1区SD 23のはか、3区SE 10やSP 59から出土した破片が接合された。1142は長頸



第46図 SE 10出土壺形土器



第47図 S E 10 出土高杯・器台・鉢形土器

壺である。胴部はやや綾長の球形を呈し口縁は緩やかに外反する。外面はハケメ調整がなされ、内面胴上半部はヘラケズリが施される。下半部はハケメがみられる。内面には輪積み痕が明瞭に残る。3区S E 10から破片が出土している。

高杯及び器台形土器（第47図 図版31）

1143は高杯である。杯部の下位で屈曲し口縁は外反する。杯部内外面ともミガキ調整がなされている。破片がSD 146からも出土している（図58・表9）。1144は器台の脚部である。柱状部は筒状をなし、外開きする脚台部には3条の擬四線を有する段が形成されている。裾部に4方向の穿孔が施される。外面は丹念に磨かれ、内面はヘラケズリ調整がなされている。

鉢形土器（第47図 図版31）

1145は鉢もしくは甕かと思われるが、口縁が欠損しており定かではない。胴部は内外面ともハケメ調整がなされる。全体にススが付着し、底部直上外面に線刻がみられる。1146はS E 10は埋土上面から出土した鉢である。S E 10の中央にあたかも埋設されたように正位で検出された。楕状を呈し、全体が磨耗しており調整は判然としないが、わずかに工具の痕が残る。1147はS E 10中層より出土した小型の台付き鉢である。内外面ともナデ調整がなされる。1148是有段口縁の鉢である。口縁の屈曲部直下に凹線を1条巡らせる。胴部外面にはハケメ調整がなされ、原体の角があたったかのような痕が残る。内面は摩耗して判然としない。

S E 11（第48図 図版31）

1149は甕である。緩く外反する口縁の端部に刻みが施される。外面にはまず縦方向の荒いハケメ調整がなされ、そのうえから横方向に半裁竹管状工具による6条の並行半隆起線が施される。1150は頸部がくの字形

を呈する変である。口縁には横方向のハケメ調整がなされ、端部外面に凹線が1条施される。胴部外面は斜め方向のハケメ調整が、内面はヘラケズリが施される。

S D 03 (第48図 圖版31)

1151は口縁部が受け口状を呈する変である。胴部外面はヨコナデ調整で内面はヘラケズリ調整である。

1152は台付装飾壺の口縁部と思われる。やや外傾する口縁は磨かれ赤彩される。1153是有段の器台脚台部である。外面はヘラミガキがなされ、内面はヨコナデ調整が施されている。

S D 32 (第48図 圖版31)

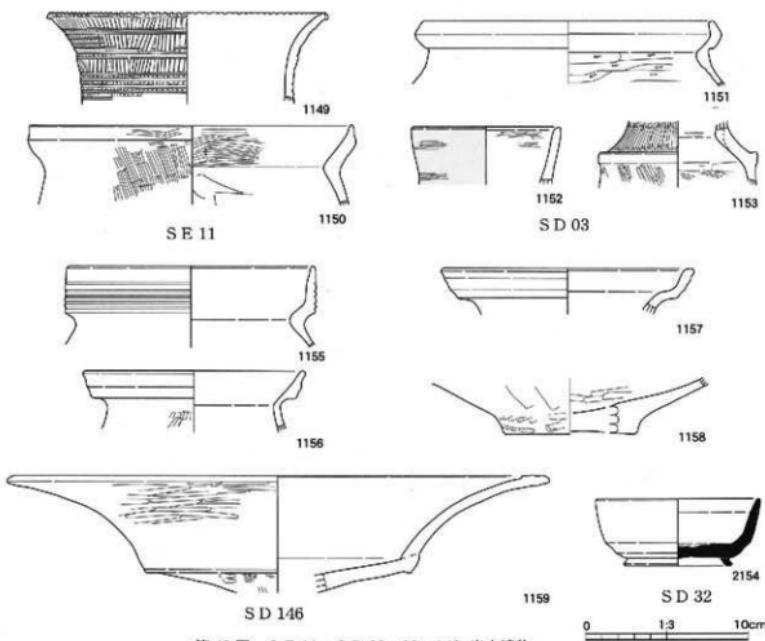
2154は須恵器の杯Bである。体部はやや輪状を呈し、体部と底部の境で内渦して直線的に立ち上がり口縁部が丸くおさまる。高台は底部外線よりやや内側に張り付けられ外側に広がる。8世紀代のものと考えられる。

S D 146 (第48図 圖版31)

1155及び1156是有段口縁の変である。前者は口縁がほぼ直立し、幅広の口縁帶に6条の擬凹線が施される。

1156は口縁部に2条の擬凹線が施される。調整はヨコナデ主体でわずかに残存する胴部にはヘラミガキが認められる。

1157是有段口縁の壺である。口縁部に4条の擬凹線が施される。1159は杯部下方に屈曲部を持ち、口縁は大きく外反する高杯である。杯部の稜線が僅かに垂下する。口縁端部内側が肥厚し、平坦面が形成されている。表面が著しく摩耗しているが、所々にヘラミガキの痕が認められる。



第48図 S E 11・S D 03・32・146 出土遺物

4. 土製品

ミニチュア土器（第49図 図版31）

4160は有台鉢のミニチュア土器である。外面はヘラケズリ調整である。1区SD 23より出土した。4161は台付無頸壺のミニチュア土器である。球状の胴部はヘラミガキが施され、胴部中央に工具の押し当てた痕がある。脚端部は欠損している。3区SE 10上層より出土した。

土錘（第49図 図版32）

土錘は5点出土している。4162は1区SD 23から出土したものである。球形で重さ105gをはかる。4163は1区SE包含層より出土した。円筒形で重さ47gをはかる。4164は2区SD 03より出土した。円筒形で、重さ42gをはかる。4165・4166はSD 04より出土した。4165は円筒形で重さ78gをはかり、4166は球形で重さ191gをはかる。4162・4165・4166の孔の径は2.5cm～2.5cmに対し、4163・4164の孔の径は6mm程度である。

筋鍤車（第49図 図版32）

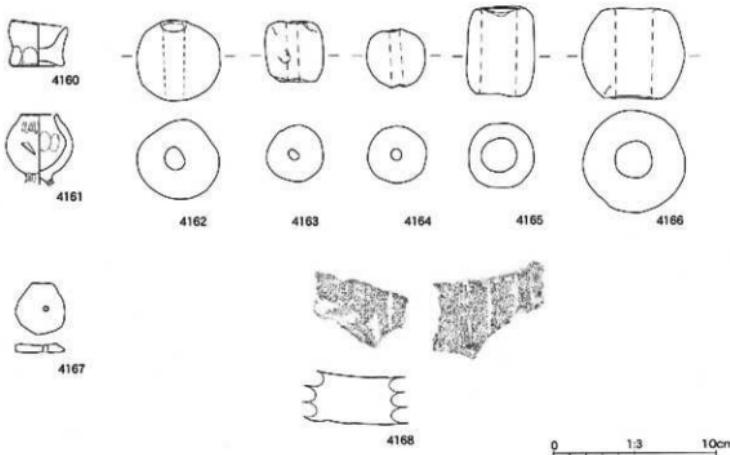
1区SK 60より4167が出土している。土器片を利用して作成されており、長径3.1cm・短径3.0cmの略円形を呈し軸孔がやや偏っている。重さ5gをはかる。

5. 古代瓦

古代瓦（第49図 図版32）

4168は平瓦である。全面的に後世の摩耗を受けているものの、凸面は縄叩き調整、凹面には布目の圧痕がみられるほか、端部には面取りのためのヘラ削りもしくはヘラナデが確認できる。

なお、この古代瓦には離れ砂技法は見受けられない。



第49図 土製品及び古代瓦

第2節 石器類・玉類

石器については、打製石鐵 1 点をはじめ、打製石斧 1 点・磨製石斧 1 点・磨製石包丁 4 点・磨製石劍 1 点・磨製石戈 1 点・石鋸 2 点・磨石 2 点・敲石 1 点・砥石 1 点・蠶石 1 点の計 16 点が出土している。玉類については丸玉が 2 点ある。

石 鐵 (第 50 図 図版 32)

5001 は有茎式の打製石鐵である。1 区の包含層より出土した。形状は長身の二等辺三角形を呈する。石材は安山岩である。

石 斧 (第 50 図 図版 32)

5002 は楔形の打製石斧である。2 区の自然流路 N R 01 より出土した。刃部は円形に大きく張り出し、くびれ部から直線状に茎部が伸びる。全体は大きめの剥離によって成形されており、片面の中央部のみに磨痕がみられる。石材は泥紋岩である。5003 は大型の磨製石斧である。1 区の S D 23 より出土した。刃部と基部が欠損した柱状部である。断面形状は側面を大きく採った梢円形である。形状から大型蛤刃石斧であろう。全体に丁寧な研磨を施している。石材は角閃石質安山岩である。

石包丁 (第 51 図 図版 32)

5004 から 5007 は石包丁である。5004 は 1 区の S D 23 より出土した磨製の石包丁である。背縁から直角の側縁を有するが刃部は欠損している。破損端部には穿孔が 2箇所みられるが、近接していることから、開け直しによるものと思われる。外側の孔は斜め方向に穿孔されており、破損の原因となった可能性も考えられる。石材は泥質変岩である。5003 は 3 区の S K 100 より出土した磨製の石包丁である。左端に 1箇所、右端に 2 箇所の穿孔がみられる。背縁側は僅かに残存しているが刃部は欠損している。全面に研磨を施していたものと解されるが背縁側と左側面の一端のみに残存していた。石材は泥質変岩である。5004 は 1 区の S D 23 より出土した両縁側が直線状を呈する石包丁である。薄手の刃部には敲打痕のみで磨痕がみられない。厚手の縁側部には僅かな磨痕がみられる。石材は砂岩である。5005 は 1 区の S D 23 より出土した幅広の大型石包丁である。全体は薄い板状を呈する。刃部は片刃刀を呈するもので、背縁部にかけて緩やかに窪んでいる。背縁部、側縁部は細かい敲打による成形によって直線状を呈する。刃部には顕著な磨り痕がみられない。石材は石英質安山岩である。

石 剣 (第 51 図 図版 32)

磨製石劍は 5006 が 1 点出土している。出土地は 1 区の S D 23 である。武器形の茎状端部であるが、大型に類する希少な例である。先端から茎部までの刃部は欠損している。全面に丁寧な研磨と側面に面取りを施し、茎端部には鋭角状の稜を有する。大型磨製尖頭器もしくは磨製石劍の握部と考えられる。石材は玄武岩である。

石 戈 (第 51 図 図版 32)

5007 は武器形の石器で磨製石戈と思われる。先端から基部までは欠損しているが、茎端部には突出部があり左右に抉りを有するものと考えられる。茎状の端部と開部中央には 2 箇所の穿孔を有し、断面形は菱形を呈する。両面と縁側部には研磨が施されている。銅劍形石劍の可能性もあるが、茎部が開部からなで肩状に連なり身幅の先端への減少も少なく、身の厚さがやや薄いことから銅戈形の石戈と考えた。石材は泥質変岩である。1 区の S D 23 より出土。

石 鋸 (第 51 図 図版 32)

石鋸は 5008・5009 がある。5008 は 1 区の S D 23、5009 は 3 区の S E 22 より出土した玉造り用の擦切

具である。5008は全体に薄手の作りで、刃部は鋭い稜を有した両平刃である。石材は珪質砂岩である。5009は大型の磨製石器である。全体に薄く板状を呈している。刃部は直線状を呈し、刃端部には稜を有した両平刃である。背縁部と側縁部は欠損している。両面には細かい研磨を施しており、その上から格子状の掘り痕が僅かにみられる。石材は頁岩である。

磨 石 (第51図 図版32)

磨石は5012・5013がある。ともに著しく破損しており形状は不明である。5012は1区のSD 23より出土した。大きく湾曲した側面を有しており、概ね扁平に近い橢円形を呈するものであろう。全体が研磨されている。石材は安山岩である。5013は1区のSD 23より出土した。これも山岩を使用し、全体が研磨されている。

敲 石 (第51図 図版32)

5014はややバチ形の敲石である。3区のSE 10より出土した。頭部は橢円形に張り出し、中央に僅かなくびれ部を有する。先端は突出気味に球形を呈する。調整痕はみられないが先端に敲打痕がみられる。石材は流紋岩である。

砥 石 (第51図 図版32)

5015は板状の砥石で3区の包含層より出土した。断面は薄鉛状を呈し、平らな面は全面を使用している。山形面には部分的に砥いだ痕がみられ、中央には縱方向に2条の筋痕を有する。筋痕部は浅い溝状を呈することから、玉砥石として使用した可能性がある。石材は流紋岩である。

鑿 石 (第51図 図版32)

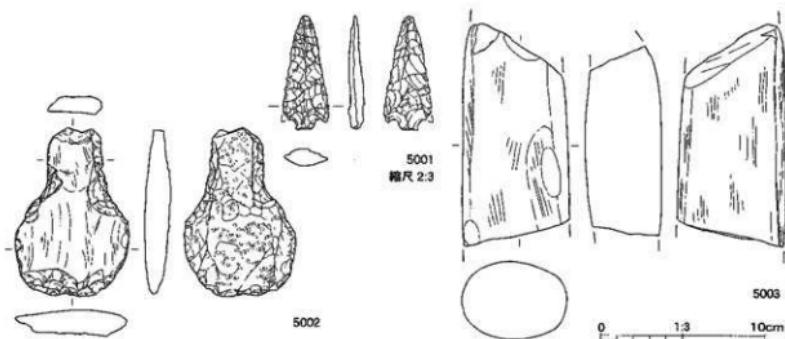
5016は棒状の鑿石である。1区のSD 164より出土した。断面は円形、先端は球形を呈する。下端は欠損している。石材は滑石である。

玉 類 (第51図 図版32)

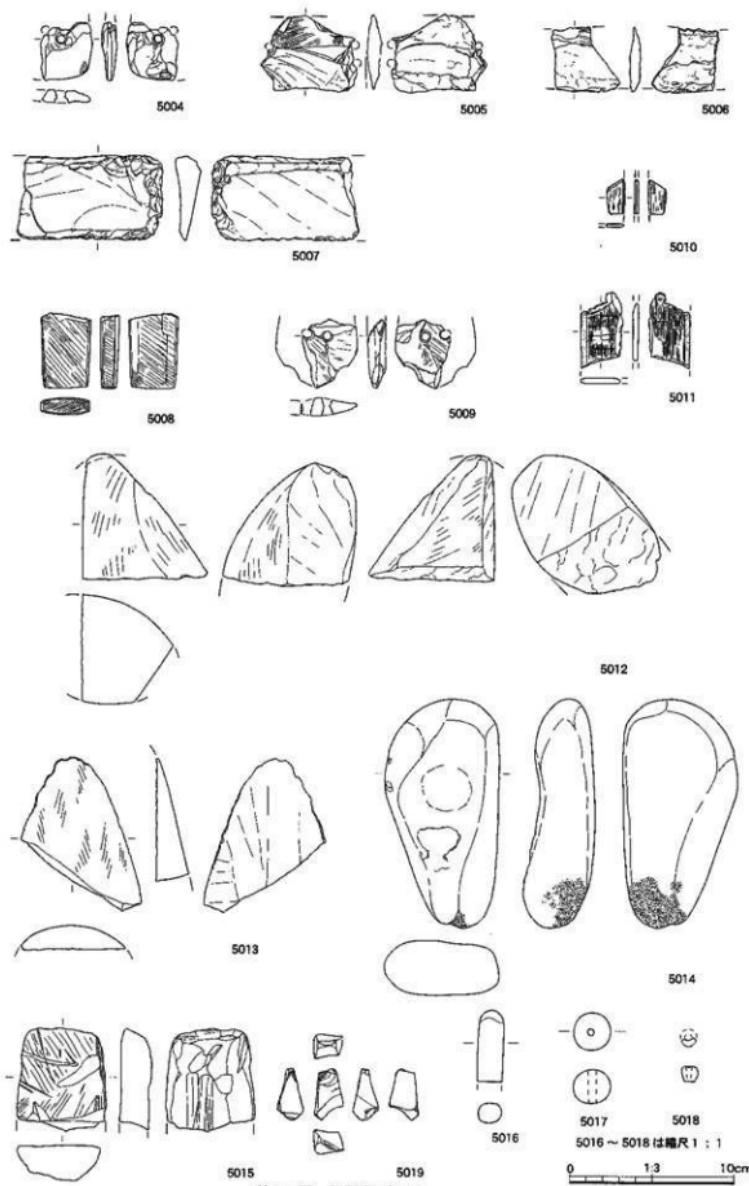
玉類には丸玉の5017・5018がある。5017は3区のSK 205、5018は3区SK 24より出土した。1017は球形の丸玉である。全体は丁寧な研磨を施し、中央には細い穿孔を施している。石材には透明に近く澄んだ水晶を使用している。中世の数珠玉であると思われる。5018は小さな丸玉である。形状は僅かに縱に長い歪な球形を呈する。中央には小さな穿孔を施している。材質はソーダガラスである。

石 核 (第51図)

緑色凝灰岩の石核1点5019が1区SD 23より出土している。



第50図 石器



第51図 石器及び玉類

第3節 木製品

本遺跡で出土した木製品（加工痕の残るもの）はおよそ30点余りである。ここでは近世以前の遺構から出土している木製品20点について提示した。

井戸枠（第52図 図版33）

6001及び6002は弥生時代後期の井戸3区SE10より出土した井戸枠である。6001はクリの一木を割り貫いて井戸枠としている。片面は削られており、上から見るとC字状を呈するが、これは割り貫く際に予め削られたものと推測される。下端から5cmのところに木釘孔と思われる孔が確認されており、元々は底板を有し桶として使用されていたものを井戸枠に転用したものと推測される。また下端から10cm程のところに有する段を境に加工の際の削る方向が概ね上下に分かれる。6002は井戸枠側板である。6001の削られている箇所を塞ぐようなかたちで出土した。

農具（第52図 図版33）

6003は田下鉗である。1区SD22より出土した。片側一部欠損しており、裏面に輪カンジキ痕が確認される。

6004は形状から鉄斧の柄と推測される。

容器類（第53図 図版33・34）

3区北側の井戸SE01他から、結桶が3点と蓋が1点出土している。6005は結桶である。12枚で構成される側板のうち2枚が出土している。外面にはタガの痕跡が、内面には底板の痕跡が明瞭に残り、底板も残存する。底板断面には船底が認められる。6006も同様に12枚組の結桶の側板である。内面下半はやや薄くなりヤリガンナで削り込んだ痕がみられ、上半及び側面には台鉋状工具によるとみられる加工痕が認められる。また、底板の圧痕が残る。6005よりやや小ぶりである。6007も結桶の側板であるが、欠損により全体の形は不明確である。6005や6006に比して板厚が薄い。

6008は蓋である。3区SD05より出土している。平面形状は円形で端部付近に直径2.5cm程の円形の孔を有する。孔の外側や端部を斜めに削って整形している。

杭（第54図 図版34）

6009は杭の一部である。1区SD23より出土している。縦に半分欠損しており、断面形状は半円形を呈する。杭の先端部は削り痕が明瞭に残り、所々刃こぼれ痕が見られることから鉄製加工工具によるものと思われる。表面には樹皮が残る。

板材（第54～55図 図版34）

板材は6枚出土している。全て1区SD23より出土した。6010は有段板である。片面に段を有し、断面形状はL字状を呈する。側面に鉄器による加工痕が明瞭に残る。6011と6012は1区SD23で同位置から出土した。幅及び厚さが酷似しており、同一の規格の板材の可能性も考えられる。6012は片面が炭化している。6013は板の端部で、表裏両側より鉄製加工工具により切り出した痕が見られる。6015はやや厚めの板で床材かと推測される。片面に半円形の抉痕が見られ、有抉部分は炭化している。

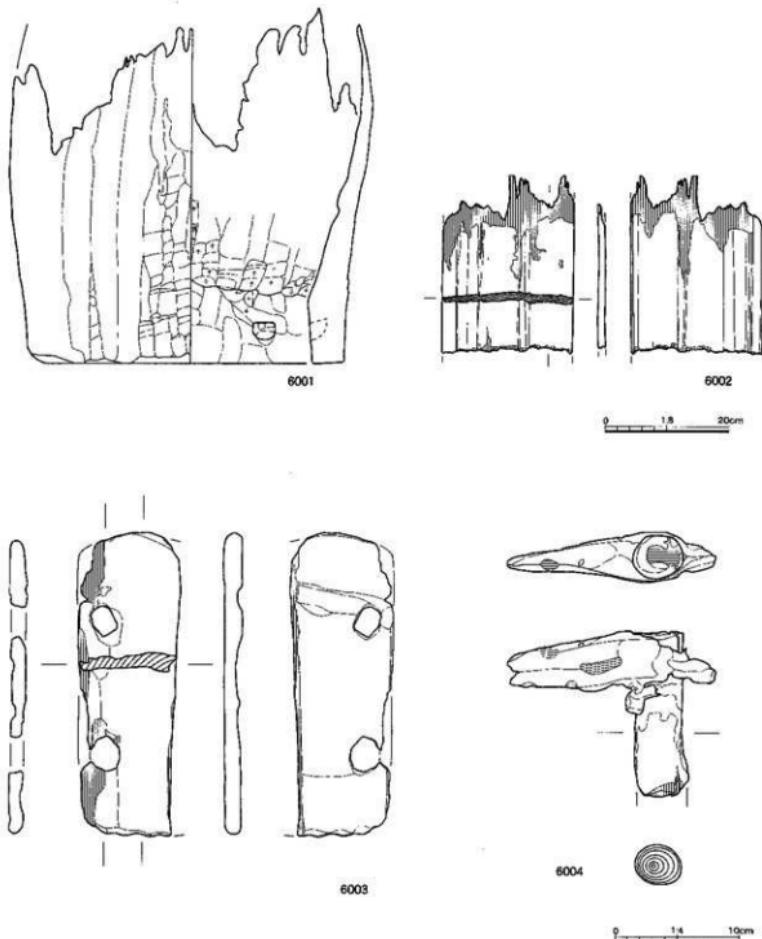
棒状木製品（第56図 図版34）

棒状木製品は4点出土している。6016は有抉棒である。4面に面取りされ両端側面が抉られる。端部に穿孔とも思われる切り込みの痕が見られる。6017は角棒である。断面形状は正方形を呈し精緻な加工が施される。3箇所に非貫通の方孔が穿たれており、他の部材と組み合わせて使用されたものと思われる。方孔には別材が残存している。6018は板目材を削って整形された部材で断面形状は円形を呈する。

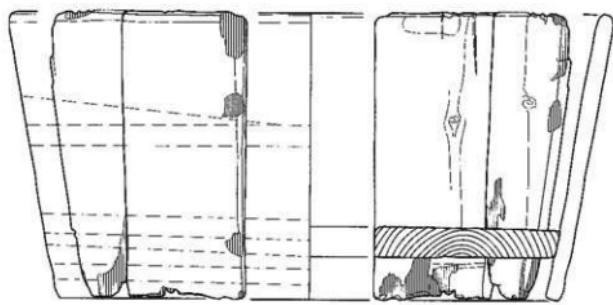
6019は3区SP 215より出土した角棒である。表面は刃こぼれの痕が明瞭に残り鉄製加工工具により加工されたと思われる。また、表面に刃傷のような切痕が観察される。

用途不明品（第56図）

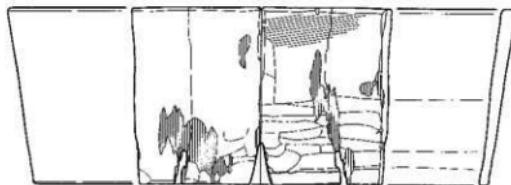
6020は薄い板の両端を削りだして木葉形に整形されている。3区3Lグリッドの包含層より出土した。



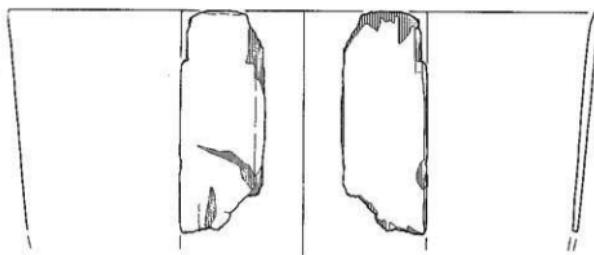
第52図 木製品1



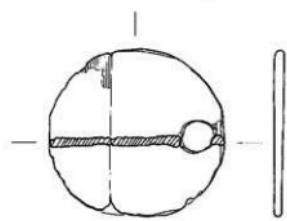
6005



6006



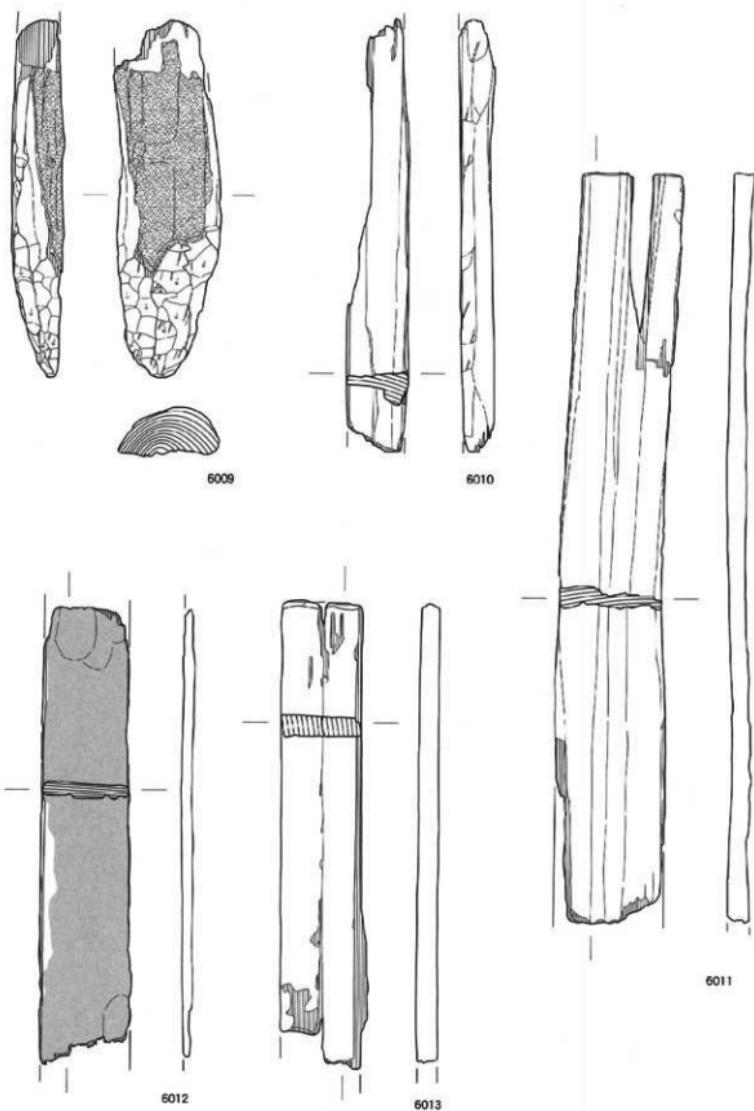
6007



6008

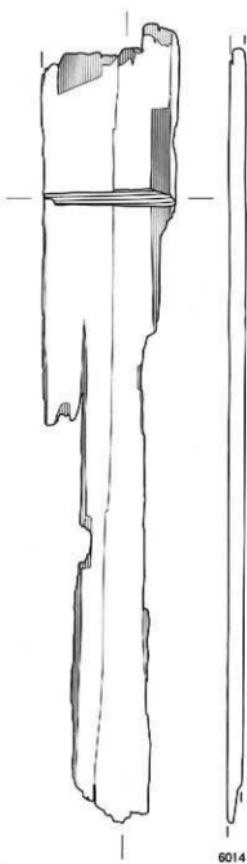
A scale bar with markings at 0, 1, 4, and 10 cm.

第53図 木製品2

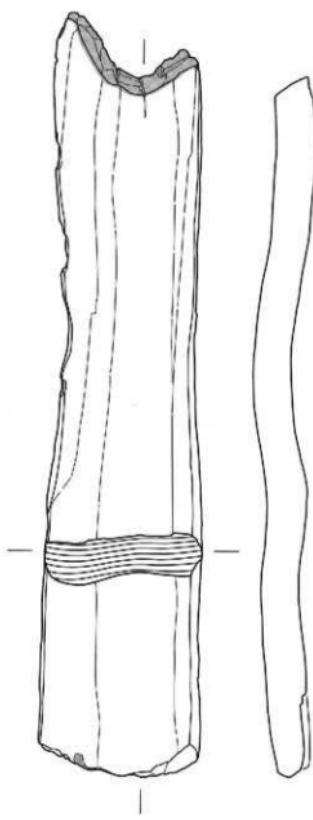


第54図 木製品3

0 14 10cm



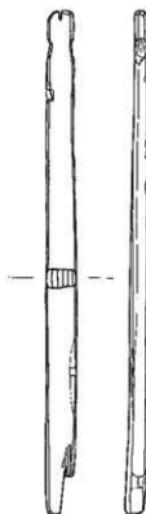
6014



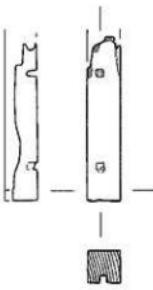
6015

0 10cm

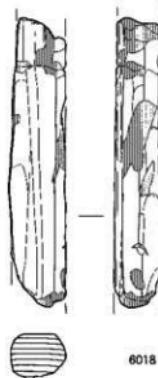
第55図 木製品4



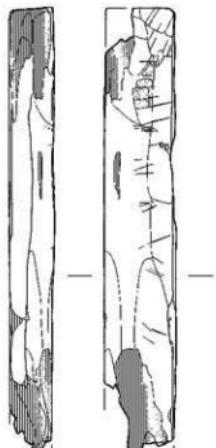
6016



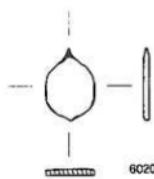
6017



6018



6019



6020

0 1.4 10cm

第56図 木製品5

年月	器種	遺跡名	Gr.	遺物 No.	口径	底面	底部	基部	内面	文部	調査(外調)	調査(内調)	出土	地城	色調(内面/外面)	備考	記号	
1001	甕	137	1	SB SK15	-	(7.8)	-	胴部	-	縦縫目文 横縫目文	ハケヌ	やや赤 やや多 少々	良好	灰黄/にぶい黄澄		148		
1002	甕	144	1	1B SK41	67.0	(6.0)	-	口縁	-	コロコロ目文 横縫目文	ナデ ハケヌ	ナデ	白色地金	良好	褐黄/にぶい黄澄		147	
1003	甕	136	1	1B SK41	-	(8.6)	-	腹部～胴部	40	縦縫目文 横縫目文	-	-	-	良好	淡黄/浅黄		056	
1004	甕	394	1	4D SK73	-	(3.9)	-	胴部	-	横縫	ハケヌ	-	中古	良好	褐/黑褐		171	
1005	甕	383	1	4D SK74	-	(6.6)	-	腹部～胴部	-	縦縫目文 横縫目文	ハケヌ	真紅	小山古墳	良好	にぶい緑/にぶい緑		170	
1006	甕	146	1	3C SP76	-	(3.7)	-	口縁	-	口内縫目文	-	-	ナデ	小赤	良好	にぶい黄/にぶい黄		134
1007	甕	149	1	SP78	(16.4)	(3.5)	-	口縁	-	中古	ハケヌ	ハケヌ	中古	良好	にぶい緑/浅黄		167	
1008	甕	318	1	SD SD22	-	(2.0)	-	口縁	-	縫目文 横縫	ハケヌ	ハケヌ	良好	良好	灰黄/にぶい黄澄		124	
1009	甕	318	1	SD SD22	(17.2)	(4.8)	-	口縁	-	縫目文 横縫	ハケヌ	ハケヌ	良好	良好	灰黄/灰		149	
1010	甕	316	1	SD SD22	(21.8)	(7.1)	-	口縁～頂上	-	-	ハケヌ	ハケヌ	良好	良好	灰黄/にぶい黄澄		144	
1011	甕	311	1	SD SD22	15.1	34.3	6.6	口縁～底面	40	口縫	ハケヌ	ハケヌ	良好	良好	にぶい黄/にぶい黄		072	
1012	甕	311	1	SD SD22	(14.8)	(3.8)	-	口縁	-	縫目文	ハケヌ	ナデ	中古	良好	にぶい黄/浅黄		139	
1013	甕	311	1	SD SD22	-	(4.0)	-	胴部	-	縫目文 横縫	-	-	ナデ	好和白	良好	にぶい緑/浅黄		149
1014	甕	317	1	SD SD22	18.2	(20.3)	-	口縁～肩上	50	縫目文 横縫	ハケヌ ナデ	ハケヌ ナデ	良好	良好	灰黄/にぶい黄澄		051	
1015	甕	198	1	SC SD22	(17.0)	(6.0)	-	口縁～肩	20	口縫	ヨリナギ	ヨリナギ ハラマツ ハラマツ	小石古	良好	にぶい黄/にぶい黄澄	外周に墨 付帯	163	
1016	甕	241	1	SC SD22	(14.0)	(6.0)	-	口縁～脚上	45	縫目文	ホウ	良好	良好	良好	灰/水		069	
1017	甕	198	1	SC SD22	14.0	(13.6)	-	口縁～脚部	40	ハケヌ	ナデ	穂	良好	良好	灰黄/にぶい黄澄	反転復元	025	
1018	甕	380	1	SD SD22	(19.0)	(4.2)	-	口縁～脚部	30	ヘラ2本	ゲツリ	セ 1-3mm大 矢毛・鈎毛	良好	良好	オリーブ/墨/にぶい黄	益衣御園 所	137	
1019	器	198	1	SC SD22	13.4	(10.2)	-	底部欠損	70	小嘴	ナデ ハケヌ	穂	良好	良好	灰黄/浅黄		020	
1020	甕	380	1	SD SD22	-	-	-	底口	-	ハク付キ ホヅ シボ付	シボ付	器物合せ	良好	良好	にぶい黄/にぶい黄		081	
1021	甕	298	1	SD SD23	17.2	(3.4)	-	口縁	-	口縫目文ナギ	ハケヌ	ハケヌ ナデ	穂	良好	灰/灰	反転復元	102	
1022	甕	305	1	SD SD23	19.0	(2.2)	-	口縁	-	平行化粧	ハケヌ	ハケヌ	良好	良好	灰黄/灰	反転復元	112	
1023	甕	282	1	SD SD23	20.6	(2.6)	-	口縁	-	山腹縫目ナギ	ハケヌ	ハケヌ ナデ	穂	良好	灰黄/にぶい黄澄	反転復元	106	
1024	甕	325	1	SD SD23	23.4	(2.3)	-	口縁	-	口縫目文ナギ	-	-	良好	良好	灰黄/灰	反転復元	110	
1025	甕	350	1	SB SD23	22.2	(1.6)	-	口縁	-	口縫目文	ヨリナギ	ヨリナギ ハケヌ	良好	良好	灰黄/灰	反転復元	109	
1026	甕	375	1	SC SD23	20.0	(2.2)	-	口縁	-	小腹凸筋	ハケヌ	ハケヌ	穂	良好	灰黄/浅黄	反転復元	111	
1027	甕	350	1	SD SD23	20.6	(4.7)	-	口縁	-	縫目文 横縫	ハケヌ	ハケヌ	穂	良好	灰白/灰白	反転復元	101	
1028	甕	321	1	SD SD23	20.0	(2.1)	-	口縁	-	-	-	-	穂	良好	灰白/灰	反転復元	115	
1029	甕	305	1	SD SD23	20.6	(3.7)	-	口縁	-	多孔化粧	ヨリナギ ハケヌ	ヨリナギ	穂	良好	改善後/灰白	反転復元	103	
1030	甕	246	1	SD SD23	-	(2.1)	-	口縁	-	縫目文	ハケヌ	ナデ	1-3mmの小 穴	良好	にぶい黄/にぶい黄澄		135	
1031	甕	291	1	SD SD23	-	(2.3)	-	口縁	-	縫目文	-	等身化粧	穂	等身化粧	良好	灰/灰		136
1032	甕	286	1	SD SD23	13.0	(5.0)	-	口縁～脚部	20	タガメ	ハケヌ	ハケヌ	穂	良好	にぶい黄/にぶい黄	改善後	114	
1033	甕	346	1	SD SD23	-	(3.4)	-	口縁	-	山腹縫目ナギ 内縫目行脚筋	ハケヌ	ヨリナギ ハケヌ	穂	良好	灰黄/灰		119	
1034	甕	325	1	SD SD23	-	(2.3)	-	口縁	-	口縫目文ナギ	ナデ	穂	良好	良好	灰黄/灰		121	
1035	甕	295	1	SD SD23	14.8	(6.0)	-	口縁	-	山腹縫目ナギ	ハケヌ	ハケヌ	穂	良好	灰/灰		113	
1036	甕	330	1	SD SD23	10.2	(2.0)	-	口縁	-	-	ハケヌ	ハケヌ	穂	良好	灰/灰		116	
1037	甕	373	1	SC SD23	-	(4.2)	-	口縁	-	新字字文	ハケヌ	ハケヌ	1mm厚の小 穴	良好	改善後/灰		141	
1038	甕	303	1	SD SD23	17.8	(4.9)	-	口縁～脚上	50	豊岡 縫目文	ハケヌ	タガメ	良好	良好	にぶい黄/灰黃色		006	
1039	甕	247	1	SD SD23	(18.6)	(3.5)	-	口縁～脚	-	縫目文	ヨリナギ ハケヌ	ヨリナギ ハケヌ	小石古	良好	灰黄/灰黃	外周に墨 付帯	160	
1040	甕	284	1	SD SD23	14.0	(9.0)	-	口縁	-	-	ハケヌ	ハケヌ タガメ	穂	良好	にぶい黄/にぶい黄		021	
1041	甕	344	1	SD SD23	(22)	(5.0)	-	口縁	20	縫目文	ハケヌ ナデ	タガメ ハケヌ ナデ	ナデ	良好	にぶい黄/にぶい黄		156	
1042	甕	275	1	SD SD23	18.2	(6.8)	-	口縁～脚上	50	縫目文	ハケヌ	ヘラ2本	穂	良好	にぶい黄/灰黃色		036	
1043	甕	292	1	SD SD23	16.6	(6.0)	-	口縁～脚部	30	縫目文	ハケヌ	ハケヌ ヘ カゲリ	今中	良好	灰黃/深黃	反転復元	018	
1044	甕	290	1	SD SD23	0.8.0	(7.5)	-	口縁～脚	30	縫目文	ヨリナギ	ヨリナギ	小石古	良好	灰/灰		152	
1045	甕	247	1	SD SD23	(18.2)	(5.0)	-	口縁～脚	20	縫目文 縫目文	ヨリナギ	ヘラ2本	良好	良好	灰/にぶい黄		154	

第1表 土器觀察表1

番号	器種	Ron	測定因	Gr.	地層 No.	口径	標高	遺徳	断面	成年率	文様	測量(外因)	測量(内因)	船上	地城	色調(内因/外因)	備考	番号
1046	甌	275	1	6D	SD-23	19.0	(7.5)	-	口縁～脚部	26	縦目網文	ハナメ	ヘラタツリ	小舟せき	良好	明治時代に亘る遺物	155	
1047	甌	415	1	6D	SD-23	22.4	(8.0)	-	口縁～脚部	20	縦目網文	ナガタタケ	ヨコカ	良	良好	に亘る遺物	002	
1048	甌	282	1	SD	SD-23	(25.4)	(7.5)	-	口縁～脚部	25	縦目網文	ヨコカ	ヨコカ	小舟せき	良好	に亘る遺物に亘る遺物	153	
1049	甌	336	1	4C	SD-23	13.8	17.05	-	口縁～脚部	40	縦目網文	ハナメ	ハナメヘラタツリ	中舟	良好	明治時代に亘る遺物	069	
1050	甌	281	1	SD	SD-23	32.8	41.95	8.4	底面	90	縦目網文	ナガタタケ	ナガタケ	中舟	良好	に亘る遺物に亘る遺物	047	
1051	甌	281	1	SD	SD-23	16.4	(10.0)	-	口縁～脚部	30	縦目網文	ナガタタケ	ナガタケ	中舟	良好	に亘る遺物に亘る遺物	032	
1052	甌	285	1	SD	SD-23	(16.8)	(4.2)	-	口縁～脚部	26	縦目網文	ヨコカ	ヨコカ	中心せき	良好	に亘る遺物に亘る遺物	157	
1053	甌	285	1	6D	SD-23	16.4	(4.9)	-	口縁	20	縦目網文	ナガ	ナガヨコカ	良	良好	に亘る遺物に亘る遺物	033	
1054	甌	281	1	SD	SD-23	(13.8)	(2.7)	-	口縁	20	縦目網文	ヨコカ	ヨコカ	中舟	良好	に亘る遺物に亘る遺物	159	
1055	甌	285	1	6D	SD-23	(19.0)	(4.0)	-	口縁	30	縦目網文	ハナメ	ハナメヘラタツリ	中舟	良好	に亘る遺物に亘る遺物	158	
1056	甌	198	1	6C	SD-23	(19.0)	(19.5)	-	口縁～脚部	40	縦目網文	ナガ	ナガ	良	良好	に亘る遺物に亘る遺物	007	
1057	甌	248	1	SD	SD-23	18.0	(12.6)	-	口縁～脚部	30	縦目網文	ナガタタケ	ナガタタケ	中舟	良好	に亘る遺物に亘る遺物	033	
1058	甌	244	1	6D	SD-23	15.3	(5.7)	-	口縁	30	縦目網文	ナガ	ナガ	良	良好	に亘る遺物に亘る遺物	040	
1059	甌	294	1	SD	SD-23	-	(6.5)	4.2	底面	20	ハナメ	ナガタケ	ナガタケ	良	良好	灰陶/浅黄色	097	
1060	甌	285	1	SD	SD-23	15.0	(17.0)	-	口縁～脚部	60	ハナメ	ハナメ	ハナメナガ	良	良好	に亘る遺物	022	
1061	甌	238	1	SD	SD-23	17.8	(11.9)	-	口縁～脚部	20	ナガタケ	ヨコカ	ヨコカ	中舟	収算	淡青色に亘る遺物	038	
1062	甌	281	1	6D	SD-23	10.4	(4.7)	-	口縁～脚部	20	縦目網文	ナガタ	-	中舟	良好	に亘る遺物	066	
1063	甌	237	1	SD	SD-23	14.2	(11.6)	-	口縁～脚部	20	縦目網文	ハナメ	ハナメ	良	良好	に亘る遺物/灰青色	034	
1064	広口甌	275	1	6D	SD-23	21.2	G1.9	-	口縁～脚部	30	縦目網文	ハナメ	ハナメ	良	良好	浅黄色に亘る遺物	065	
1065	広口甌	282	1	SD	SD-23	-	15.3	12.2	口縁～脚部	85	ナガタ	30	30	中舟	良好	灰陶/浅黄色	069	
1066	甌	284	1	6D	SD-23	16.0	(7.2)	-	口縁	30	縦目網文	ナガタ	ナガタ	中舟	灰陶	に亘る遺物	060	
1067	甌	275	1	6D	SD-23	-	(12.3)	-	脚部	30	ナガタ	ハナメナガ	ナガタ	中舟	良好	に亘る遺物	052	
1068	甌	236	1	SD	SD-23	18.4	29.0	-	口縁～脚部	70	ナガタタケ	ナガタタケ	ナガタタケ	中舟	良好	に亘る遺物	029	
1069	甌	281	1	SD	SD-23	(11.6)	(4.7)	-	口縁	-	直筋	ナガタ	ナガタ	良	良好	灰陶/白色	084	
1070	甌	237	1	SD	SD-23	-	(12.5)	(3.3)	瓶形～脚部	50	ヘラタツリ	ハタタケ	ヘラタツリ	良	良好	灰陶/灰青色	087	
1071	甌	238	1	SD	SD-23	-	(9.8)	6.0	瓶形～脚部	40	手	ハタタケ	ハタタケ	中舟	良好	陶灰/に亘る遺物	037	
1072	甌	284	1	6D	SD-23	-	(11.4)	2.8	瓶形～脚部	30	ハタタケ	ハタタケ	ハタタケ	中舟	良好	卷形	026	
1073	甌	237	1	SD	SD-23	15.0	24.3	3.5	口縁～底部	70	ハナメ	ハナメ	ハナメ	中舟	良好	に亘る遺物/に亘る遺物	019	
1074	合併甌	167	1	6D	SD-23	6.9	(17.9)	-	底部	70	ハタタケ	ナガタ	ナガタ	良	良好	に亘る遺物/に亘る遺物	041	
1075	甌	208	3	SO	SD-23	-	(7.7)	-	尾部	20	直筋	ハナメ	ナガタ	中舟	良好	に亘る遺物/に亘る遺物	046	
1076	高杯	281	1	6D	SD-23	28.4	(5.5)	-	脚部	20	ハタタケ	ハタタケ	ハタタケ	良	良好	に亘る遺物/浅黄色	063	
1077	高杯	232	1	SD	SD-23	-	(2.3)	-	脚部	20	ハタタケ	ハタタケ	ハタタケ	中舟	良好	に亘る遺物/に亘る遺物	054	
1078	高杯	177	1	6C	SD-23	31.6	(8.6)	-	脚部	50	手	ハタタケ	ハタタケ	良	良好	に亘る遺物/に亘る遺物	030	
1079	高杯	207	1	6D	SD-23	31.8	(5.4)	-	脚部	-	ナガタ	ナガタ	ナガタ	良	良好	に亘る遺物/に亘る遺物	055	
1080	高杯	321	1	SD	SD-23	(20.4)	(4.3)	-	口縁	30	ハタタケ	ナガタ	ナガタ	良	良好	灰陶/灰青色	190	
1081	高杯	248	1	SD	SD-23	-	(6.4)	-	脚部	-	ハタタケ	ハタタケ	ハタタケ	中舟	良好	に亘る遺物/に亘る遺物	061	
1082	高杯	206	1	SD	SD-23	-	(10.5)	-	再手	30	ナガタ	ナガタ	ナガタ	良	良好	灰陶/灰青色	092	
1083	高杯	237	1	SD	SD-23	-	(18.0)	(8.8)	脚部	50	手	ハタタケ	ハタタケ	良	良好	オーバル型/灰青色	088	
1084	高杯	284	1	SD	SD-23	-	(11.2)	16.8	脚部	50	手	ハタタケ	ハタタケ	良	良好	灰陶/に亘る遺物	046	
1085	高杯	281	1	SD	SD-23	-	3.6	(14.8)	脚部	40	手	ハタタケ	ハタタケ	小舟せき	良	灰青色/灰青色	098	
1086	萬杯	244	1	SD	SD-23	-	(7.5)	(11.0)	脚部	20	ナガタ	ナガタ	ナガタ	良	良好/灰青色	090		
1087	萬杯	325	1	SD	SD-23	-	(12.0)	19.8	脚部	40	縦目網文	ナガタ	ナガタ	良	良好	に亘る遺物/に亘る遺物	024	
1088	萬杯	263	1	SD	SD-23	19.4	10.3	5.0	全体	90	ハナメ	ハナメ	ハナメ	中舟	良好	1-2段の小舟/小舟せき	011	
1089	萬杯	203	1	SD	SD-23	12.4	(11.8)	-	底部欠損	40	ハナメ	ハタタケ	ハタタケ	中舟	良好	灰青色/灰青色	043	
1090	萬杯	203	1	SO	SD-23	(10.0)	(9.2)	-	口縁～脚部	30	ハナメ	ナガタ	ナガタ	良	良好	萬杯/に亘る遺物	028	

第2表 土器観察表2

地名	番号	種類	測量 No.	Gr.	測量 No.	性状	固有	成因	部位	粒度	文様	調査(表面)	調査(内部)	剥離	未成	色調(内面/外観)	備考	No.	
井	1091	井	237	1	SD 23	04.65	(7.3)	口縫～断面	50	無柱	ハクダ	ハクダ	良好	程/良好	096				
移	1092	移	244	1	SD 23	05.00	(8.5)	口縫～断面	50	ハクダ/ナメダ 持ササ	ハクダ/ナメダ	良好/中等	程/良好	に高い濃度/に低い濃度	161				
移	1093	移	245	1	SD 23	27.0	(7.0)	口縫～断面	40	ナメ/ハクダ	ナメ/ハクダ	やや差	良好	に高い濃度/浅黄色	反転度元	044			
布瓦跡	1094	布瓦跡	345	1	SD	SD 23	-	(3.0)	1.8	底部	-	ハクダ	ハクダ	良好	灰黃褐色/灰黃褐色	高感度孔	097		
有花跡	1095	有花跡	281	1	SD	SD 23	-	(3.2)	3.4	底部	近柱	ハクダ	ハクダ	良好	/に高い濃度	高感度孔	164		
有花跡	1096	有花跡	293	1	GD	SD 23	-	(3.4)	2.9	底部のみ	-	ナメ/ハクダ タガ	タガ	良好	に高い濃度/に低い濃度		050		
竹	1097	竹	282	1	SD	SD 23	-	-	-	に縫～把手	-	ナメ/ハクダ	ナメ/ハクダ	良好	に高い濃度/に低い濃度	把手穿孔	079		
重	1098	重	168	1	GD	合合層	18	(21.0)	-	口縫～断面	30	ハクダ	ハクダ	良好	に高い濃度/に低い濃度		004		
重	1099	重	167	1	GD	合合層	14.2	15.6	-	口縫～断面	30	ハクダ/ナメ	ナメ/ハクダ	やや差	良好	に高い濃度/灰黃褐色	反転度元	057	
高杯	1100	高杯	165	1	SD	合合層	-	(9.0)	15.4	断面	40	ナメ	ハクダ/ナメ	良好	に高い濃度/灰白	反転度元	039		
高杯	1101	高杯	165	1	SD	合合層	-	(1.1)	(18.4)	断面	-	無柱/青緑	ナメ	良好	に高い濃度/青	赤褐色	165		
高	1102	高	165	1	SD	合合層	-	(6.5)	16.4	(10.4)	口縫～断面	40	ナメ/ハクダ	ナメ/ハクダ	やや差	良好	灰黃褐色/に高い濃度	反転度元	042
各乳頭	1103	各乳頭	165	1	SD	合合層	-	(4.0)	16.0	底部	-	ナメ/ハクダ	タガ	良好	灰黃褐色/灰	低感度孔	163		
合合層	1104	合合層	167	1	SD	合合層	8.0	4.3	-	全体	80	ナメ/ハクダ	ナメ/ハクダ	良好	に高い濃度/に低い濃度		058		
重	1105	重	166	1	GD	合合層	8.7	5.0	-	全体	50	ナメ	ナメ/ハクダ	やや差	良好	浅黃褐色/灰		049	
東	1106	東	419	2	SD	SD 08	-	(0.5)	8.4	脚下～茎	-	ナメ	ナメ	小石多/青白	良好	に高い濃度/に低い濃度		178	
東	1107	東	33	2	SD	SD 03	04.40	(12.0)	4.0	口縫～断面	30	合合層	ナメ/ハクダ	ハクダ	小石多/青白	良	に高い濃度/に低い濃度		094
東	1108	東	427	2	SD	SD 04	04.40	(7.2)	-	山根	-	口縫～山根	ナメ	ナメ/青白/青	良好	灰/灰黃褐色		145	
東	1109	東	410	2	SD	SD 04	03.80	(7.35)	-	山根	-	口縫～山根	ナメ/ハクダ	ナメ/ハクダ	小石多/青白	山根穿孔	146		
東	1110	東	450	2	SD	SD 04	21.6	(9.4)	-	口縫～断面	-	ナメ/ナメ	ナメ/ナメ	良好	に高い濃度/に低い濃度	反転度元	100		
東	1111	東	428	2	SD	SD 04	9.4	(5.7)	-	口縫～断面	20	ナメ/ナメ	ナメ/ナメ	ナメ/青白	灰黃褐色/灰	反転度元	068		
東	1112	東	428	2	SD	SD 04	16.0	(5.8)	-	口縫～断面	-	ナメ	ナメ	ナメ/青白	に高い濃度/灰	反転度元	069		
東	1113	東	39	2	SD	SD 04	15.0	(7.0)	-	口縫～灰度	20	ナメ/ナメ	ナメ/ナメ	ナメ/青白	灰黃褐色/に高い濃度	反転度元	070		
東	1114	東	429	2	SD	SD 04	9.2	(5.4)	-	山根	30	無柱/青白	ナメ/ナメ	ナメ/青白	良好	に高い濃度/青	反転度元	064	
東	1115	東	429	2	SD	SD 04	12.3	(11.7)	-	口縫～灰度	20	ナメ/ナメ	ナメ/ナメ	良好	に高い濃度/に低い濃度		063		
東	1116	東	429	2	SD	SD 04	-	44.0	4.6	底部	20	ナメ	ナメ	良好	灰黃褐色/に高い濃度		067		
東	1117	東	429	2	SD	SD 04	-	6.0	-	脚～根	-	無柱/青白	ナメ/ナメ	ナメ/青白	山根穿孔	穿孔	166		
東	1118	東	429	2	SD	SD 04	-	(2.0)	23.2	他の断面	-	基盤	ナメ/ナメ	ナメ/青白	良好	に高い濃度/に低い濃度		062	
十割地	1119	十割地	410	2	SD	SD 04	9.2	(1.0)	-	底部のみ	30	ナメ	ナメ	ナメ	良好	に高い濃度/に低い濃度	反転度元	065	
土	1120	土	82	2	SD	SD 07	-	(6.5)	-	脚下部	30	ハクダ	ハクダ	1-2mmの細い 石子	良好	に高い濃度/に低い濃度	粗面度元	085	
土	1121	土	434	2	4L	NK 03	08.8	(5.9)	-	口縫～断面	-	ハクダ	ナメ/ハクダ	ナメ/青白	粗	粗	093		
土	1122	土	431	2	4L	合合層	0.6	2.6	4.3	口縫～底部	40	底面合合層	ナメ/ナメ	ナメ/ナメ	良好	灰/灰	スリッパ層	093	
鐵	1123	鐵	23	2	ZK	合合層	19.0	37.9	10.0	口縫～底部	30	ナメ	ナメ	良好	灰/灰	灰黃褐色	072		
鐵	1124	鐵	84	3	SM	SK 204	-	(4.4)	-	脚部	-	ナメ	ナメ	ナメ/青白	灰黃褐色/に高い濃度		186		
變	1125	變	84	3	SM	SK 204	01.70	(3.5)	-	口縫	-	ナメ/ナメ	ナメ/ナメ	良好	に高い濃度/に低い濃度	粗面度元	174		
變	1126	變	84	3	SM	SK 204	08.0	(2.0)	-	口縫	-	ナメ/ナメ	ナメ/ナメ	良好	濃黃褐色/に高い濃度		183		
變	1127	變	250	3	SM	SK 18	9	(6.5)	-	口縫	-	透水/ハクダ	ナメ/ナメ	良好	に高い濃度/浅黃褐色		180		
變	1128	變	203	3	SD	SD 22	04.0	(3.3)	-	口縫	-	内面～外側/底面	ナメ/ナメ	ナメ/青白	良好	青/青		168	
合合層	1129	合合層	91	3	2Z	SK 06	-	(0.5)	02.2	底部～底面	60	底面合合層 骨粉	透水	ナメ	ナメ/青白	に高い濃度/浅黄色	反転度元	008	
土	1130	土	278	3	4X	SK 24	09.0	(0.2)	-	口縫～断面	30	ナメ	ナメ	ナメ/青白	良好	灰/灰	灰黃褐色/浅黃褐色	151	
土	1131	土	13	3	30	SP 07	-	(5.7)	110	脚下～底部	30	ナメ/ナメ	ナメ/ナメ	良好	灰褐色/灰白色		179		
土	1132	土	13	3	30	SP 07	-	(0.6)	-	口縫～断面	-	ナメ/ナメ	ナメ/ナメ	良好	灰黃褐色/灰白色		186		
土	1133	土	8	3M	SE 10	15.9	(23.3)	-	底部大隙	80	ナメ/ナメ	ナメ/ナメ	良好	鐵青色/浅黄色		023			
土	1134	土	8	3M	SE 10	12.4	19.4	4.3	完形	98	ナメ/ナメ	ナメ/ナメ	良好	に高い濃度/に低い濃度	反転度元	001			
土	1135	土	70	3	3M	SP 154	16.0	(5.3)	-	口縫	-	ナメ	ナメ/ナメ	良好	に高い濃度/に低い濃度		091		

第3表 土器観察表3

遺物No.	器種	Rno.	測量区	Gr.	遺構 No.	寸法	基底	部位	保存率	文様	測量(内部)	測量(外部)	施主	造成	色調(内面/外面)	備考	No.		
1136	壺	88	3	3M	SE10	16.4	(18.0)	-	口縁-肩部	50	ハナメ	ハナメ	中村	鉢質	灰青色/にぶい黄緑	反転復元	031		
1137	壺	442	3	3N	SE10	-	(34.0)	-	器底	-	ハナメ	ハナメ	小田中	良好	にぶい青緑/にぶい青緑	-	159		
1138	壺	95	3	3M	SE10	20.4	(16.4)	-	口縁-肩部	30	ナデ	ナデ	東	良好	灰青色/にぶい青緑	反転復元	030		
1139	壺	283	3	3O	SE10	20.3	(12.3)	-	口縁	90	網目織	網目織	ナフ	コロボウ	中中華	良好	灰青色/にぶい青緑	反転復元	010
1140	壺	89	3	3M	SE10	14.0	(5.8)	-	口縁	-	ナデ	ナデ	中中華	良好	灰青色/にぶい青緑	反転復元	013		
1141	壺	99	3	3M	SE10	14.8	(9.35)	-	口縁	-	ナデ	ハナメ	ナデ	良好	灰青色/にぶい青緑	反転復元	012		
1142	壺	82	3	2M	SE10	11.5	(25.0)	-	底部欠損	80	ナデ	ナデ	中中華	鉢質	淡黄色/浅黄色	-	033		
1143	壺	27	3	3O	SE10	-	(14.5)	-	杯底-脚部	40	ハナメ	ハナメ	東	良好	褐色/褐色	-	015		
1144	壺	95	3	3M	SE10	-	(9.0)	-	器底	20	網目織	網目織	ヘラボウ	ヘラボウ	中中華	良好	灰青色/にぶい青緑	反転復元	088
1145	鉢	96	3	3M	SE10	-	(10.0)	2.3	底部	40	網目織	網目織	東	鉢質	灰青色/にぶい青緑	-	017		
1146	鉢	94	3	3M	SE10	10.2	6.0%	4.4	底部	100	ナデ	ナデ	東	鉢質	にぶい青/にぶい青緑	反転復元	014		
1147	鉢	284	3	3M	SE10	7.2	5.8	4.2	底部	100	ナデ	ナデ	東	鉢質	淡黄色/白色	反転復元	016		
1148	鉢	221	3	3N	SE10	(30.4)	(9.2)	-	口縁-脚部	-	ハナメ	ハナメ	東	1~2mmの小さな 多孔化	良	明治期/改造期	西周未削 青背景	098	
1149	鉢	205	3	3O	SK19	07.2	(5.6)	-	口縁	-	網目織	網目織	東	小孔化	良好	褐色/褐色	-	143	
1150	壺	86	3	3N	SD-03	(19.89)	(4.8)	-	口縁-肩部	-	ハナメ	ハナメ	1~2mmの小さな 多孔化	良好	にぶい青/にぶい青緑	-	175		
1151	壺	14	3	3D	SD-03	(17.0)	(3.87)	-	口縁	-	ナフナデ	ナフナデ	小孔化	良好	淡黄色/淡黄色	外版復元	169		
1152	壺	219	3	2N	SD-03	(9.0)	(3.2)	-	口縁	-	網目織	網目織	東	良好	褐色/深褐色	水影	172		
1153	若替	14	3	3O	SD-03	-	4.0	-	器底	-	-	-	東	良好	にぶい青色/にぶい青緑	-	121		
2154	復原器底	276	3	4M	SD-32	8.3	4.15	10.4	口縁-底部	60	ナデ	ナデ	東	見/底	反転復元	071			
1155	壺	248	3	3M	SD-14G	(15.1)	(4.8)	-	口縁	-	網目織	網目織	三洋子	東	にぶい青/深褐色	-	173		
1156	壺	243	3	3M	SD-14G	(13.0)	(3.5)	-	口縁	-	網目織	網目織	ナデ	東	小孔化	灰青色/灰青綠	-	169	
1157	壺	243	3	3M	SD-14G	(15.2)	(2.8)	-	口縁	-	ナデ	ナデ	東	良好	後奈良/奈良朝	-	168		
1158	壺	243	3	3M	SD-14G	-	(3.1)	(5.0)	底部	-	ナデ	ナデ	東	良好	淡褐色/青	-	187		
1159	真杯	249	3	3M	SD-14G	33.1	(7.7)	-	杯底	60	ナデ	ナデ	東	良好	真青色/水色	-	133		
4160	ニチヨウ 豆	230	1	5B	SD-23	3.2	2.8	3.0	口縁-底部	95	ナフナデ	ナフナデ	東	良好	にぶい青色/にぶい青緑	一部削除 剥離	092		
4161	ニチヨウ 無柄豆	221	3	3N	SE10	(2.2)	(4.2)	-	口縁-底部	90	ハナメ	ハナメ	小孔化	東	褐色/深褐色	-	080		

第4表 土器観察表4

遺物No.	器種	測量区	Gr.	遺構 No.	最大径	最大幅	重量(g)	保存率	独立	地味	色調(内面/外面)	備考	No.
4162	土罐	1	6D	SD-23	4.9	5.0	105	100	1~2mmの浮き多孔化	良	/灰青	-	078
4163	土罐	1	6Z	名古屋	3.5	3.4	47	100	砂粒含む	良好	/灰白	-	076
4164	土罐	2	2Z	SD-03	3.6	3.5	42	100	砂粒含む	良好	/生黄	-	077
4165	土罐	2	2Z	SD-04	5.6	4.2	78	100	1mmの浮き含む	良好	/鐵	-	075
4166	土罐	2	2Z	SD-04	6.4	6.3	191	100	砂粒含む	良好	/にぶい青緑	-	074
4167	粘土罐	1	4D	SK-60	3.0	3.1	5	95	1~2mmの浮き多孔化	良	灰青色/にぶい青緑	土脂糊張りを施用	083

第5表 土製品観察表

遺物No.	器種	測量区	Gr.	遺構 No.	最大径	最大厚	調査	施主	地味	色調(内面/外面)	備考	No.
4168	瓦	2	5R	名古屋	(4.8)	2.5	(合計) (高さ) (幅)	セイ	良好	灰青色/にぶい青緑	-	191

第6表 瓦観察表

遺物No.	器種	Rno.	調査区	グッド	出土地点	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石材	備考	No.
5001	有茎石核	99	1	2E	包含帶	3.4	1.3	0.5	1	火山岩		07
5002	石製石斧	428	2	4K	NW1	10.4	3.2	1.5	121	沸紋岩		17
5003	磨制石斧	282	1	5D	SK23	13.7	6.6	4.7	883	角閃石質片岩		18
5004	石包丁	507	1	5C	SD23	(2.3)	0.0	0.9	10	泥質灰岩		02
5005	石包丁	192	3	3M	SK100	5.7	4.4	0.7	29	泥質灰岩		04
5006	石包丁	325	1	5D	SD23	3.6	3.8	0.6	11	砂岩		05
5007	石包丁	240	1	5D	SD23	8.9	5.1	1.4	89	石英岩質山岩	使用歴あり	12
5008	石劍	295	1	6D	SD23	4.4	2.9	1.0	27	玄武岩		03
5009	石斧	310	1	5C	SD23	4.3	3.3	1.1	15	泥質灰岩		01
5010	石劍	360	1	5B	SD23	2.1	1	0.2	1	達摩砂岩		06
5011	石劍	315	3	5N	SD22	3.9	2.5	0.3	6	頁岩		15
5012	磨石	305	1	5D	SD23	7.5	6.3	1.5	89	安山岩		14
5013	磨石	294	1	6D	SD23	7.8	7.6	6.3	458	安山岩		16
5014	磨石	224	3	3M	SE10	14.1	7.0	3.7	579	淡紫岩		19
5015	砾石	6	3	2M	包含帶	6.3	5.4	1.9	102	斑紋岩	風化	13
5016	砾石	308	3	3M	SD16	1.3	0.5	0.5	1	砾石		11
5017	水晶玉	169	3	3N	SK205	0.8	0.8	0.8	1	水晶	霞綠玉	08
5018	ガラス球	360	3	4M	SK24	0.3	0.3	0.3	0.1	ガラス		10
5019	石核	303	1	6D	SD23	3.1	2.2	1.8	8	綠色輝灰岩		20

第7表 石器觀察表

遺物No.	器種	調査区	グッド	遺物No.	全長(cm)	幅(径)(cm)	厚さ(高さ)(cm)	樹柄	本取り	備考	No.
6001	片済	3	3G	SE10	表面(58.0)	53.0×48.0	—	クリ	丸太材	一本削り削面 斜工具痕4.0cm 棒を斜面に削用	01
6002	川井砂漿板	3	3M	SE10	表面(29.3)	21.4	1.3	スギ	板目材		02
6003	底下駆	1	5C	SD23	25.0	0.2	1.7	スギ	徑門材	裏面端カンジキ根元存	03
6004	軒弄(?)	1	5D	SD23	表面部(16.5) 側面(13.5)	14.2 4.1	— —	カバ属	芯持材		04
6005	轍	3	2D	SE01	表面(3.5)	2.5	—	スギ	板目材	側面斜2.5° 削取 斧形 表面部1.4° 削取 上斜削	17
6006	踏場側板	3	3N	SK215	表面(14.5)	踏場部(4.1)	—	スギ	板目材	側面斜2.5° 削取 表面斜1.4° 削取 上斜削	20
6007	踏場側板	3	2D	SE01	表面(18.2)	踏場部(7.8)	0.7	ヒノキ	板目材	側面斜 表面斜	18
6008	裏	3	3G	SD06	—	厚14.3	0.9	スギ	徑門材		05
6009	机	1	5C	SD23	(29.2)	8.4	4.1	カエデ属	半裁材	供器具用産あり	06
6010	青酸板	1	6D	SD23	(35.4)	5.1	2.6	スギ	板目材	供器具用産あり	07
6011	板	1	6D	SD23	(61.7)	8.9	(1.9)	スギ	板目材	同一尾根材か	10
6012	板	1	6D	SD23	(37.6)	7.5	(1.2)	スギ	板目材		09
6013	板	1	6D	SD23	(38.6)	(7.1)	1.9	スギ	板目材	供器具用産あり	15
6014	板	1	6D	SD23	(38.6)	10.1	2.3	スギ	板目材		16
6015	有段板	1	6D	SD23	94.0	19.5	5.6	スギ	板目材	有段部分鉄化	13
6016	有段板	1	6D	SD23	41.4	2.5	1.7	ヒノキ	板目材	先端左ひし形内面	08
6017	舟形	1	6D	SD23	(18.5)	3.7	2.7	スギまたはヒノキ	板目材	方孔あく	12
6018	舟形	1	6D	SD23	(23.8)	4.5	3.7	ケヤキ	板目材		11
6019	舟形	3	3N	SK215	(36.6)	5.8	3.7	スギ	板目材	供器具用産あり	19
6020	用途不明品	2	3L	SE01	5.9	4.0	0.5	新葉酸	板目材	表面削り削す 水の溶液	14

第8表 木製品觀察表

第5章 結章

前章までに、調査区毎の主要な遺構及び遺物について述べてきた。各調査区で確認された遺構及び遺物は、弥生時代中期・同後期・古代・中世以降に大別される。ここでは調査の成果を時代順にまとめたい。

弥生時代中期

弥生時代中期の遺構としては、1区北側において確認された土坑SK 14・SK 15・SK 73からSK 76、及び溝SD 04があげられる。それぞれの遺構からは彫描文が施された壺や甕の破片が出土している。口縁端部が指押圧や工具による刻みで小波状を呈し、内面に綾杉文・扇状文・直線文が施された壺や甕、胴部に直線文・彫描文・波状文・綾状文・扇状文等をめぐらせる壺の破片などが認められる。これらは弥生時代中期の後半に比定されよう。また、信州系の栗林式のものと思われる土器片が1点出土している。同時期の遺物は1区南側の溝SD 22とSD 23、そして2区のSD 03とSD 04からも出土しているが、後世の遺物が混在しており、その出土の状況から概して流れ込みによるものと思われる。

弥生時代後期

弥生時代後期に属する遺構は、まず1区南西側の大規模な溝であるSD 22・SD 23が挙げられる。当跡からは弥生時代後期の法仏式を主体とした有段口縁を有する甕や壺が、高杯・器台・鉢等とともに大量に出土している。甕は、胴部に刻みが施されるものと施されないものがあり、各々半数程度口縁段部に擬凹線が施される。また、口縁の断面形状が三角形を呈する1038や1039等の後期初頭の鑄造式の特徴を有する甕も少量であるが見受けられる。壺は有段口縁を有する広口壺を主体とし、段を持たない長頸壺や台付き壺等もみられる。高杯はスカート状に広がる脚部をもつものと棒状有段脚のものが見られ、杯部が大きく、全体を丹念に磨かれ赤彩されているものが多い。SD 23からは、鉄斧の柄や田下駒などをはじめ、鉄製工具の加工痕を有する板や杭等が出土しており当時の生産活動を窺わせる。1区ではSD 22とSD 23以外の他には後期の遺構として明確なものは確認できなかった。

当該期の遺構は3区で多く確認されている。3区では井戸SE 10と方形周溝墓SZ 01及びSZ 02、さらにSK 06やSK 24をはじめとする土坑群や溝SD 03等、そして円形周溝状遺構SD 01・SD 17が検出されている。方形周溝墓SZ 01では中央に主体部と思われる長方形の土壙SK 204が検出された。方形周溝墓SZ 02は周溝のみが確認された。残念ながら両者とも出土遺物は土器片がわずかに見受けられるのみであった。SZ 01の主体部SK 204と同じような規模と形状を有する土坑が3区北側において確認されている。土坑SK 01・SK 100・SK 164・SD 146は平面形状が長方形を呈し、底面が平坦でSK 204と類似する覆土を有していた。私見ながら、その形状から木棺墓等の可能性を考えたい。長方形の土坑の他に、SK 06やSK 24など平面形状が梢円を呈する土坑も確認されている。SK 06からは赤彩された台付装飾壺1129が出土し、SK 24は土器片とともにソーダガラス製の玉5018が出土している。方形周溝墓や方形の土壙墓・梢円形の土壙墓の各々の時期差や新旧関係は明確ではないが、弥生時代後期法仏式期の一定期間に周辺区域が墓域を形成していたものと考えられる。

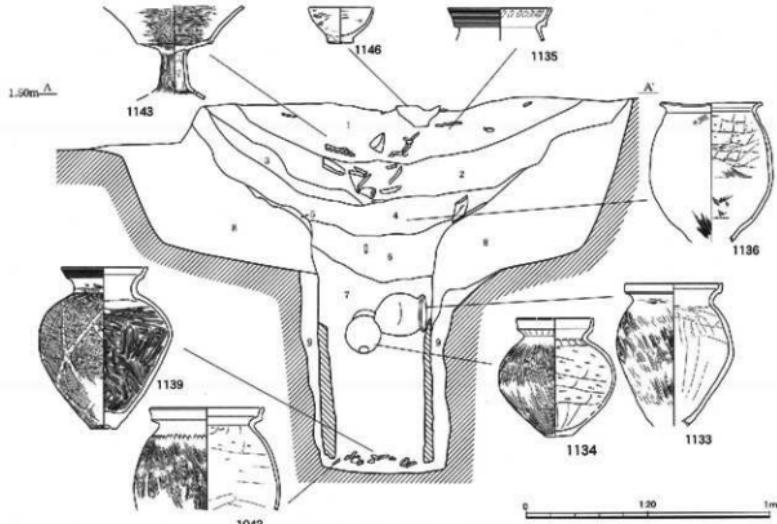
3区北側中央に所在する井戸SE 10からは丸太を割り貫いた井戸枠が出土している。井戸の底部では土器片が敷き詰められるような状態で甕1042・1139・1075が検出された。また、井戸の覆土としては中層にあたる井戸枠残存部の直上で甕0133及び0134が埋納されたかのような状態を呈して出土した。上層からは甕

1135や高杯1143が出土したほか、最上層では小型の鉢1146が正位で検出された。井戸を廃棄する際の祭祀に伴うものと考えたい。覆土から出土した土器は法仏式旧段階から新段階にわたると思われる。したがってSE 10は法仏式の終末時期には埋められたものと推測したい。ちなみに、SE 10から出土した土器も含めて、1区SD 22・SD 23や3区の土坑等から10点ほど接合関係にある土器片が確認されている(第9表 第58図)。

1区及び3区で検出されたピット群の幾つかについては、土層観察や平面形から掘立柱建物ないし柵と推定している。これらについては主軸の方位から両区とも3類に分類したが、出土遺物等が非常に少なく築造時期等は確認できなかった。しかしながら、1区の溝SD 22とSD 23から多量の遺物が出土していることや、3区の井戸SE 10の存在を考えるならば、その周辺にいくつかの建物の存在を想定することが可能であると思われる。また3区においては、円形周溝状遺構SD 01・SD 07が検出されている。周溝のみ確認され、ピットやその他の付属遺構は見つからなかったことから、内部に柱を持たず、壁をもって屋根を支える構造の建物であった可能性も考えたい【岡本1998】。弥生時代中期と時代は異なるものの類似した遺構は、新潟市高島A遺跡において方形周溝墓とともに検出されており、ここでは墓域に伴う施設の可能性が示唆されている【新潟市2000】。

古代～中世以降

古代から中世以降の出土遺物は、弥生時代の遺物に比して少量ではあるが出土している。古代の遺物としては須恵器の杯が3区SD 32から、また土師器及び須恵器の破片が3区SE 11から出土しているが、明確に古代の遺構として確認できたものはなかった。また奈良時代から平安時代のものと思われる瓦が数点2区東側包含層から出土している。この瓦は全体的に摩耗が著しく、また周辺に古代の遺物や遺構がほとんど検出されていないことから流れ込みの可能性がある。また、当遺跡の東隣に位置する中曾根遺跡においても、若干の丸瓦や平瓦が採集されたとの報告がある【西井1987】他、越中国府闕連遺跡が庄川を隔てた北西3km程の地点に所在している。

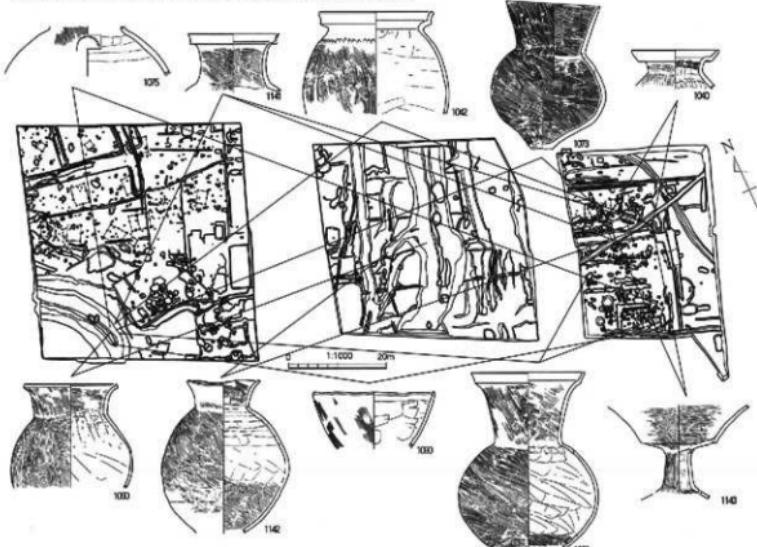


第57図 3区SE 10各層位別出土土器

中世の遺構としては、1区の溝SD 01からSD 03のほか、2区のSD 03及びSD 04や、同区東側の自然流路等が検出されている。また3区ではSE 01をはじめとする5基の井戸が検出されている。そのうちのSE 01から結桶の部材が出土したほか、SE 07からはこね鉢が出土している。この周辺には複数の掘立柱建物が存在するものと想定したが、これらを総合すると周辺には中世の集落が所在した可能性があるものと思われる。

おわりに

今回の調査では多くの遺構や遺物を検出することができた。特に弥生時代後期では点数もさることながら多岐にわたるもののが検出されている。また、3区では井戸の所在や墓域の形成されていた可能性が浮上するなど、当該期の様相を考える上で大きな成果を得ることができた。しかしながら、それとともに今後追究していくべき課題も多く残されていると思われる。例えば掘立柱建物跡と考えられるピットの帰属する時期と集落の存在、あるいは円形周溝状遺構の性格、1区SD 22とSD 23、2区SD 03とSD 04の全体像等、これらについてでは遺構論及び集落論という観点で不明な点が少なくないため、今後における周辺の調査・研究の進展により、その様相がさらに明らかになることを期待する次第である。



第58図 複数遺構から出土した土器の接合関係

遺物 No.	出土地点		
1042	1区SD 23	3区SE 10底	
1068	1区SD 23	1区SK 76	3区SK 18 (S Z 02) 3区SK 24
1073	1区SD 23	3区SD 146	
1075	1区SD 23	3区S Z 02 (SD 22) 3区SE 10底	
1090	1区SD 23	3区SK 19 (SE 11)	
1140	3区SE 10 F	3区SK 146	
1141	1区SD 23	3区SE 10下	3区SP 59
1142	2区SD 07	3区SE 10下	
1143	3区SE 10上	3区SK 204 (S Z 01)	3区SD 146
1160	1区SD 23	2区SD 04	

第9表 複数遺構から出土した土器の接合関係

引用参考文献一覧

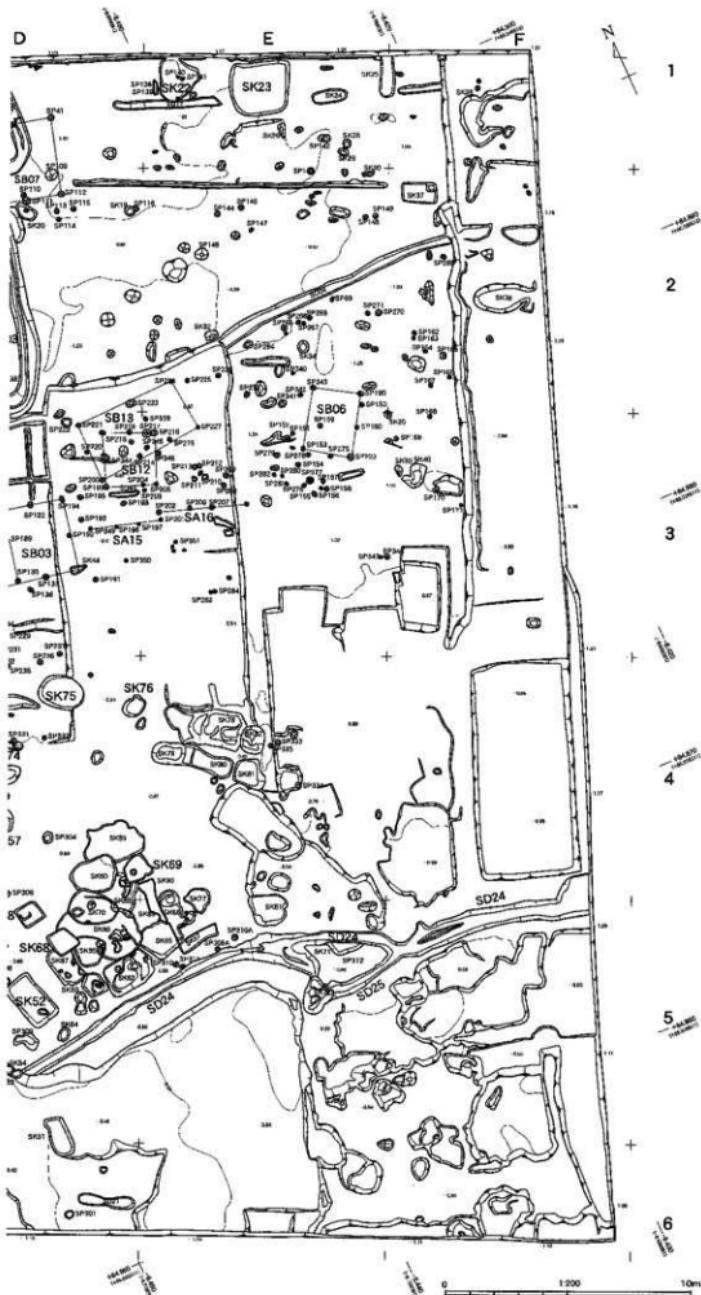
- 岡本淳一郎 1998 「弥生時代溝溝遺構に関する一考察」『富山考古学研究』創刊号 富山県文科振興財団埋蔵文化財調査事務所
- 岡本淳一郎 1999 「佐野台地における古墳出現期の土器について」『紀要富山考古学研究』第2号 富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所
- 岡本淳一郎 2003 「富山県西部地域における古墳出現期の土器様相」『庄内式土器研究』XXVI
- 岡本淳一郎 2003 「周溝をもつ遺物」についての基礎的研究『量気様』—秋山進午先生古希記念— 富山大学考古学研究論集
- 河合 志 1996 「北陸弥生土器様式の変遷過程—器種・用途別の計量分析を中心として」『石川考古学研究会々誌』第39号 石川考古学研究会
- 下條 信行 1982 「武道石器の性格—石戈再論—」『平安博物館研究紀要』7
- 鈴木 正貴 2000 「出土遺物からみた統合」『桶と樽—傍役の日本史』小泉和子編 法政大学出版局
- 田島 明人 1986 「土器師よりもみた古墳時代土器群の変遷」『浜町遺跡』『石川県埋蔵文化財センター
- 西井 龍儀 1987 「19.上牧野遺跡・中曾根遺跡・白石遺跡」「北陸の古代寺院 ーその源流と古瓦」北陸古瓦研究会編
- 久川 正弘 2004 「南加賀地方における弥生時代の一樣相」『石川県埋蔵文化財情報』第11号 石川県埋蔵文化財センター
- 木江 芹洋 1981 「新庄川遺跡出土遺物の紹介」『大鏡』第7号
- 安 秀樹他 2000 「『F』・『B』式」を考える・発表要旨集 北陸弥生文化研究会
- 安 秀樹他 2000 「北陸の弥生集落概要」『フォーラム 北陸における弥生都市 - 小松市八日市地方遺跡を検討する - 発表要旨集』
- 谷内尾吉司 1983 「北加賀における古墳出現期の土器について」『北陸の考古学』(石川考古学研究会々誌) 第26号 石川考古学研究会
- 石川県埋蔵文化財センター 2002 「金沢市 南新保C遺跡」
- 金沢市教育委員会 1988 「金沢市職域運動公園遺跡」
- 金沢市教育委員会 1996 「西念・南新保遺跡Ⅳ」
- 上市町教育委員会 1984 「北陸自動車道遺跡調査報告—上市町木製品総括編」
- 小松市教育委員会 2003 「八日市地方遺跡」— 小松駅東土地区画整理事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書—
- 新湊市教育委員会 2000 「高島 A 遺跡発掘調査概要」民間ドライバイン造成に伴う高島 A 遺跡発掘調査
- 新湊市教育委員会 2003 「市内遺跡試掘調査報告 新湊市鏡宮地区土地区画整理事業に伴う高島 A 遺跡試掘調査」
- 高岡市教育委員会 1995 「高岡市埋蔵文化財分布調査概報VI 一平成6年度、牧野・能町地区の遺跡分布調査」
- 高岡市教育委員会 1996 「市内遺跡調査概報IV 一平成7年度、石堀・長光寺遺跡・石塚遺跡・中曾根遺跡の調査」
- 高岡市教育委員会 2001 「石塚遺跡・東木津遺跡調査報告—都市計画道路下伏間江幡田線築造に伴う平成9・10年度の調査」
- 高岡市教育委員会 2002 「中保B遺跡 調査報告 ー中保土地区画整理事業による高岡市中保地区の区画整理事業に伴う調査ー」
- 高岡市教育委員会 2003 「石塚遺跡調査概報VI ー介護老人保健施設「きぼう」建設に伴う調査ー」
- 高岡市教育委員会 2005 「上牧野宮袋遺跡調査概報」
- 立山町教育委員会 1987 「辻遺跡・浦田遺跡発掘調査概要」
- 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 1999 「大味地区遺跡群 一坂井大味地区低コスト化水田農業大区画開拓整備事業に伴う調査ー」
- 国土地理院 1981 1:25,000『沿岸海域土地条件図』富山

図 版

1区遺構平面図
1



図版 1
1区造構平面図



図版
2

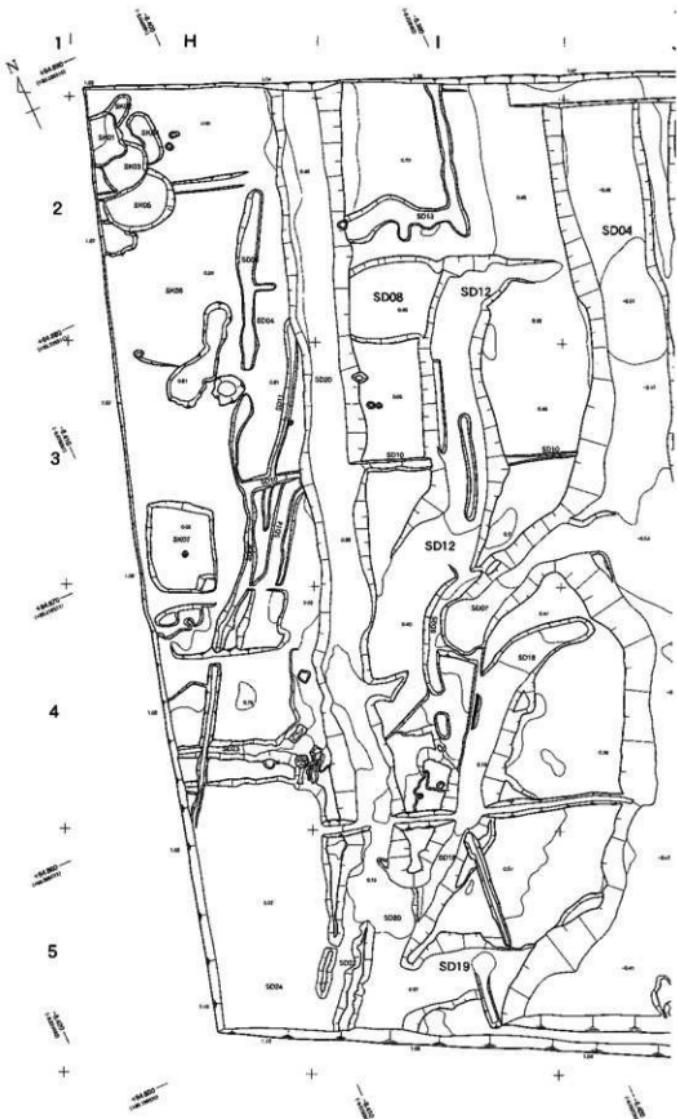
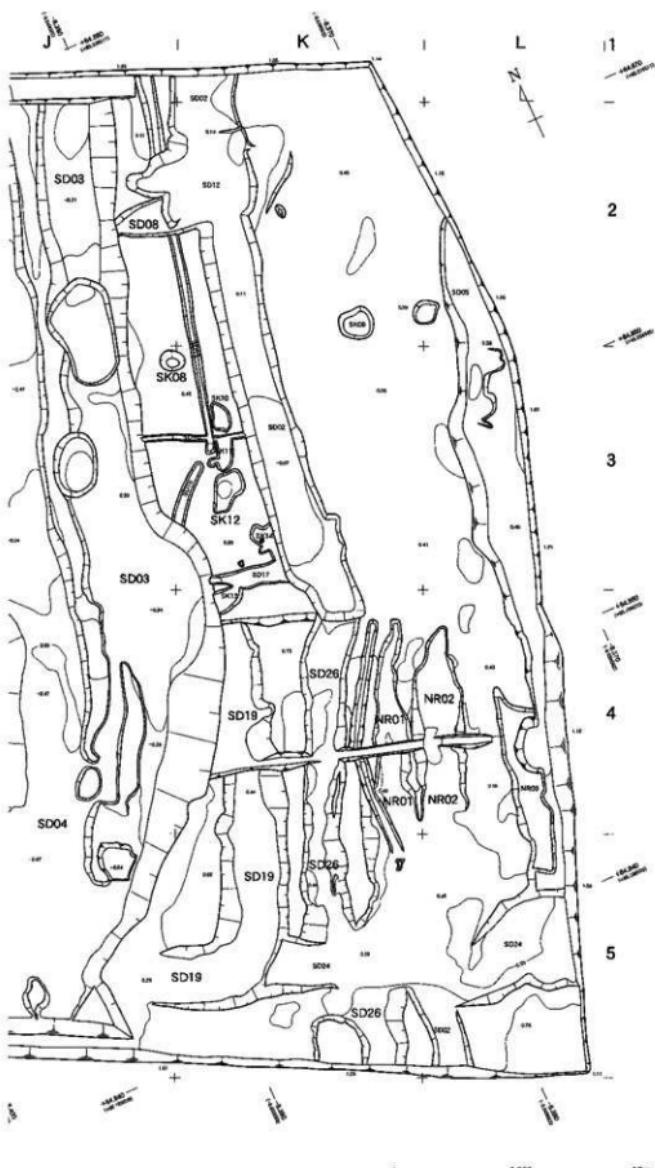
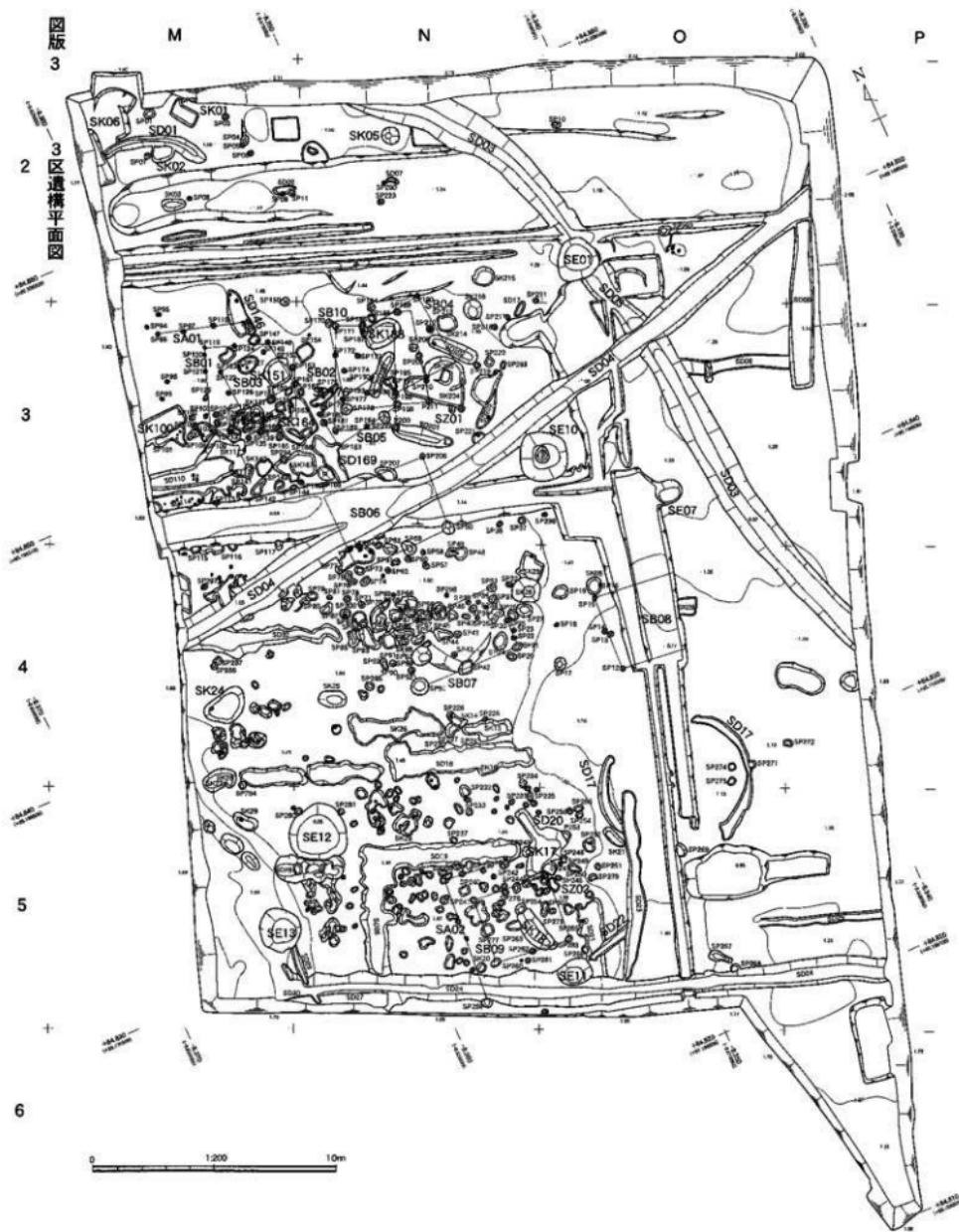


図2
2号区構造断面図



図版
3



6



1区北 遺構完掘状況（航空写真）



1区北 溝 SD01 完掘状況（北西から）



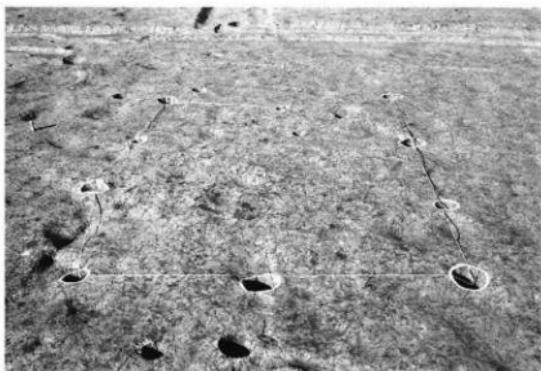
1区北 溝SD02完掘状況(南から)



1区北 溝SD03完掘状況(南から)



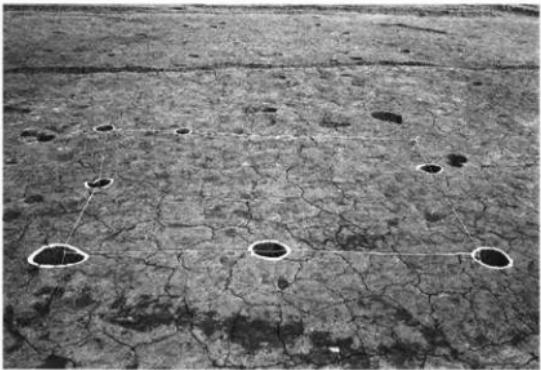
1区北 溝SD04完掘状況(西から)



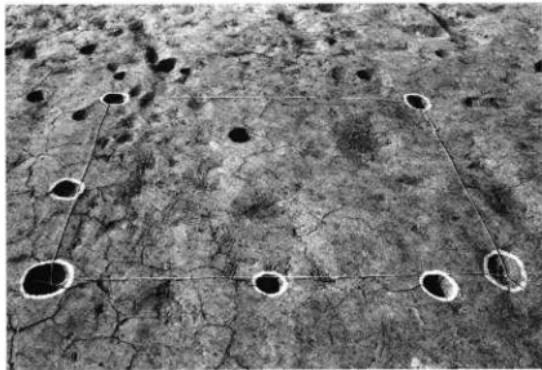
1 区北 挖立柱建物 SB01 (南から)



1 区北 挖立柱建物 SB03 (西から)



1 区北 挖立柱建物 SB04 (南から)



1区北 挖立柱建物 SB06 (東から)



1区北 挖立柱建物 SB07 (北から)



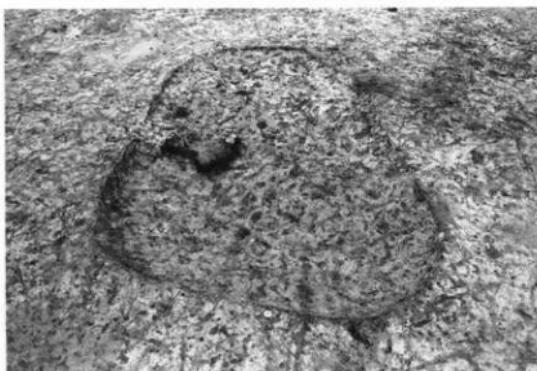
1区北 挖立柱建物 SB09 (北から)



1区北 挖立柱建物 SB11（西から）



1区北 土坑 SK10 土層断面（南から）



1区北 土坑 SK14 遺物出土状況（西から）



1区南 遺構完掘状況（航空写真）



1区南 溝SD22・23 土層断面（南東から）



1区南 溝SD22・23検出状況（南から）



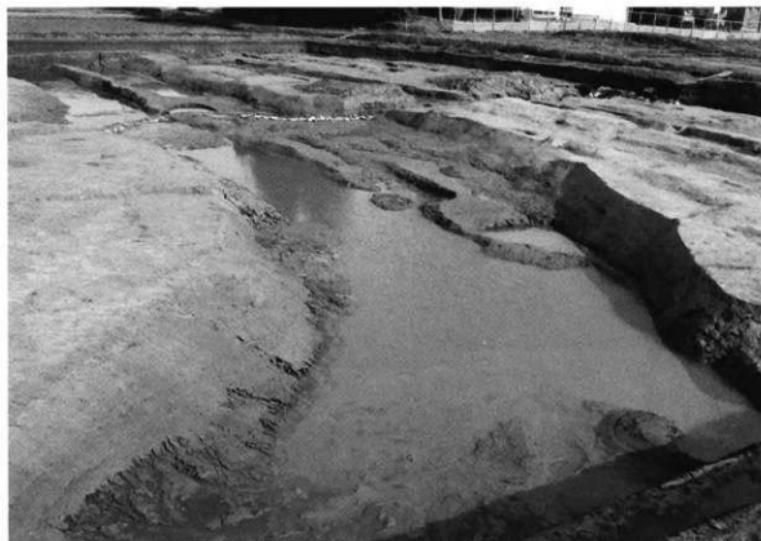
1区南 溝SD22・23土層断面（北東から）



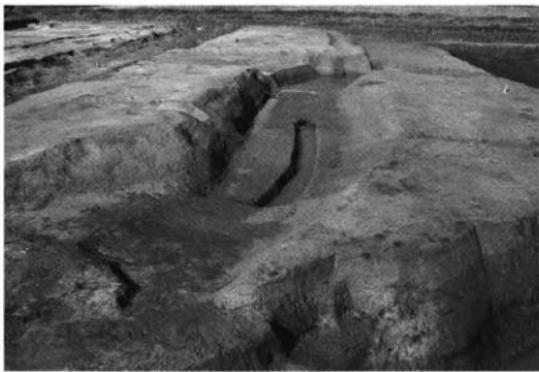
1区南 土坑群掘削状況（西から）



2区南 遺構完掘状況（航空写真）



2区南 溝SD03・04 完掘状況（南西から）



2 区北 溝 SD12 完掘状況（南西から）



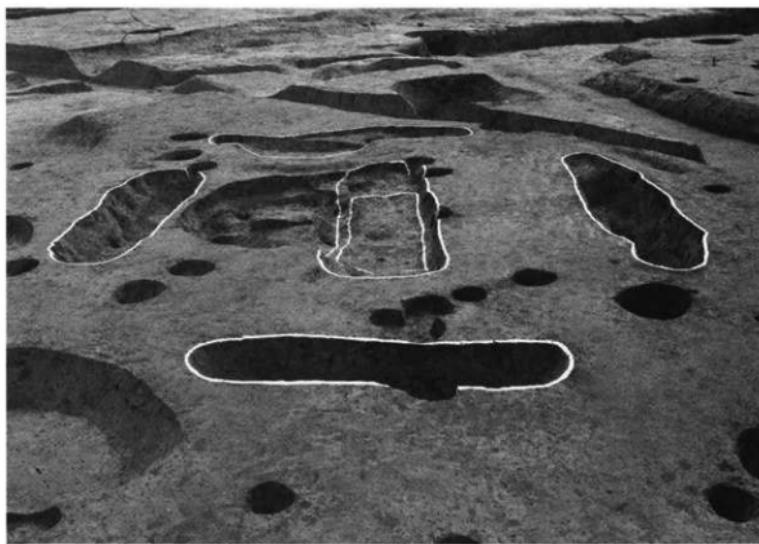
2 区北東端 自然流路（南から）



2 区南 溝 SD19・24・26 完掘状況（南から）



3区北 遺構完掘状況全景（航空写真・西から）



2区北 方形周溝墓 SZ01（北西から）



3 区北 方形周溝墓 SZ01 検出状況（北西から）



3 区北 方形周溝墓 SZ01 主体部(北東から)



3 区北 土坑 SK06 遺物出土状況（西から）



3区北 土坑SK01 挖削状況（南東から）



3区北 土坑SK100 完掘状況（東から）



3区北 土坑SK151 完掘状況（西から）



3区北 井戸SE10 土層断面（南から）



3区北 井戸SE10 遺物出土状況（南東から）



3区北 井戸SE10 掘削状況（東から）



3 区北 井戸 SE10 井戸枠出土状況（東から）



3 区北 井戸 SE10 井戸底遺物出土状況（東から）



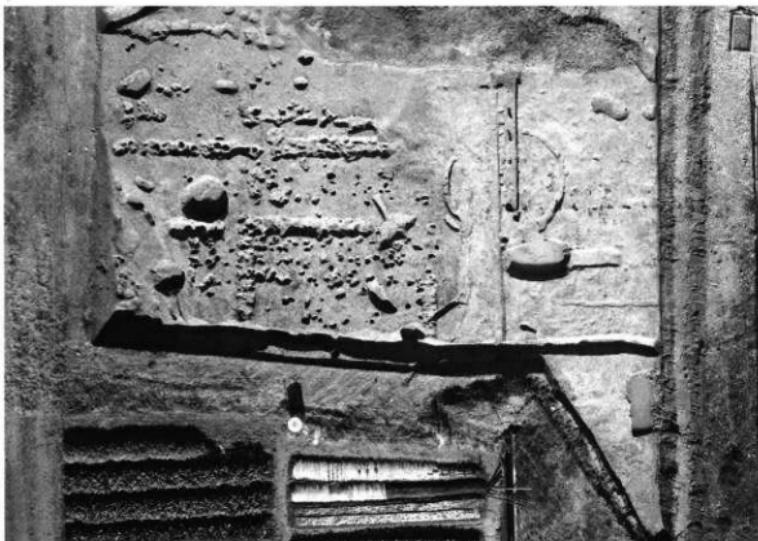
3区北 溝 SD03 掘削状況（南から）



3区北 溝 SD03 掘削状況（北から）



3区北 円形周溝状遺構 SD01（西から）



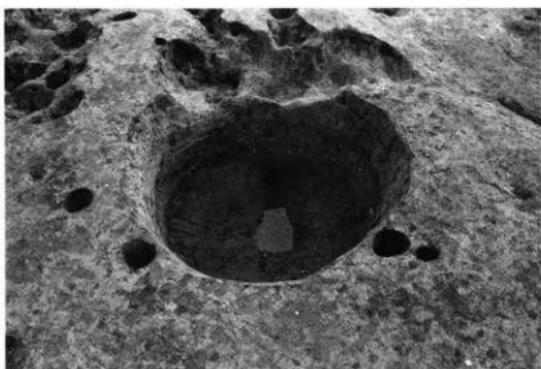
3区南 遺構完掘状況（航空写真）



3区南 方形周溝墓SZ02 埋削状況（南西から）



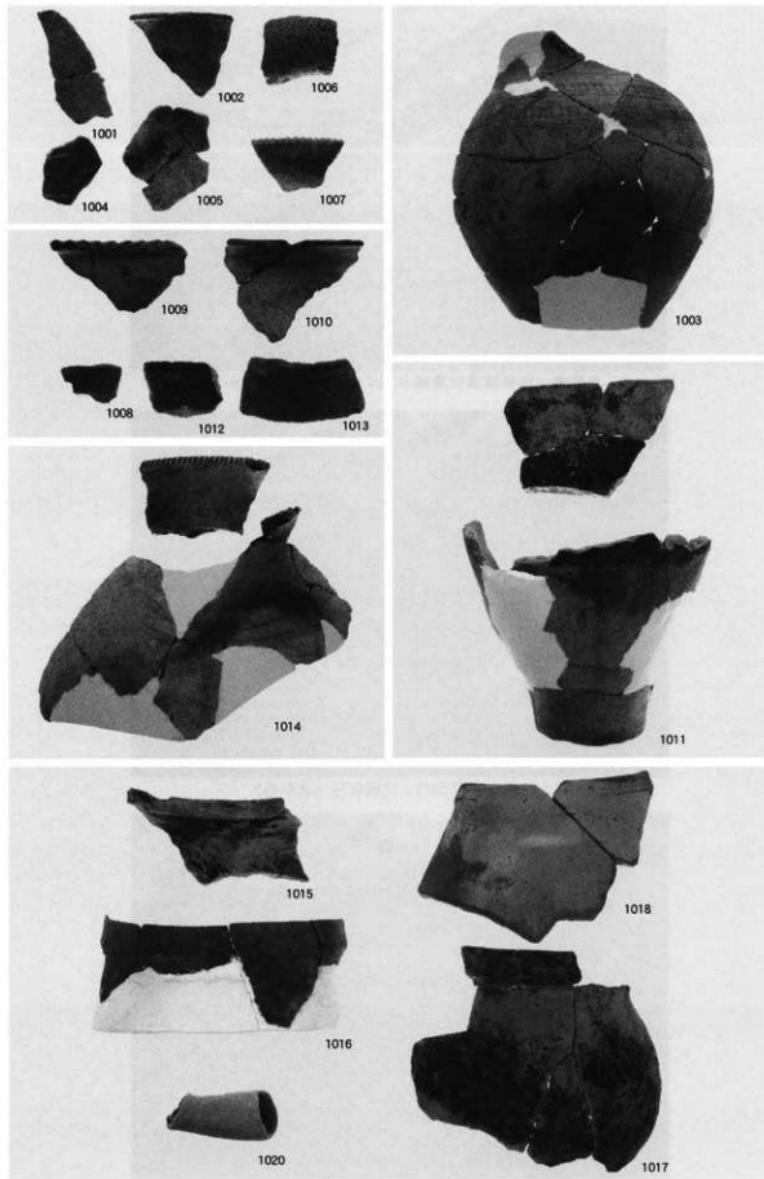
3区南 円形周溝状遺構 SD17 完掘状況（北東から）

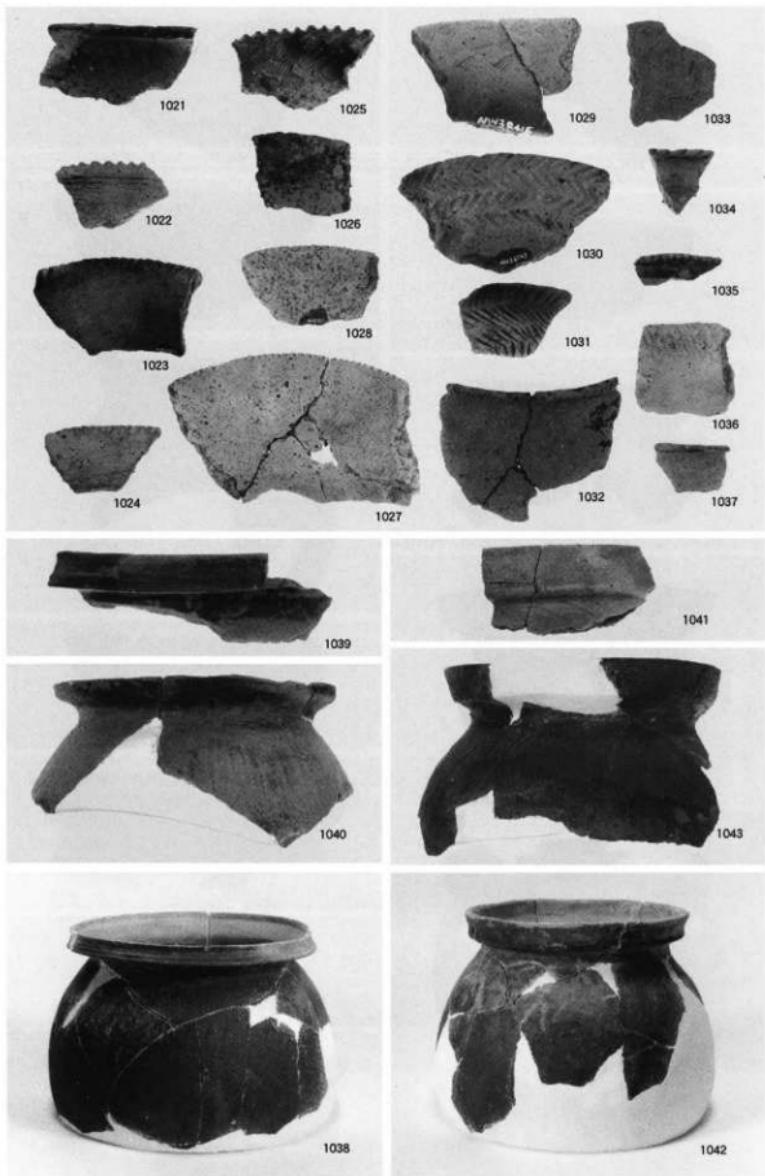


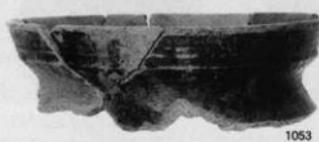
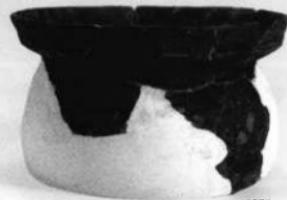
3区南 井戸 SE12 完掘状況（北から）



3区南 土坑 SK24 完掘状況（西から）

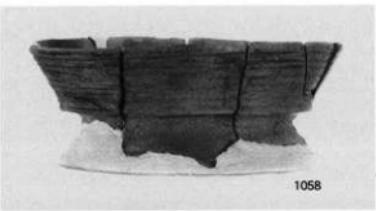








1057



1058



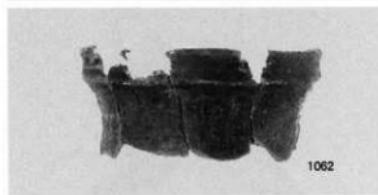
1059



1060



1061



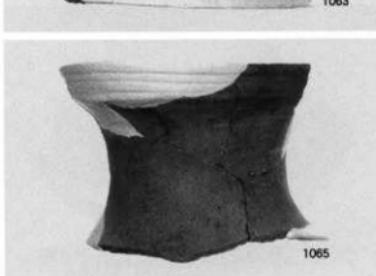
1062



1063



1064



1065



1066



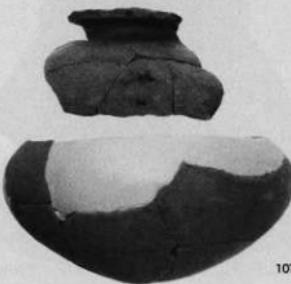
1067



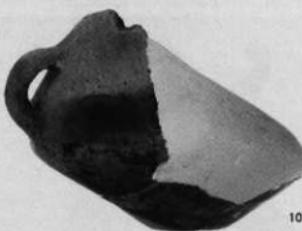
1068



1069



1070



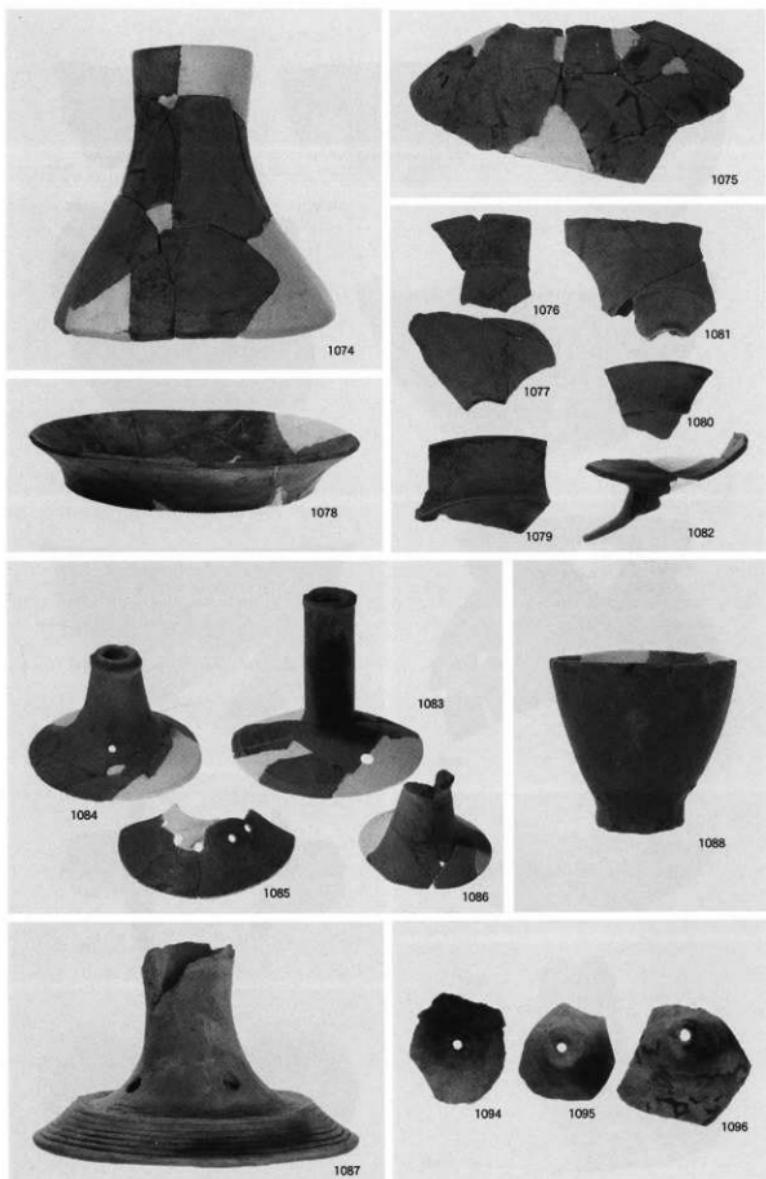
1071

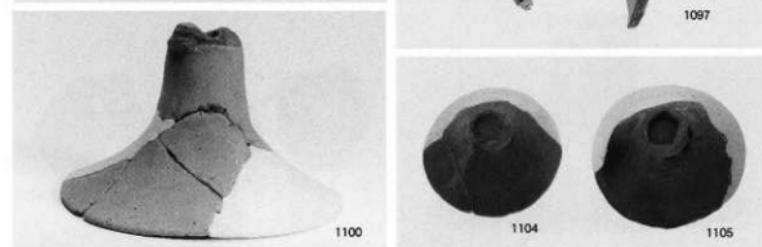
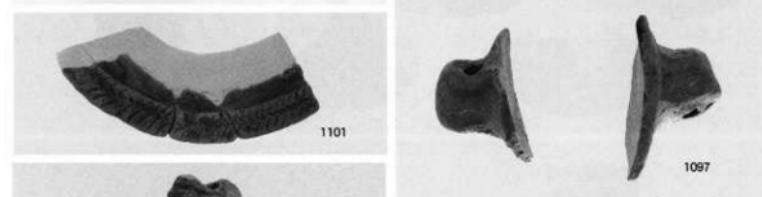
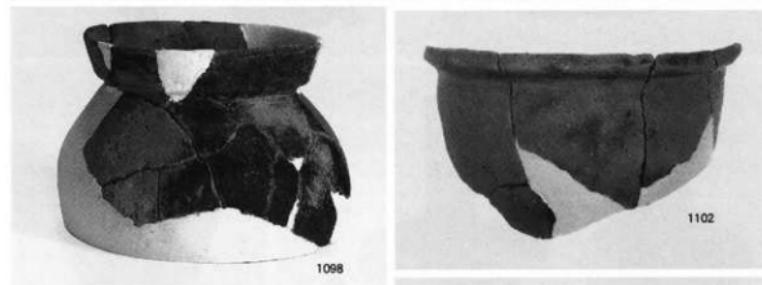
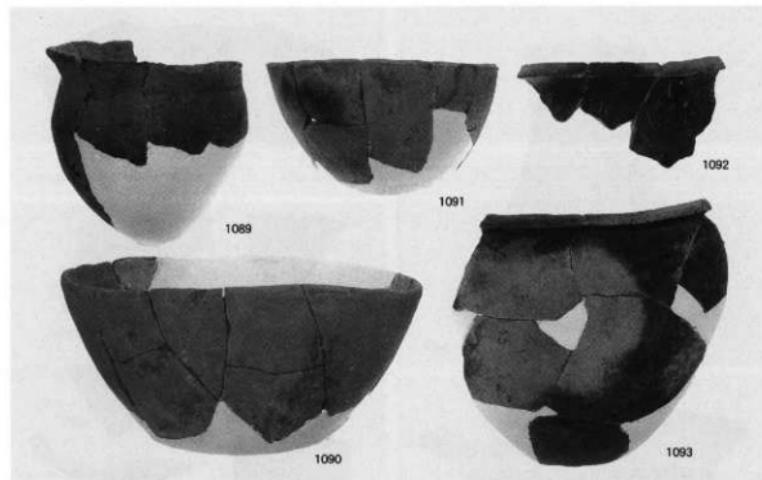


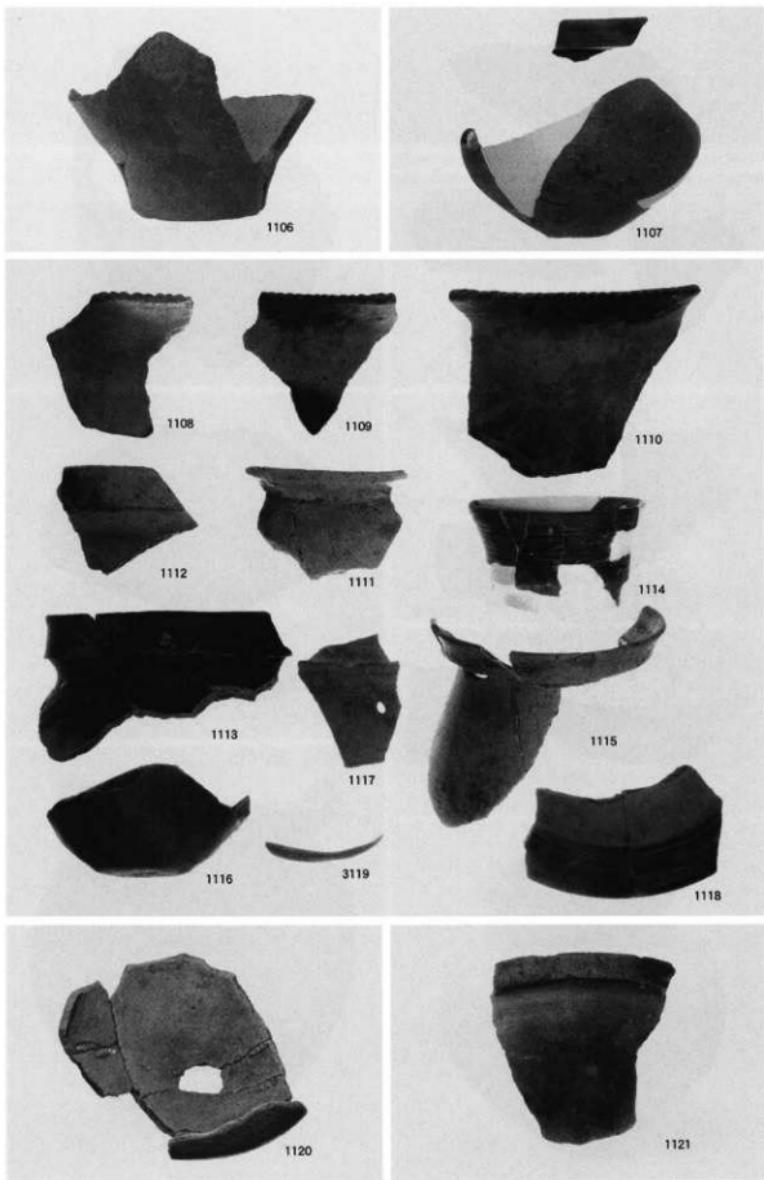
1072

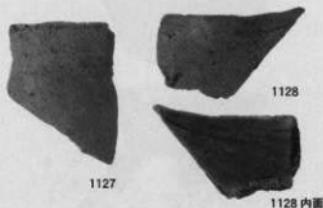
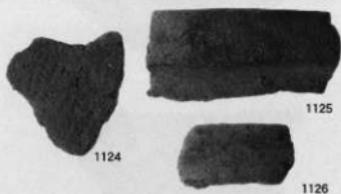


1073



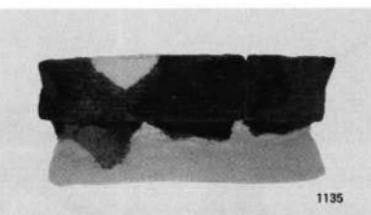








1138



1135



1130



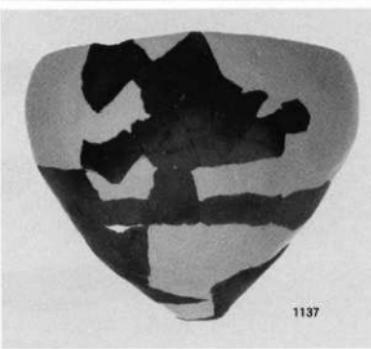
1136



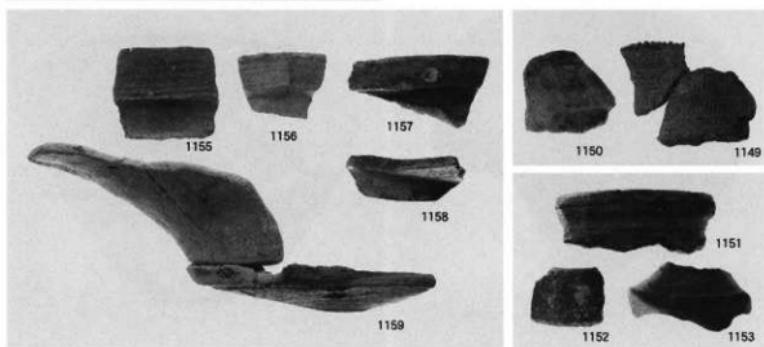
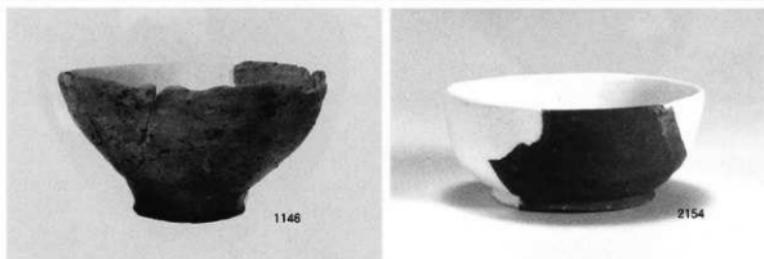
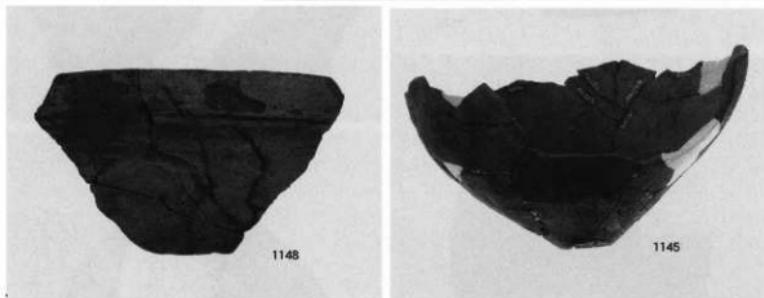
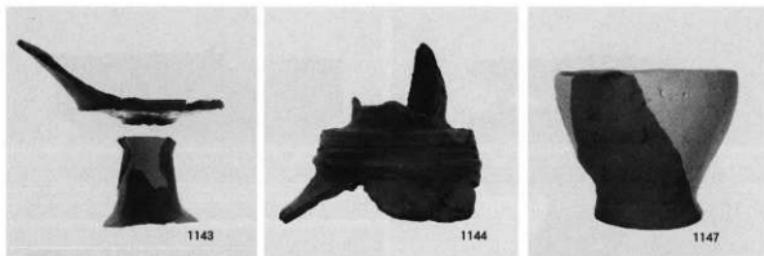
1142

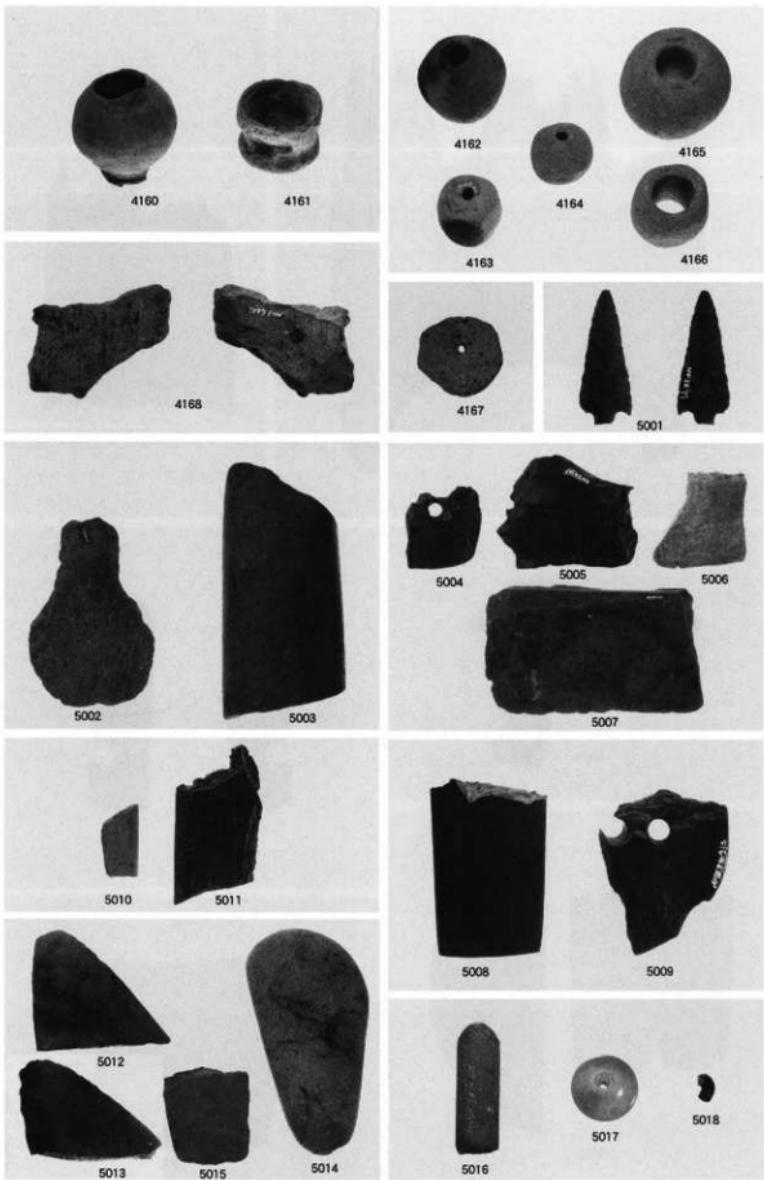


1139



1137







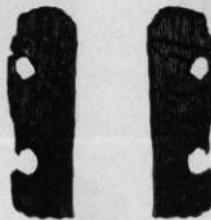
6001



6002



6004



6003



6005



6006



6007



6008



6014



6015



6009



6010



6011



6012



6013



6016



6017



6018



6019



1区北 SD03 挖削状況（南東より）



1区北 SB10 実測状況（南西より）



1区南 SD22・23 挖削状況（北西より）



1区南 南東端 挖削状況（南東より）



排水作業状況



2区北 東端 挖削状況（南より）



3区北 遺構掘削状況（北より）



3区南 SK18 挖削状況（南より）

報告書抄録

ふりがな	なかそねにしいせきちょうさほうこく							
書名	中曾根西遺跡調査報告							
副書名	平成15年度 県道姫野能町線改良工事にともなう発掘調査							
シリーズ名	高岡市埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	13							
発行機関	高岡市教育委員会							
編著者名	土任隆 村尾政人 根津明義							
編集機関	国際航業株式会社							
所在地	東京都千代田区三番町5番地							
発行年月日	西暦 2005年 3月 21日							
所収遺跡	所在地	コード		北緯 °'\"	東経 °'\"	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
中曾根西遺跡	富山県高岡市 中曾根	016202	202120	36° 46' 5"	137° 4' 10"	20030910 ↓ 20031226	6,200 m ²	県道姫野能町線 改良事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物				
中曾根西遺跡 (姫野能町線 地区)	散布地	弥生 古代 中世	櫛立柱建物 方形周溝墓 土坑 溝 井戸	弥生土器・古代須恵器・古代瓦・中世土師器・珠洲 近世陶磁器 木製品(井戸枠・田下軸・鉄斧柄・結繩・ 板・棒) 石器(磨製石斧・磨製石劍・磨製石戈・ 石包丁・石鋸・石礫・敲石・磨石・砥石)・玉類				

高岡市文化財報告書 第13冊

中曾根西遺跡 調査報告

—平成15年度 県道佐野能町線改良工事にともなう発掘調査—

平成17年3月21日

発行者 高岡市教育委員会
富山県高岡市広小路7番50号
編集者 国際航業株式会社
東京都千代田区三番町5番地
印刷所 キクラ印刷株式会社
富山県高岡市播磨48-2
